葛城高校サバゲー部 ～サバゲーなんかやらないんだからね！～

せきにゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
葛城高校サバゲー部　～サバゲーなんかやらないんだからね！～

【Ｎコード】
Ｎ７５２７Ｐ

【作者名】
せきにゃ

【あらすじ】
これは西暦５億３０７万２０１０年における、葛城高校サバゲー部の活動日誌である

プロローグ（前書き）

プロローグ

時代を遡る事、西暦7万年頃。地球は全球凍結に見舞われた。温室効果ガスの排出を止められなかった人間達の所業により、赤道をも覆い尽くす過酷な氷河期時代に突入したのだ。

生命は息絶え、あらゆる生態系がリセットされる事を余儀なくされた、かと思われた。

こんな窮地の中であれ人類は息絶えるどころか、命を削る戦争を続けていた。

地球全土の七割ほどの国が加盟する地球同盟政府。その支配国の人間達は、テラフォーミング化された火星へと移住する。また、反地球政府国家連合の支配下の人々は、巨大な人工惑星を宇宙空間へと建造し、そこへ移住を開始した。

地球の危機などどうでもよい人間達は、凍った母星をガン無視して苛烈な宇宙戦争へと突入した。

圧倒的な物量で押しまくる同盟軍（火星）であったが、宇宙コロニー（連合国）に現れ始めた特異な能力者、通称「新型」人種の活躍もあり、同盟軍・連合軍とも均衡した戦いとなる。後に、これは第一次宇宙大戦、またはその戦争期間から「１００年戦争」とも呼ばれる。

名を変え品を変え、ドンパチを3億年ほど続けた頃、当時数百にも上っていた人工惑星が綻びを始める。更には当時母星とされていた火星までも、（温室効果ガスを溜めまくった結果）全球凍結を開始してしまう。

この時、まだ木星のテラフォーミング化は完全ではなく、人類は逃げ場と戦場を失ってしまった。

一艘の宇宙戦艦が、温室効果ガスを撤去するという未知なる物質を得るため宇宙の彼方まで飛んでいくが、どうやら道中に異星人の襲撃を受けたようで戻ってはこず、結局、人類は1億人ほどしか住

めない木星への移住を余儀なくされた。
人工惑星、火星在住者、合わせて１２０億人もの人口を、やはり戦争で１億まで減らすのかと思われたのだが、人類は意外な選択をした。
じゃんけん。
まさかの「じゃんけん」で木星への移住者を決定しようとしたのだ。人種別に行われた「じゃんけん大会」の結果、残った１億人が木星へ移住する。
１１９億の人間の命と引き換えに生き延びた人類は、漸くコソコソと慎ましく暮らしていく……かと思われたが、やはり戦争を開始し、人工は３０００万人まで減少した。
と、その頃。タイミングを見計らったかのように、地球の氷が解け始め、３億年ぶりに青い星へと戻っていた。
残った人類は「もう、本当に戦争は止めようよ！」と手を取り合い、２億年の歳月を待って地球へ帰郷する。実に、５億７万年ぶりに地球へと帰郷する事になった。
そうして戻った地球は、西暦２０１０年で言う、「新生代、第四紀」みたいな感じだった。それはちょうど氷河期が終わりを告げ、哺乳類と鳥類が跋扈する時代の狭間、猿人の出現が確認される頃である。
木星より帰還した人類は精神的にも困憊しており、同化政策と銘を打ち、原始時代さながらの生活を送ることにする。が、しかし、人類はその叡智とゴキブリ並の生命力をもってして、すぐに勢力と精力を取り戻す。
３００万年も経った頃には、人類は食物連鎖の頂点にまで上り詰め、漸く大地へ蘇った動物達を、特に意味もなく、全て絶滅に追い込んだのだ。
人口もウナギ昇りに上昇し、一度は捨てた科学技術を産業革命により再び手中にすると、またも好き勝手に戦争を始めたのだ。
人類は結局、以前と寸分も違わぬ歴史を繰り返し、西暦２０１０

年と１ミクロンも変わらぬ現状となっていた。

これはそんな、西暦５億３０７万２０１０年の御話である。

第一章　（一）

蟲も鳴きやむ丑三つ時。暗いリビングに光ったホーム電話のディスプレイ。

彼女は背中を丸め、声を静め、冷たい汗を一筋流しながらも定期報告に励んでいた。

「はい。今週のイケメン情報は以上でございます。お姉さま」

洗いざらいの情報を伝えた後、電話越しの主は思わぬ一言を告げたようだ。

「そ、それは本当ですか！　なぜ、こんな時期に……あっ！」

彼女は口を手で押さえた。驚きのあまり大きく開いた口を閉じたのだ。暗い周囲を目玉で見回し、寝静まった家族には気づかれていないと彼女は悟った。

声をしおらせ、主からの会話へ応答する。

「はい……そうですか。お姉さま達の情報網をもってしても、詳細は謎……ですか。同学年ということならば、私の方からも色々と探ってみます。彼女も、私達と同じ志を抱いていればよいのですが……」

青いディスプレイの光が、彼女の分厚いメガネを照らしていた。

「それでは定期報告を終了いたします。明日もよき、ＢＬ日和であらんことを……。

葛城乙女倶楽部、万歳」

彼女は電話に向かい、一礼する。

主が電話を切った事を確認するまで待ってから受話器を置いた。

眼球が歪んで見えるほどに分厚いメガネを光らせると、彼女は黒いおさげ髪をゆらしながら暗いリビングを後にする。

自室へ戻ると、ため息混じりに大きな窓の前に立つ。

無地のパジャマに、大きな胸。そこに彼女は拳をあてた。
「ごめんね……亮君」
窓の先には、隣家の窓。「うっしゃぁ！　女子アナ流出動画ゲットだぜぇ！」と声を上げて踊る人影。
そんな隣家の窓に向け、彼女は深く陳謝した。

第一章　（二）

早朝八時。この日も彼は、元気だった。

「ふざけんなぁ！　昼飯２００円で何が食えるんだよ！　中流階級のサラリーマンでも、せいぜい２８０円だっつてんだろがぁ！　これが何の値段か分かるか、あぁ！？　牛丼並だ、ボケェ！」

自宅の玄関口にしがみつき、上杉亮介は巻き舌で家屋内へ怒鳴りつけていた。

「はぁ？　楠木町の牛丼屋が半額セール？　うっせぇよ！　誰が昼休みに隣町の牛丼屋まで並を食いに行くんだよ、並を！　仮に行ったとしてもだ。帰り道には腹が減りだすろうが！　高校男児のカロリー消費なめてんじゃねぇぞ！」

玄関越しで食い下がっていた亮介だったが、最後には玄関中から飛び出してきた女性の足に蹴り飛ばされた。

ドンと尻餅をつき、荒々しく閉じたドアに中指を立てる。

「クソぁ！　帰ってきたら、ぜってぇテメーのエクレア食ってやるかなぁ！　お前の部屋の冷蔵庫に６つ隠してあんの知ってんだぞ！　糞ババァ！」

こんな隣家の光景を、彼女は自宅の門の前で見つめていた。分厚いメガネに昭和風情漂うおさげ髪。そんな風貌に規定通りの長いスカートはとてつもなく地味であり、テレビ番組で金持ちカリスマデザナーのパフォーマンスがてらにビューティチェンジの対象に選ばれそうなほど、ダサイ女生徒だった。

そんな彼女に、亮介が活気良く跳ねる黒髪を掻き毟りながら歩み寄ってきた。

「お、おはよう。亮君。お……お兄さんと、喧嘩？」

なぜか、彼女は頬を赤らめながら言った。

「あぁ？　なんでだよ。兄貴なんか正月から帰ってきてねぇよ。つーか、姉貴だろ。見てなかったのか、紗江」

隣家の山吹紗江。お隣さんという設定上、もう完全に幼馴染である。初めて出会ったのは出生直後の出生児室。三十秒差で産まれた二人は、隣合わせのベッドに寝かされ、互いの親同士も幼馴染であることから、その場をバッチリと捉えた写真が残ってしまっているほど、生粋の幼馴染である。

二人は阿といえば吽という仲であり、ツーといえばカーという仲である。何を言わずとも、紗江には大方の事が分かっている。例えば、昨晩亮介が発見した「女子アナ流出動画」が、まるっきり別人だという事も分かっている。

逆に言えば、亮介とて紗江の事を分かっている。

「お、おい……あ・ね・き！　だからな！　変な想像すんなよな！」

亮介は見抜いていた、紗江が頬を赤らめたその理由を。

彼女は、世間的にはマイノリティな趣向を持った女性。一般的には「腐女子」とか「ＢＬ趣向」とかなんとか言われているだが、亮介はこう呼んでいる。

『修羅』

自らの欲望に恥じることなく万進する様は、まさに修羅なのだ。そっち系の話をよくご存じで無い方のために、彼女が見ていた雄大なる妄想を紹介しよう。

以下、山吹紗江による偏見的妄想である。

キラキラでピンク色の背景の中、一人の超美青年がスーツ姿で部屋へ入ってきた。

「どうしたんだ、亮介やけに帰りが早いじゃないか」

超美青年はネクタイを外し、ソファに座った。そしてゆっくりと、細く美しい手を、弟の頬に添えた。

弟の亮介は、なぜか学生服のＹシャツボタンが外れ、華奢な胸板が見えている状態で、目を潤ませた。

「だっ……だって、兄さんが昼飯代２００円しかくれなくて……俺、もう、体力が」
涙目で顔を背ける弟。兄は頬から顎へ撫でるように指を這わせた。
「エクレア……食ってやるんじゃなかったのか？」
「だって、本当に食べたら……兄さん怒る、から……」
「馬鹿だな……亮介は」
兄は顎にかけた指で優しく弟の顔を引き寄せた。そしてどこから取り出したのか、クリームたっぷりのエクレアを弟の眼前に翳し、不敵にほほ笑んだ。
「欲しいなら、いつもみたいに、ねだってみろよ……亮介」
「あっ……あぁ……はい。兄さん」
なぜか、兄もカッターシャツのボタンを外し、胸板をあらわにした。

以後略。

実際、亮介の兄は超美形であり、亮介も超がつく美少年なのだが、紗江の脳はその二人をこんな感じに絡ませてしまう。ましてやここは早朝の実家の前。こんなほくそ笑む顔を親にでも見られたらどうするつもりか。
そこで怖気つく様ならば、彼女は修羅とは呼べないだろう。
恥じることなく破顔し、喧嘩相手が姉だったという現実を亮介に聞かされたのならば、恥じる事なく落胆する。
それが修羅である。
「おい、なに肩落としてんだよ」
紗江はがっくり肩を落とし、意気消沈したような声で返答した。
「えっ……いや……落としてないよ」
「落ちてるっつーの！　完全に妄想してただろ、俺と兄貴で！」
「えっ？　……あぁ。うん……ごめん」
紗江のあまりの落胆ぶりに、亮介は悪い気がしてきてしまった。

「い、いや……別に、いいけどよ……。なんつーか、朝っぱらから妄想されると、ちょっと気分よくない、ていうか」
頬をぽりぽりと掻きながら、目線を逸らせた。亮介が特別怒っている様にも見えないが、紗江はお婆ちゃんに捨てられる子猫のような切なげな悲愴感を浮かべ、すぐにビシっと背筋を伸ばし気を取り直した。
「ご、ごめんね！　もう妄想しないから！　もう全然しないから！　後は家に帰ってから……」
「……いや、家でも止めてくれよ」
「えっ……そ、それは……」
折角伸ばした肩をしょんぼりと落とす紗江を見て、亮介は仕方なく許可してしまうのだ。
「わ、わかったよ！　家では好きにハチャメチャにしてくれていいからぁ！」
「ほ……本当に？」
静かな声で、分厚い眼鏡越しに上目使いをした。そんな紗江に軽く動悸を鳴らせて、亮介は顔を赤らめた。
「お、おう！　す、す、す、好きにすればいいだろ！」
「ありがとう、亮君」
あっさりと姿勢を伸ばし、淑やかな微笑みを亮介へ送った。亮介は暫しそっぽを向いているも、突如何かを思い出した。
「あ、じゃあ妄想ＯＫの代わりに、今日弁当よこせよな」
「うん。お父さんとお母さんが旅行って聞いてたから、お弁当二つ作ってるよ」
「マジか！」
亮介は大きな瞳を輝かせた。どこかヤンチャな幼さも残る陽気な顔は、まさに美少年。
そんな美少年の亮介が、満面の笑みで、
「ありがとな！　やっぱ、持つべきものは幼馴染だな！」
などと言うものだから、紗江もまた顔を真っ赤に染めてしまった。

「おっし、これで昼飯の心配は無しだな！　遅刻すっし、行くか！」
「うん」
こんなイチャイチャをイチャイチャだと気付いていないからこそ、二人は幼馴染なのだ。
こうしていつもの様に、並んで学校へ向かった。

第一章　（三）

二人が上履きに履き替え校舎の階段を上がってくと、廊下のどこから男性生徒の叫び声が耳に入った。
「おい！　山本が倒れたぞ！」
紗江はハッと顔を上げた。廊下の先に、男子生徒が倒れていたのだ。すでに数名の生徒が野次馬の如く生徒に群がりつつある。
「おいおい、新学期早々だらしねぇな。また貧血かぁ、山本は」
とか言いつつ、すごく楽しげな亮介は足取り軽く山本へ駆け寄っていった。
こんな亮介に、紗江は紅潮していく耳の温度を感じた。

――――も、もしかして、これは！　（男と男による）人口呼吸！？

ドキドキと高鳴る動悸。走りゆく亮介のカッターがボヤケてしまうほど、目が血走っていく……。
だが、こんな妄想を一つの声が打ち消した。それは、女性の声だった。
「動かさないで！」
架空世界から引き戻されてしまった紗江は、「あぁ……」と洩らしながら現実を見た。男子生徒を掻き分け、やたらとグラマラスかつセクシースーツの女性教諭が山本に歩み寄ったのだ。
女性教諭は山本の前に膝をつき、長い髪を耳にかけた。
「山本、意識はあるか？」
女教諭が山本の上半身を抱き上げると、山本は朦朧と薄目を開けた。
「せ……先生。先生が、あんなに宿題……いっぱい出す、から……」
山本が全くもって意味不明な言葉を言い終えた瞬間、再び男子生徒が声を上げた。

「おぁい！　亮介！」
その声に、生徒一同は亮介へと振り返った。
見えたのは、宙を舞う鮮血だった。
ドサっという重量感ある音を伴い、亮介は猛烈に鼻血を垂れ流し床に倒れて目を回していた。流血に染まったその顔は、ニヤニヤと満悦そうに笑っている。
一瞬の間に起きた不明瞭な出血。それを解決するには、亮介の脳内を見てみるしか方法が無い。
見てみよう。
以下、亮介の妄想である。

山本は、飼われていた。あの、葛城菫によって……。
（菫ルート）
山本は、朦朧とする意識の中、菫の肩を借り保健室へと連れて行かれた。
「ご、ごめん……先生」
目を閉じる山本に、菫は口元を不敵に吊り上げた。
「いいのよ」
保健室へ行くと、なぜか保健室の先生はいない。
二人だけの空間に、菫はガチャっと鍵をかけた。
「先生？」
不安げな顔を見せる山本。菫は彼の前にある灰色の椅子へと座り、おもむろに足を組んだ。丈の短いスカートからは、例のブツが見えそうで見えない。
「宿題、ちゃんとやってきたのよね」
冷たくも、ねっとりとした声が山本を突き刺した。
山本はビクっと体を震わせると、もじもじと内股になってゆく。
「む、無理だよ……あんな量……お、俺にできるはずが」

その時、菫はどこからか取り出した指し棒で床を叩いた。そして、指し棒の先を妖艶な舌でペロリと嘗める。
「そう……それじゃ、お仕置きが必要ね」
「だ、駄目だ……。ここ、学校だよ……先生。いつもみたいな……あぁぁっ！」
ビシッ！　風を切り裂き、指し棒は山本の太股を打った。
「うるさいわね。この学校の理事は私なの。何をやっても、揉み消せるのよ」
「そ……そんなぁ！」

最も過酷と言われる菫ルートに、山本は突入したと、勝手に妄想していた。
そのようなエロ妄想の挙句、亮介は大量の鼻血を噴出していたのだ。
彼は、思春期という時代の全てをエロ道に捧げる健全な青少年なのだ。エロゲームに始まり、エロ系同人誌に到達。はたまたエロ系Ｖシネマ、道端のエロ本自販機、山に捨てられた所有者不明のエロ本探しなど古典的手法から、１８禁エロ系ネットサイトから芸能人流出動画取得など、近代的手法までを使いこなす。将来の夢はヌードカメラマンであり、希望する死に場所はヌーディストビーチといった、骨の髄までエロい事しか考えられない男、それが上杉亮介の正体なのである。
２４時間エロだけを考え続ける彼は、いつでもどこでも鼻血を流し倒れこむ。
故に、彼はこう呼ばれた。
「鮮血のエロ魔人」
つまり、こうして鼻血を流し目を回すことなど、日常茶飯事なのである。

一人の生徒が呆れながら周囲へ叫んだ。
「おぉい！　介護師はいねーのか！　亮介が倒れたぞ」
これに反応したのは、紗江であった。
「は、はい！　ここにいます！」
随時亮介にべったりの紗江は、介護師と任命されていた。
紗江は亮介へと走りながら学生鞄に手を入れると、そこから、透明なタッパーと箸を取りだす。そのまま亮介の横にしゃがみ込むと、タッパーの中から赤い物体を摘み上げた。
「亮君！　生レバーだよ！」
いつでもどこでも鼻血を連発する亮介は、生レバーを食す事で蘇る。要は、これで急速な血液不足を補おう、ということらしい。ほうれん草から健康製品まで色々と試した結果、鉄分豊富な生レバーが最も治りが早いことが判明したという。
そんな努力の結晶の生レバーが今、紗江の箸から生レバーがゆっくりと亮介の口へ……。
瞬間！　紗江の腐った耳がよからぬ声を捉えてしまった。
「そこの君、山本を保健室へ」
女教諭が、男子生徒Ａへそう告げたのだ。
「おい、山本？　大丈夫か？」
山本を抱え上げる……男子生徒Ａ……。

――――ま、まさか！
以下、紗江の妄想。

それは、二人きりの保健室。
「何やってんだよ……山本」
「い、いいのに……俺のこと、なんか……うっ！」
胸を押さえ苦しむ山本。男子生徒Ａが濡れタオルを片手に、山本のＹシャツのボタンを外した……。

そんなこんなで今日も絶好調の妄想力が、紗江の顔を激しく紅潮させる。めくるめくボーイズラブ眼は、分厚いメガネを通すことで一般生徒すら美少年に変えてしまうのだ。

そして、沸騰した。

鮮血が、宙を舞う。

「お――――い！　介護師もやられたぞぉ！」

紗江は、ついに生レバーを亮介に届ける事なく自爆した。

鼻血を垂れ流し横たわる二人に、ある生徒が呟いた。

「は、初めてみたぜ……これが噂に聞いた、鮮血の介護師……いや、鮮血のバカップルか」

その数分後、二人は生レバーを食べて回復したという。

第一章　（四）

この葛城高校について説明しよう。順を追って見ていくため、体育館へ移動する。

まず見えてきたのは体育館の鉄の扉である。鍵はいつも開けられているのだが、よく見ると鍵穴にはナイフ等の切り跡が多数見受けられる。つまり鍵がかかっていないのではない。掛けられないのだ。

次に、体育館の床を見てみよう。砂埃で真っ白である。下足靴の跡も見受けられ、木製の壁には焼かれたような小さなコゲ跡は、高校生ご用達ロケット花火の痕跡である。

最後にステージに目を向けよう。壇上の机は半分に割れて、木片が刺々しくむき出しになっている。　背後にある幕には無論「S○X」とデカデカとスプレーで書かれており、手前の緞帳には白いスプレーで解読できない英字みたいなものが描かれている。背後の幕からやや目線を上にあげると、そこには巨大な横断幕が張られていた。

「治外法権！」

そんな文字が横断幕には書かれていた。

この学校、実はあまり良くない人達が運営している。表立って良くない人達が出てくる事は無いのだが、巷ではそう噂され、たぶん本当にそうである。

そんな学校に来る者は、基本的にはお馬鹿ちゃん達であり、全国模試におき平均偏差値１８という、ほぼ大半の生徒が名前を書いて出しただけ、という偏差値だ。

あるジャーナリストはこう言った。

「葛城卒業生と、無免許無資格の脛かじりニートが就職の面接にきた場合。私は迷わずニートを選ぶだろう」

そう言った三日後、ジャーナリストは何者かの襲撃を受けたという。

当然の如く、女生徒の数は限りなく少ない。どの親とて、こんな学校には通学させたくないのだ。
生徒数１２００名の内、女生徒の数は４０名ほど。
そしてその大半の女生徒が「葛城乙女倶楽部」という腐女子サークルに属している。
容姿は全員、下の段。というか、全員が分厚いメガネにブローもかけない黒髪をギュギュっとお下げにしているので、見分けがつかない。同サークル会員でもある山吹紗江の容姿そのものが、その他全員の容姿でもある。
そんな彼女らが男子生徒に話しかけられる事など、亮介という幼馴染を持つ紗江を除いて、極めて稀なことである。
視点を変えよう。葛城高校の女生徒不足は、男子生徒にも深刻な問題である。恋愛と性行為になんら差異のない年頃にて、男子生徒の欲求不満は限界点に達していた。
そんな中、葛城高校に救世主が現れた。
「雅司（みやびつかさ）」。彼は、乾燥し切った灼熱の地に現れた、オアシスそのものだった。
彼。つまり男である。しかし、その容姿は果てしなく美しく、可憐で、キュートだった。華奢な体に、肌理の細かい白い細腕。なびく髪の毛は糸より細くやわやわしい。
どうしても彼を美少女と認識したいこの学校の生徒会は、その欲望のために総会を開いた。
「雅司は、スカートを履くべきである！」
と、ある生徒があのボロボロの体育館で宣言し、
「おおおお――――――その通りだぁぁ――――――――――――」
という多数の声により、雅司はスカートを履く事が校則で義務づけられた。だが、司は当然これに反発し、友人である亮介を含む「三人の生徒」が猛反発した。
更には、
「美男子は、美男子だからこそ意味がある！」

という、腐女子サークル「葛城乙女倶楽部」の予想外の合いの手もあり、一度は決定した「雅司のスカート着衣義務」も緩和された。
雅司は、毎週金曜にスカートを着衣する。
このように決定され、まぁ週一ならいっか、というエロ魔人亮介の軽い裏切りもあり、毎週金曜に司はスカートを履かなければならない運びとなったのだ。
ちなみに、なぜ金曜なのか？　というと、土・日が休みなので、その余韻に浸れるためだ。
そして、二学期初日のその日は、金曜だった。

「亮介……亮介……」
生レバーを口にして数秒後、亮介はぼんやり意識を取り戻した。
「いっ……あぁ……司……か」
ボヤけて見えるのは猫のような大きな瞳。薄茶色のサラサラの髪。
「悪いな……俺、また……」
「よかった、意識戻ったんだね」
聞こえてくる甲高くも穏やかな美声。
良く見れば自身を抱える細腕は、紺のブレザー制服（女性用）。ベージュに、黒いモザイクが散らばる……ミニ……スカート（女性用）。
亮介は、絶世の女子高生に抱えられていた。
「ぶっふばるとぉぁ――――――――――――――――」
亮介は、再び鼻血を噴射した。
「わっ……ちょっと、やめて亮介！」
司は、噴射された鼻血を片手で防いだ。
「ちょ、亮介！　なに？　なんで僕を……」
必死で鼻血を避ける司の肩に、何者かの手がかかる。その手は大きくも細長く美しい。司が振り返ると、そこには面長の輪郭に切れの鋭い目立ちをした、エリート官僚風大人系イケメンが聳えていた。

第一章　（五）

「ちょ、亮介！　なに？　なんで僕を……」
必死で鼻血を避ける司の肩に、何者かの手がかかる。その手は大きくも細長く美しい。司が振り返ると、そこには面長の輪郭に切れの鋭い目立ちをした、エリート官僚風大人系イケメンが聳えていた。
「ダイ……亮介が」
司は、子猫のような潤んだ瞳で官僚を見つめた。こんな司の健気な涙目に、周囲に集まった野次馬男たちが一斉に唾を呑みこんでいる。だが、長身の男は顔色一つ変えやしない。冷静な面持ちのまま、黒髪を書き上げ、すっと下方を指差した。
「司……今日、スカートだ」
やや太めの声に、司は自身の下半身に目を向けた。
「い、いやぁ！　忘れてたぁ」
血まみれの亮介を放り投げ、内股を抑えるようにスカートをギュっと握る。
「おお〜〜〜〜〜〜」
いぶし銀のような嗄れた歓声が周囲にこだまし、最終的には拍手をする者まで現れた。
「ちょっと、やめてよみんな！　亮介がこんな時に」
顔を赤らめ目を潤ませながらも怒る姿が、なんともイジらしい。
唾を飲み込むその音が、もうどこから聞こえてくるかも分からない程に膨れ上がった。
こんな奴らを相手にしていられない。そう察したのか、司は周囲を見渡した。
「紗江さん？　紗江さんどこぉ？」
「こ、ここぉ、ですう〜」
紗江の声は、かなり近くから聞こえてくる。しかし、こもった声は何かの物体に遮断されているようだ。

ツンツン、と官僚が司の肩を指ではじく。
「なに！？　大五郎と呼ばれた男は、これまた目蓋一つ動かさずに下方を指差す。
「そこに、いるぞ」
司がその指の先を追うと、そこには司が放り投げた亮介が……で！　その下に女生徒のブレザーを発見した！
「ここですう～」
ブレザーの腕が力なく挙手をした。司は事情を察し、というか自分のせいで亮介の下敷きになった紗江を救いだした。
「ごめんね。紗江さん」
「……いえ。慣れて、ますから」
紗江は分厚いメガネをかけ直した。血液不足でふらつく頭だが、亮介が二度目の噴射を行った事は分かっている。
「早く……生、レバーを……」
紗江は司に生レバーを託そうとタッパーを持ちあげた。その時、紗江の鼓膜に、気になる低音の声が振動してきた。
「つかさぁ！」
紗江を抱える司に対し、大五郎が血相を変えて飛び込んできた。彼は見つけたのだ。司の指に、かすかな血液が付着している事に。
「いつこんな怪我をしたんだ！」
冷静だった大五郎が、細見の体を曲げて司の手を取る。そして、その血液が付着した司の指を、ペロリと嘗めたのだ。
「あがぁしぃ――――――――――――」
不明な声と共に、紗江は再び噴射した。
「ちょ、紗江さん！　紗江さんってば！」
司の呼び声もむなしく、紗江の視界は真っ白に染まっていく。兼ねてから親交の深い司は、紗枝の鼻血の意味を重々理解しており、この場合は自身と、特に大五郎の悪戯のせいだと察しえた。
「ダイ！　これ、亮介の血だよ」

これに、大五郎は青ざめた。
「なっ……ん、だと？」
すぐさま身体に異変も起きてくる。異物を混入した喉は絶対的な拒否感を示し、波打つように胃液を押し上げてくる。大五郎は冷静を装いつつも、足早に廊下の隅へ行ってしまった。
「ダイ？」
司が不安げに男を見つめていると、大五郎は「ペッ、ペッ」と血液を口内から除去するように唾を吐き始めた。
「なに……やってるの……」
司の呼びかけに漸く反応した大五郎は、静かに口元をハンカチで拭きながら倒れた亮介へと歩み寄ると、放心する亮介の肩をつかんだ。
「りょうすけぇえ――――。しっかりしろぉお――――――――――――――」
異物を除去した上で、彼は亮介の友人に戻った。
本当に心配しているのかは懐疑的だが、司はあえて、触れないでおいた。
大吾郎の言動は良く理解できなくて普通なのである。
司と大五郎とあの男は、亮介にとって中学時代からのよき友人でもあり、たいていの行動を共にしている。
とりわけ大五郎と亮介とあの男は「1年馬鹿の三本柱」として、生徒達からも一目を置かれる存在である。亮介の持つ「鮮血のエロ魔人」というニックネームに対抗し、大吾郎は、
「冷徹なる、馬鹿メガネ」
そう呼ばれていりもする。
ちなみに司は、ニックネームはない。金曜日以外は、基本的に薄いキャラなのだ。
「そんなぁ！」

第一章　（六）

一年教室棟で鮮血が舞う頃、薄暗い下足場の隅で、この学校では見慣れた行事が慎ましやかに行われていた。
「てめぇ。頭下げて済むと思ってんのかよ、あぁ？」
下足場の隅で、一人の生徒が、一人の生徒によって追い込まれていた。
「ぶ、ぶつかったのは、俺の不注意だ。す、すまなかった。だ……だから、これを……」
金髪のチャラチャラした感じの男子生徒は、鞄からのど飴を大量に取り出した。鼻先までやってきては眼を飛ばす男へ、それらを献上するために。
だが、金髪チャラ男ののど飴を見るなり、男は胸倉を掴み上げた。
「ふざけてんのかテメェ！　そんな飴玉ごときで、俺様のロリポップの代償になると思ってんのか！　あぁ――――――――！？」
ロリポップとは米国名であり、和名で言えばペロペロキャンディである。
チャラ男に詰め寄る男は無類の糖類好きであり、完璧に成人病予備軍の射程範囲に入っているほど、甘いものに目が無い男。だが、そんな事はあまり知られておらず、その怒りっぽい性格で有名な男児であった。
水無月冬治。左右非対称なウルフカットという、西暦５億３０７万２０１０年でも時代遅れなヘアスタイル。かつ、右側だけ長く伸ばした前髪にだけ銀色メッシュを施すという、西暦５億３０７万２０１０年でも余裕で時代遅れなヘアスタイルだった。
だが、そんなヘアがお似合いだと思ってしまうほど、超イケメンでもあった。時代遅れな感を、獣の様なワイルドな目つきと凛々しい輪郭で亡き者にし、また喧嘩っぱやい性格が相乗する事で「イケメン不良」という女子高生にはたまらない一品となっている。

そんな冬治が、ロリポップの件についてブチ切れていたとしても、それでもカッコイのである。
「俺様のこれはなぁー、ロスから直輸入してんだよ！　スーパーでほいほい買える代物じゃねぇんだぞ！　分かってんのかぁ、あぁ――――！？」
豹のように鋭い目つきでメッシュを揺らす。血走る視線に、金髪生徒は冷や汗をかきながら顔を反らせた。
「だ、だから、悪かったって……」
「それが、人に謝る態度かよ！　オラぁ！」
メッシュは痩せマッチョな腕でぎりぎりと制服の首元を締め付けていく。金髪は息を止められ、血液循環も止められ、顔を真っ赤に染め上げる。
「がっ……ま……」
口には次第に気泡が溢れ、視線も虚ろに遠くなっていく。
それでも、メッシュは力を緩めない。男の視界が落ちていこうとした……その寸前だった。
キーンコーン……と、ホームルーム開始のチャイムが鳴った。
これを機に、メッシュは手を離した。生徒は床へへたり込み激しくせき込んだ。
「っち……てめェ、今度会ったら、ぜってぇぶちのめす！」
案外時間にきっちりしている銀メッシュは、下足場を後にした。男の姿が見えなくなると、金髪チャラ男は呟く。
「はぁ……、どうせ……顔も、名前も……覚えてねぇ……くせに……バカが」
その瞬間、遠く廊下から怒号が聞こえてきた。
「なんだとテメェ――――！　今なんか言っただろ！」
メッシュが超ダッシュで下足場へ戻ってきたのだ。
「言ってねぇ！　俺は何も言ってねぇ！」
「どうぜ顔も名前も覚えてねぇくせに、バカが！　とか言っただろうが！　あぁ！！」

「全部聞こえてる！」
冬治はもう一度金髪の襟を締め上げて、今度はちゃんと気絶するまで締め続ける。もう金髪の意識が無くなるとその場に投げ捨て、冷徹な視線を向けた。血走った先の目とはまるで違う、とても冷めたい面持ちだった。
「お前……つまんねぇな」
鳴り響くチャイムの中、冬治は教室へ向かって行った。

第一章　（七）

さて、ここは1年3組。亮介は犬のように生レバーのタッパーにかぶりついていた。
「ほら！　紗江も食えよ！」
隣の席にいた紗江にタッパーを差し出すも、紗江は手を横に振った。
「いいよ……そろそろ先生来ちゃうから……」
「あっそう。じゃ、全部食っていいか？　さすがに早朝に二連射はキツいわ」
「う、うん。予備もいっぱいあるから」
亮介は「サンキュ！」と言いながらガツガツと生レバーを頬張っていった。
そんな中、バシっと荒く教室のドアが開くと、喧噪感に満ち満ちた銀メッシュがやってきた。
冬治は床を踏み鳴らし教室を進むと、亮介の後の席へと鞄を置く。どうにもむず痒いナマモノの匂いが鼻腔に届くと、カッ！と恫喝する。
「おいぃ亮介！　朝っぱらからクセェんだよ！」
机の脇から足を伸ばし、亮介の椅子の足を蹴り飛ばす。
亮介はタッパーを持ったまま平然と彼へと振り返った。
「悪りぃ悪りぃ。今、血が足りねぇんだわ。……ん？　冬治、飴ちゃんは？」
「うるせぇ！　今その話すんじゃねえよ。後、飴ちゃんって言うな。関西人かてめぇは！」
「あぁ、お袋が関西人だ。つーか、中坊の頃会っただろ。今でもめっちゃ関西弁」
淡々と話す亮介に比べ、冬治の心境は穏やかではなかった。自分から話しかけておきながら、――――話しするのめんどくせぇ――――

といった様子でプイっと顔を背けてしまった。
亮介は亮介で――――まっいつもの事だ、放っておこっ――――的な様子で再びタッパーの生レバーに食らいついていった。
先のチャイムから十分ほど経った頃、ようやく教師が教室へやってきた。
「うーっす。って、けっこう来てんなぁ」
廊下で見たグラマラスな女教師だった。彼女は火の灯らないタバコを咥えながら椅子にどっしりと座り、面倒そうに名簿を広げた。
「夏が明けっと、たいがい半分くらいになるんだがなぁ～。お前ら随分いい子ちゃんなんだな。全く……めんどくせぇ」
彼女は本気で面倒そうに言っていた。
ただこれが彼女の普通であり、この学校でのベターである。誰も否定せず、ツッコミの声すらかからない。いつも通りの安穏とした空気だけがここには流れていた。
そんな中、冬治がすくっと立ち上がった。入室早々苛立っていた彼である。たぶん、何かしでかすだろう。それが日常である他生徒達は冬治に一瞥もせずに自由に雑談をしていた。
冬治は無言で俯きながら、教壇へとゆっくり歩いた。面倒そうにタバコを咥える女教師の前まで行くと、冬治はぬっと顔を近づける。
「おい」
低い声で、彼女に言った。獣じみた目つきで睨む冬治に、彼女も一歩も引きはしない。
「あぁ？」
「吸わせろよ、それ」
「はぁ？　ふざけてんのか？　アタシだってまだ火つけてねぇんだぞ」
じっくり睨みあう二人。
「じゃあ、唇吸わせろ」
「あぁ？　意味分かんねぇんだよ。馬鹿もほどほどにしろよ、馬鹿」
「口がスースーすんだよ」

「つーか、顔近いんだよ」
「おい、そのデケぇ胸吸わせろ」
「殺すぞ、糞メッシュ。お前は、キャンディ嘗めてりゃいいんだよ」
その言葉に、冬治は頭を抱え叫びだした。
「うぉぁ――い！　それを言うんじゃねぇ！　それが無いから言ってんだろ糞ババァ！」
女教諭も憤慨した。
「ぁんだと糞メッシュ！　誰に向かってババァって言ってんだよ！　あァ！」
まだまだ若々しい女教諭は、冬治の胸倉を掴んだ。それに一歩も引かない冬治である。
「いいから黙って吸わせろよ！」
「ざけんな糞ガキ！　てめは、そこらのクソジャリとちちくり合ってりゃいいんだよ！」
「うるせぇ、そこらの糞ガキが眼鏡オタクしかいねぇんだろうが！　あんなのとちちくり合えんのは亮介だけなんだよ！」
激烈なる喧騒を他生徒は全く止めようともしない。あんな言われようをした亮介もまるで無反応。ようやくレバーを平らげ、満足げにゲップをしているほどだ。紗江などは、ここに亮介も参戦して欲しいなぁ……などと、むしろ嬉しそうに紅潮している。
司と大五郎は、別のクラスである。
亮介の前にいた生徒Bが、椅子を後へ傾け振り向いた。
「おい、亮介。ずっと思ってたんだけどよ。お前、冬治と菫ちゃんでは鼻血出ねぇんだな」
男子生徒Bは、前々から疑問に思っていた事を訊いた。貧血で倒れた山本と菫が絡んだ時、亮介は見事な鼻血を噴出したのだ。なのにどうして、これほど接近し罵り合っている冬治と菫では鼻血が出ないのか。そんな疑問だ。
「ん？　あぁ～。そうなだぁ」
亮介はぼんやり腕を組み、教壇の二人を見た。

「なんか、バランス悪くね？　スミレちゃんみたいなお姉さま系と冬治って。だからかな」
「ふ～ん……よく分かんねえ拘りだな」
「まぁ、冬治は巨乳バカだからな。菫ちゃんに攻撃に行くのは巨乳を間近で見たいだけの演技だと思うね。あんなミエミエの演技じゃ妄想も膨らまないっていうかな……」
亮介が陽気に紡いだ言葉に、教壇上の冬治が振り返った。そして、わなわなとメッシュを逆立て亮介へと走り寄ってきた。
「亮介テメぇ！　この俺様に向かって、バカっつっただろ！」
亮介は胸倉を掴み上げられ、半強制的に立たされた。
「悪りぃ、悪りぃ」
亮介は面倒そうに答えた。
「ぁんだ、その態度はぁ！　さも、俺が厄介者とでも言いたそうな顔だな！」
なんだか分からない争いが亮介に飛び火した。これになぜか、菫も乱入を開始する。
「オラぁ、糞メッシュ！　言いたいだけ言って、そっちに行ってんじゃねぇよ！」
「うるせぇ、ババぁ！　てめぇは乳だけ揺らしてりゃいいんだよ！」
「ぁんだと、クソガキ！」
菫は二人の間に入り込み、亮介を掴む冬治の胸倉を掴み上げてきた。
「まぁ、まぁ」と、言いつつ、亮介の動悸がはち切れんばかりに唸っていた。
菫の揺らすその巨乳が……至近距離に迫ってきていたのだ。
「何が『まぁまぁ』だ、テメぇ！　敬語の一つも知らねぇのか！　このガキが！」
巨乳が更に、割り込んできた。
「おらァ、亮介！　今は俺と喧嘩してんだろうぅがぁ！」
「おい、ガキぃ！　何をヘラヘラしてでんだよ！」

冬治につられて、更に更に巨乳が迫ってきた。
そして、つるん♪　と、亮介の腕に触れた。

ブ――――――――――――――――。

本日三度目の鼻血である。
「うぉぁい亮介！　何噴射してんだよ！」
その他生徒が鼻血の雨から逃げる中、女教諭だけは、この鼻血の意味を察していた。
「貴様ぁあ！　毎度毎度アタシの体で妄想してんじゃねぇぞ、エロガキがぁ！」
これに、冬治も参戦した。
「お前、俺の乳で妄想してんじゃねぇぞ！」
「誰が、お前の乳だ糞メッシュ！」
もう誰が敵で何が意図なのか分からない。
ただ、そんなもつれ合いの中で、菫の胸が亮介の腕に幾度も当たり、その都度、小刻みに鼻血が噴射されていくのであった。
このように、冬治が歩けば揉め事が起こる。故に彼は呼ばれたのだ。
「苛烈なる、暴走バカ」

第一章　（七）

「って、事でだ。もう一限目も終わるが……おい、クセェぞエロガキ！」

この短時間で三度の流血。さすがに体力が持たないのか、亮介は机に上半身を寝そべらせ、赤塚不二夫タッチで目を回し、口だけを広げていた。その口へと紗江がせっせと生レバーを箸で運んでいる。

「すいません。すぐに終わりますので」

紗江が代理で菫に頭を下げると、後の席に座っている冬治も、

「ったくダラシねぇな、こいつは！」

糖類不足のためかイライラと貧乏ゆすりをしていた。

「まぁ、いい。遅くなったが、転入生を紹介する」

菫は早くタバコに火をつけたいのか、ジッポライターをカチカチといじりながら生徒に告げた。

ざわめく生徒達。学校事情にとことん無頓着な彼等でも、転入生という響きには興味があるようだった。中でも、クラス唯一の女生徒である紗江は、昨晩の事前情報もあってか緊張した。

――――例の……転校生。

昨晩に聞かされていた、噂の生徒だろう。投入し終えた生レバーのタッパーを鞄に収め、心音を高ぶらせながらも教壇を見た。

「んじゃ、入っておいで、茜」

菫はパンパンと手を叩き、教室ドアへと顔を向けた。

菫から発せられた一つの名前。あ・か・ね。紛れもない女の名前に、亮介はむくっと起き上がり、朦朧とした意識の中で叫んでいた。

「お、女かぁ！」

そう叫んだのは彼だけではない。猛獣めいた若人達は、一斉にはしゃぎ始めたのだ。

「マジかよ！　女かよ！」

「メガネか？　まさかメガネじゃねぇだろうな！」

「頼む天照ちゃん！　俺は今日からあんたのファンクラブに入る！
だから、まともな女生徒を送り込んでくれ！」
紗江も女生徒なのだが、彼等にとって紗江は亮介の介護師、及び保護者でしかなく、女生徒カウントには含まれていない。
そんなわけで期待に心を膨らませるのだが、教室ドアはまるで動かない。陽気なざわめきが不穏なざわめきに変わり、終いにはシーンと静まり返る。それでもドアは開きやしない。
「あ、あれ？」
菫は椅子から立ち上がると、教室ドアを横へ引いた。
「おい、どこ行ったんだよ茜！」
誰もいない廊下に、菫は叫んだ。
よくよく考えれば無理も無い。すでに一限目が終わろうとしているというのに、おそらくホームルーム前からそこで待たされていた女生徒が居なくなっても当然である。
菫は携帯電話を取り出すと電話をかけ始めた。
「どこ行ってるんだよ！　……うん、あ？　校長室？　うるせぇ！
いいから、早く来いよ」
ブツっと電話を切り、菫は教壇の椅子にどっしり座った。
シーン、と待つこと数分。
ピロリロリン♪　と、菫の携帯にメール着信音。
「お、きたきた。それじゃ、お前等お待ちかねの、女子転入生を紹介する！　入りな！」
お局様の如く、菫はパンパンと手を打つ。
亮介含め、男子生徒が一斉に息を呑み、紗江もまた色々な意味で息を止めた。
ガラガラっと扉が開かれ、白い上履きが一歩目を踏み出した。
細い足首に白いソックス。
揺れる金髪はナチュラルブロー。
ピンでとめた前髪で広くおでこを見せながら、大きな瞳を剣呑に細める。

細く華奢な細腕、小さな身長、なけなしの胸。
少女と言わんばかりの女生徒が、胆と教壇に立ちおおせた。
――若干ロリだが……上玉だ！
誰もがそう思い、顔をニヤニヤと弛緩させた。
だが、少女はその腕を腰に当てると、さぞご立腹そうに口を開いた。
「いつまで待たせんのよ！　バカ共が！」
ロリータ少女の瞳は明白に腹を立て、また睨みつける様がなんともツンとしているではないか。
瞬時に男子生徒達は視線を交錯させた。

――エロ先生、これは……もしや。
亮介は、これに頷く。
――うむ。ツンデレである。
生徒Bが視線を送る。
――どエロ先生。貴方様なら、まずどう攻め込みますか。
亮介が腕を組む。
――うむ。諸君よ、ツンデレとは意外にも攻めに弱いものぞ。
――と、言われますと？
――通常、ツンデレヒロインにはツンデレ男がセットにされる。だが、これは物語を長引かせるための打算にすぎぬのだ。物語の終盤を考えてみよ。たった一言の「好きだ」にツンデレヒロインはメロメロになっているではないか。
生徒複数が同時に感嘆した。
――なるほど。言われてみれば……。
キュピーン！　と、亮介の目が輝く。
――総じて、ツンデレは褒められる事に慣れていない。即ち！
「鳴かぬなら、鳴くまで褒めろ、ツンデレヒロイン」であるぞ。

――――おお～～～～～～～～。さすがはエロ先生！
生徒Ｃが表情を固めた。
――――ならば、彼女がツンと攻撃に来た今は、褒める事こそ恋愛ルートへの選択なのでしょうか？
亮介は、ニヤリと口元を歪めた。
――――正にその通り！　あやつは今、季節外れの転入生というレッテルでガチガチになっておる。それ故のツン攻撃じゃ！　ならば攻めよ！　優しき言葉で攻め立てよ！
生徒複数は頷いた。
――――御意！

そんな下らない暗躍を複数生徒は企てたものの、全く意味が無かった。最悪のラブコメ展開が、エロ将軍亮介の背後から忍び寄ってきたからだ。
「ぁんだ、あの糞ガキ」
それは空気を読まない銀メッシュ、冬治からの一言だった。
この小さな愚痴を、教壇上のロリ少女は機敏にとらえた。
「おい、そこのアホ面メッシュ。今なんて言った？」
低いうねり声に、冬治も反応した。ガタっと椅子から立ち上がると、少女を睨みつける。
「おい糞ガキ、今なんっつた？」
「糞ガキ？　それ、誰に言って……はぁ～ん。なるほど、あんたが話に聞いた糞メッシュね」
少女がスイぃっと教壇前に出ると、冬治も合わせて机から立ち上がり、獣の目つきで少女へ迫っていく。
――――こ、これは……！
亮介＋生徒複数はどうしようもない危惧が脳裏に過ってしまった。
――――まずい！　ツンツン冬治とツンツン少女では、王道ツンデレルートではないか！
即座に、エロ先生は立ちあがった。

「お、おい冬治。初対面の女の子に、ガキっていうのは酷いんじゃないかなぁ」
脂汗をかきながら、エロ先生は必至に冬治を治めにかかる。しかし、彼の眼中に映っているのは、彼を蔑むロリ少女の姿だけ。
「黙ってろ……。俺はな、秋ナスと口の悪りぃ糞ガキが大っ嫌いなんだよ」
亮介を脇へと押し出し、冬治は小柄な少女の前に聳え立った。奥二重の凛々しい瞳をギラつかせる冬治に対し、ロリ少女も一歩も引きかずに睨みつける。
「あら、奇遇ね。私も甘ったるいペロペロキャンディと、時代遅れのヘアスタイルが大っ嫌いなのよね」
「お前みたいなガキにはロリポップの美味さは分かんねぇんだよ」
「はぁ？　あれって、対象年齢６歳よ？　あぁ～、あんたの脳味噌は６歳なんだぁ」
誰もが直感した。
――――まずいです！　これは完全にフラグ入ってますよ、先生！
――――分かってる！
「お、おい～君達ぃ。穏やかじゃないなぁ～。まだ名前も知らないんだから、まずは……」
二人は同時に、亮介を恫喝した。
『うるせぇんだよ！』
鋭い眼光と声に押されて、エロ先生はあっけなく撃沈した。フラフラと倒れこむように紗江の机にしがみつき、
「だ、駄目だ……俺じゃ、二人を止められねえ」
紗江にヘルプ要請を申し出た。

第一章　（八）

紗江にヘルプ要請を申し出た。しかし、この要請に紗江はまるで応じようしない。
ただただ、分厚いメガネの下で紅潮しながら、二人の生徒を見つめていた。
「お、おい……紗江。どうした？」
美少年亮介が紗江の眼前にまで顔を近づけるというのに、紗江はいっこうに動かない。
不動の紗江。その理由を、亮介は幼馴染的直感で察していた。

――――も、もしや

以下、紗江の妄想である。

それは、転校初日の一場面。その少女は、冬治という男に出会った。
「べ……別に、あんたみたいなメッシュに……きょ、興味なんかないんだからね！」
頬を赤く染める少女に、冬治はやたらと照れながら顔を背けた。
「オ……オレだって、お前みたいな、ガ……ガキに興味は……」
ピンク色の背景の中に、なぜかシャボン玉が浮かんでいる。
そこで二人はツン、ツンと背中を向けあっていた。
「な、名前くらい聞きなさいよ！」
「あ、茜……だろ」
「え？　なんで……それを」
少女は高鳴る胸の鼓動に、キュっと小さな手を握ってしまった。

「うぉあ――――――――い！　どうしたぁ紗江！」
こんな妄想を察知した亮介は、激しく紗江を揺らした。
「どうした！　お前の専攻はＢＬ（ボーイズラブ）だろうがぁぁ――――」
亮介は早とちりをしていた。いや、亮介の幼馴染の第六感は、まだまだ浅はかだったともいえる。紗江のすべてを理解してはなかったのだ。
では、紗江の妄想の続きを見てみよう。

暁色に染まった教室。そこに、なぜか廊下を歩いてくる亮介。
亮介は、ドアの前で立ち止まった。
「え？　……な、なんだよ、あいつら……」
二人のツンツン現場を亮介は目撃してしまったのだ。
時は過ぎ、放課後。夕暮れ差しかかる教室には、二人の影があった。
「なっ……なぁ、冬治」
「あぁ？　なんだ」
「あの……転校生の事……す、す、好き！　なのか……」
冬治は驚愕し、椅子から立ち上がった。
「なっ……なんで、それを」
亮介は無理に笑って見せた。
「は、ははっ。や、やっぱり、そうか……そうだよ！　そうだよな！　やっぱり、女の子の方がいいに……決まってるよ、な……」
寂しげに顔を俯ける亮介。そんな亮介に、冬治は掴みかかった。
「バカ野郎！　だから……だから、お前はバカなんだよ！」
「え？」
冬治は抱きしめた。力の限り、抱きしめた。
「オレは……ずっと中坊の頃から……オレは！　お前しか見れねぇんだよ！」
「……冬治」
そして彼は、亮介のＹシャツのボタンを……。

「うおぁ――――い、紗江ぇええ――――――」
亮介の呼び声に、紗江はハッと我に返った。ちょっろ出ていた鼻血をハンカチで拭きとり、慌てて亮介に対応した。
「え、どうしたの？　何、亮君？」
「まずいんだよ！　このおチビちゃんと冬治がぁ！」
そう言い放つ矢先、亮介は突如白眼を剥いた。
「りょ、亮君！」
机に倒れこむ亮介の股間に、ロリ少女の足がめり込んでいたのだ。
「あんたにチビって言われる筋合い無いのよ！」
これに冬治は大きく目を開く。倒れる亮介、焦る紗江……などはどうでもよく、冬治は己の眼光をすり抜けたロリ少女へ怒りを迸らせたのだ。
「おぁい糞ガキぃ！　喧嘩売ってんのは俺だろうが！　あぁ！」
「うっさいわね！　バカしか居なくて対応しきれないのよ！」
「ぁんだとぉ！」
盛り上がりをみせる教室。二限目に突入しつつある本日の混戦。
それが気に入らない者も、当然存在した。
彼女は、バン！　と黒板を殴りつけた。
「お前等……いい加減にしろ」
菫だった。ホームルーム時から咥えたていたタバコのフィルターがデロデロになり、そもそもこんなに自己紹介が遅れた一因に彼女自身にも責任があるという事も忘れ、兎に角、苛立っていた。
「続きは後にしろ！　こちとら、お前等の遊びに付き合ってるほど暇じゃねぇんだよ！」
単純にタバコを吸いたいだけなのだが、茜とその他の男連中に怒鳴り散らした。
「わ、分かったわよ……。続きは、っていうか、二度と私に近寄るな、糞メッシュ！」

茜の反応に冬治は更にいきり立つものの、生徒複数が身を呈して暴走を止めにかかった。
「てめぇこそ、二度と俺にしゃべりかけんなよ！」
鬱憤冷めあらぬも、生徒複数による「まぁまぁ」攻撃により冬治はなんとか席についた。
茜も教壇に立つと、面倒くさそうに腰に手を添える。
「はいはい、初めまして。聖バークリード女学院付属から転入した葛城茜です。お前等なんかに一切興味はないので、絶対に話しかけない事、以上！」
ブリブリと怒りながら紹介が終わってしまった。それでもこんな端的な紹介の中で、幾つかの疑問点を多くの生徒が導きだした。

———聖バークリード女学院……付属？

まず一つ目。聖バークリード女学院付属という名前である。これは、隣町にある日本有数のお嬢様学校の名前であり、学力においても県下トップクラスだ。葛城高校とは月とスッポン、月と太陽、国産月見うどんと北京郊外で売られている素材不明の中華蕎麦ほどの差がある学校だ。
そして疑問点2。

———葛城？

それは、葛城高校の葛城である。ちなみに、担任である堇の苗字も葛城だが、これはこの高校を運営するあまり良くない人達の……というか葛城組の長女であるが故の葛城である。関東を牛耳るほどの巨大な組の長であるため、無論、超金持ちである。
つまり、「聖バークリード女学院付属高校＝金持ち＝葛城」それらが指し示す事とは……。
唖然とする生徒を前に葛城堇は立ち上がり、葛城茜の頭に片手を

置いた。
「あぁ、言っておくが、アタシの妹だ」
『えええええぇぇ――――――――――――――』
全く似てない姉妹だが、問題はそこではない。菫の次なる発言である。
「んん、まぁ、あれだ。ちょいと暴力事件を起こしてな、うちに転入させる事にした」
『……はぁ』
――――終わったな……青春――――。と、色々な意味で生徒達は嘆いていた。
脱力する生徒に、茜がさらに追い打ちをかけた。
「私に指一本触れたら、ただじゃおかないんからね！　あいつらが」
茜が親指でクイっと廊下を差すと、そこにはいつの間にやら黒スーツ姿にサングラスを掛けたマッチョな男が二人いた。
――――あぁ……うん。触れません。
こうして、二限目の終了チャイムが鳴り響いた。

第一章　（九）

「女の子いるじゃなぁい！」
前髪をピンで止め、おでこを広く見せる葛城茜が言った。
茜は溌剌と紗江の机へと歩み寄ると、前のめりに机へ手をついた。
「あなたも何かしでかして、ここへ来たの？」
――何かしでかしたんだ……概ね予想はつくけど……。
紗江へ絡みに行った茜に対し、あまり関わらないようにしよう、と一度は決めた生徒達だが、やはり待望の女生徒とあり耳だけは傾けてしまっていた。
陽気に語りかける茜の振る舞いに、どうにも慣れない様子で紗江は緊張している。この葛城高校において、一般の女性との触れ合いが少ないのは、紗江等女生徒とて同じなのだ。
「い、いえ。私は……初めからここへ来るつもりで……」
「えぇ～。経営者側の私が言うのも変だけど、なんで？」
「そ……それは、えっと、その」
紗江は分厚い眼鏡の下から、ちらっと亮介を見た。陽気に冬治を宥めるその姿に、一層頬を赤く染めてしまった。
一見して分かりやすいアクションに思えるのだが、その分厚い眼鏡ともっさりとした黒髪に顔の側面を隠しているため、これに気づける者は稀である。
無論、初対面の茜が気づくことはない。
「まっ、人それぞれ事情はあるわよね！　とりあえず自己紹介。私は茜、よろしくね！」
健気にほほ笑む茜の姿は、とても眩しかった。
――だ、だめ……こんな子、乙女倶楽部に……引き込めない。
そう、昨晩彼女は一つの司令を受けていた。上級乙女会員「通称・貴腐人様」。下級乙女会員である紗江達にとって、絶対君主に等しい存在、いや、お姉様である。そんなお姉様より、転入生を葛城乙

女倶楽部へ勧誘せよ、との命を受けていたのだ。
だがこの時、紗江は思った。
———この子、絶対ＢＬ好きじゃない。
誰にも憚られずにＢＬ道を万進できる。それを目当てに葛城高校へ入学してきた乙女会員達。そんな自分達とは、おそらく、絶対、確実に、全く異質の存在だと思われるのだ。
———でも、お姉様の命令には……背けないし……。
いたって純真で健気な雰囲気を持つ茜に対し、どうしたものか……と悩み始めてしまった。
悶々と思考を巡らす紗江の前で、茜は隣の席を蹴り飛ばした。亮介の机である。
「な、なんだよ」
不意打ちで蹴られた亮介に、茜は言った。
「どきなさい。この子の隣がいいから、そこ、私の席にするわ」
「ん？　あぁ、別にいいけど。女子って紗江しか居ねぇからな」
亮介は半分江戸っ子の気質を発揮し、気前よく席を譲ろうとした。が、紗江がおもむろに立ち上がり、声を荒げた。
「ちょ、ちょっと、その！　隣なら、こっち側でもいいんじゃないかな、うん。そうだね、私、背骨が右に曲がってるから！　右の席に来てくれた方が話もしやすいっていうか……いいと、思うんだけど……」
「でも、窓際の方が……」
尻すぼみであたふたする紗江に、茜は女の直感を最高潮に働かせた。そして、亮介の美麗な顔をじっとりと見つめ、
「はぁ～ん。なるほどぉ……じゃ、そっちでいいわ。どきなさい、ゴボウ！」
亮介とは反対隣りに座るヒョロヒョロっとして胃腸が悪そうな男の机を蹴り飛ばした。
「な、なんでだよ！？」
ゴボウは抵抗を試みる。だが、ゴボウの背後に二つのマッチョな

黒い影。
「は、はひぃ！　譲ります！　譲りますとも！　どぉぞ、お嬢様ぁ！」
「うん。ありがとう」
荷物を抱え、胃腸を押さえながら一目散に席を離れるゴボウに、茜は不敵で怖い笑顔を振りまいた。空いた席へとどっかり座り、さっそく紗江に話しかける。
「そうだ、まだ名前聞いてなかったわね」
「山吹紗江です。よろしくお願いします」
「うん、よろしくね、紗江！。さっそくだけど、変な配置ねここ。なんで、最後尾の席が無いのよ」
頬杖をつきながら紗江に顔を向けつつ、ちらりと横目で最後尾列を見た。最後尾にあるのは冬治の机だけであり、その横がガラリと空いているのだ。
「えっと、それはね」
簡単に言うと、冬治の横の席にいると、眼を飛ばしたのなんだのと冬治が突っかかってくるため、誰もが面倒になってその横列に行こうとしないのだ。そう紗江は冬治に聞こえぬように、小声で説明した。
「はぁ？　何様のつもりよ。お姉ちゃんから聞いてたけど、本当にバ……」
カ、と言おうとして茜は言葉を止める。机にうつ伏せに寝そべっている冬治の耳がピクっと動いたのだ。
「なるほどね……だいたい事情は分かったわ」
クラスの様子が概ね分かり始めた頃、学校終了の長いチャイムが鳴った。すでに担任の菫はクラスを去っており、生徒達は各自解散してゆく。二学期初日という事もあり、今日は二限で終了である。
え、早くね？　と思うかもしれないが、始業式をしたところで誰も体育館にはやってこない。仮に集まったとしても、そこで喧嘩騒動が勃発する。そんな事で、ここ葛城高校では始業式・終業式・年度

によっては卒業式すら割愛される始末なのだ。
そんな事で、今日は終わり。
さっさと教室を出ていく者。連れを探しに来る者。夏休み中の出来事を雑談する者達と、クラスも和やかな雰囲気で賑わい始めた。
「んん～もう終わりかぁ～。私、何もやってないわね」
茜は背伸びをしながら、紗江に言った。
「そうだね。さっき来たばかりだもんね……」
ここで紗江は決意した。明らかに暇と体力を持て余した茜ならば、部活動の勧誘などはできやしないか、と。
「あ、あの……葛城、さん？」
「ん？　茜でいいよ。なに、紗江？」
「えっと……そのぉ……部活、とか……興味ないかな」
「部活？　あぁ～んん……って、この学校、部活とか存在するんだ」
――そ、そうか。転入生だもんね、知らないんだね。
「うん。普通の学校の部活、とはちょっと違うけど……この学校では重要な事だから、説明しておくね」

第一章　（十）

葛城高校。「治外法権！」と横断幕を掲げるこの学校においては、数々の特殊ルールが存在する。その中でもひと際特殊なものが、この部活動である。

「部活動」の前に重要な項目である「個人株」についての説明を、紗江まず説明した。

「えっとね……」

『個人株』とは。

この学校へ入学した時点で、個人に対し「１００」の「株券」が配布される。この株を「個人株」と言い、有意義または不意義な高校生活を送るための必須アイテムである。

「はぁ？　株って何よ。個人に値段を付けようとでも言いたいわけ？」

「う、うん……。って、言っても、これは理事長が決めた掟だから……」

「あぁ、父さんか……。あの人好きそうだわ、こういう事。……で、その個人株がどうなれば、どうなるの？」

「それはね……」

「個人株」には、「権利義務の付与」という機能が付属している。

例えば、紗江の「個人株１０」と、亮介の「個人株１０」を交換するとしよう。

紗江は「個人株１０」に「亮介と亮介の兄との近親相姦妄想を抱く権利」を付与する。

亮介は「個人株１０」に「鼻血で貧血で倒れた際、紗江が生レバーを口に入れる義務」を付与する。

これを交換した場合、紗江は「自由に妄想する権利」を得て、ま

た「亮介へ生レバーを与える義務」を背負い込む事になる。

この個人株において重要な点は「いくらの株を交換するか」及び、「なんの権利義務」を交換するか、という点だ。

「何それ？　いかにも暴力だ……コホっ……父さんらしい価値観の押しつけね」

「うん。でも、この学校の生徒は案外気に入ってる人が多いよ、このシステム」

「はぁ？　これって、要は『金』を『株』って言い換えてるだけじゃない。金を貸し付ける代わりに利息を強要しているのと同じなのよ？」

「うん……でも、力とは知恵だ！　って言われてる感じがしない？　高校生とかって、そういう感じの雰囲気が好きなんだよ」

「うわぁ、キモッ！　平均偏差値１８の馬鹿共が何を調子に乗って……あぁ、だから馬鹿なんだ」

「ま、まぁ……そう言わないでよ……」

「ふぅーん。で、その『個人株』とやらが部活とどう関係するわけ？」

「それはね……」

このように、『個人株』とは有益な権利や、有効な義務を押しつける大変便利な物である。しかし、それを個人という単位で交換しあっていたのでは、結局、暴力行為によって無理に交換を余儀なくされてしまう。

それでは「力＝知恵」という図式は成り立たなくなり、教育にもならない。

そこでこの学校の理事は、ある枠組みを採用した。

それが、「部活」である。

「部活」という徒党を組ませることに寄り、個人ではなく組織と

しての抗争を学ばせようとしたのだ。それを促進するため、「部活」という組織に属する事で数々の権利義務を学校側から与えられる。
そこで使われる用語が『部株指数』である。
この部株指数により、月に一度、部株ランキングが暫定される。
上位部活には学食優先権、保健室のベッド権、掃除免除権など多数の権利が付与され、また下位になると、冬場の灯油運び係、強制トイレ掃除、運動会等の手伝い等々、やりたくない仕事を強要させられる。
では、「部株指数」とは何を持って数値化、ランキング化されるのか？
それは基本的な算出要素は以下の２点だ。
まずは部員の「数」。これはその組織の団結力、信頼性を示す基準となる。
次に「価格」。これは個人株に付与される権利によって、運営事務局によって定められる。
例を挙げれば、先に挙げた亮介と紗江の交換である。紗江は個人株１０と引き換えに「亮介の貧血時に生レバーを摂取させる」という義務を背負ったが、それで得られた亮介の個人株１０に付与された権利は「ＢＬ妄想をしてもよい」というだけである。
「生レバーを貧血時に摂取させる」ためには常時彼の傍にいなくてはならないが、「妄想」に関しては、黙っていればバレない事だ。つまり、「亮介の個人株１０」と「紗江の個人株１０」では、紗江の個人単価の方が低い。
これらを運営事務局により査定され、個人株の「価格」が決まる。そして、その「価格」の平均値と「数」のボーナス査定がから、「部株指数」が決定されるのだ。
「……めんどくさっ！　何それ？　もっと分かりやすい設定はなかったわけ！？」
「うん。株とか言われると面倒だよね。でも、斜め読みでいいらし

いよ」
「斜め読みって……まぁ、勿論私はわかったけどね！」
「本当？　けっこう奥深いよ？」
「要は！　この学校の生徒は株を与えられて、その株に権利義務を付与して売買しろってことでしょ！　更に部活に入れば、学校側から色々な権利を得る事も可能。でも逆に義務を押しつけられるリスクもあるって事よね」
「うん。まぁ、簡単に言えばそうかな」
「んん……結局さ、部活に入らなかったら無関係じゃない？　その部株ってやつ」
「それがね、無所属だった場合は、『無所属部』っていう個人の部活になるの。個人の部活だと、『部員数ボーナス』がなくなっちゃうから、かなりキツクなるよ？」
「いやいや、意味分かんないし。それってもう部活の『促進』じゃなくて『強制』じゃない」
「うん。だから……」
長々しい説明。小難しい説明。読み飛ばして欲しい程の説明。それを語ったのは、全てこの言葉を言うためだった。

「うちの部活に入らない？」

紗江は、上級乙女からの司令通り、茜を勧誘した。

第一章　（十一）

紗江は、上級乙女からの司令通り、茜を勧誘した。
面倒な説明の甲斐もあってか、茜はそれほど悩む様子も無かったようだ。
「ふ～ん、いいわよ。じゃあ、私は紗江の……」
瞬間、紗江の拳に力が籠った。
――――やりました！　私はやりましたよ、お姉様！
心の中で紗江はガッツポーズをした。
紗江が所属する部活といえば、葛城乙女倶楽部！と、あの部活だが、ここは黙って葛城乙女倶楽部へ連れていけばよい。
どうせあの四人は、それほど茜に興味は持ってないはず。ならば、まずは紗江と同じく乙女倶楽部へ入部させるべきなのだ。交換による価格変動、新入部員加入による部員数変動。これだけが部株の変化基準である以上、「新入部員」はどの部活とて切望している。
そう、理屈では分かっていた。
「ん？　どうしたの、紗江？　私、とりあえず紗江の部活に入部しようかと……」
何も知らない転入生は、紗江の顔を覗きこんできた。
紗江の表情に、善悪が燈るっていた。
紗江は、彼女に伝えていない事がある。乙女倶楽部が、ＢＬ主体の同人サークルである事も然り、部活規則を正確に伝えていない事も然り……。何も知らない転入生を、誑かす事も然り。
「ねぇ、紗江？　聞いてるの？　私、とりあえず……」
まずは生徒手帳にみっしりと書かれた部活規定を読んでもらう事こそが、彼女にとってこの学校初の　友人としてやるべき事ではないだろうか？その上で自分達の部活についても説明し、そこで初めて入部するか否かを訊ねるべきではないだろうか。
――――でも、ここで入部届けを書いてもらえば……お姉様からの

指令は全うできる……。
天使と悪魔が、脳内で蠢いていく。
この時、紗江は気付いていなかったのだ。余裕を持って悩んでいるほど、猶予のある状況ではないという事に……。
上玉の女生徒が転入したという事実は、相対性理論上最速のスピードで全校生徒に伝播していた。待望の女生徒。それも今時風の女子高生。分厚いメガネにボサボサの黒髪お下げではない、まっとうな女生徒という存在は、葛城高校にとってはビックバンそのものであった。
ふと教室の外へ目をやってみると、そこには繁殖しきった白蟻の如く、男子生徒の群が桃色吐息でこびりついていた。
紗江が茜を勧誘していると悟った見知らぬ生徒Aは、教室の外から大きく挙手をした。
「ちょっと待ったぁ――――」
茜に、ちょっと待ったがかかりました。
身長の高い見知らぬ生徒Aが、キリっと眉を引き締め茜の前へと歩み寄った。
「是非、我がバスケ部へ！」
見知らぬ生徒Aは９０度に頭を下げて、片手を差し出した。すると……？
「ちょっと待つでごわす！」
茜に、ちょっと待ったがかかりました。
生徒Bは制服の上からでも分かる乗りに乗った皮下脂肪を揺らし、茜に手を出した。
「ここは何とぞ、我ら相撲研究会へ！」
更に更に……？
「ちょっ、ちょ、ちょ待てよぉ！」
茜に、ちょっと待ったがかかりました。

日焼けした金髪のロン毛男が、後ろ髪をちょりちょり摘みながら茜に手を出した。
「俺んとこぉ、マジでサーフィン部なんだけど。ぶっちゃけぇ、君も一緒に波に乗ってみねぇ？」
その時。
「ちょっと待つでござる！」
がりがりのメガネボーイが、ちょっと待ったをかけました。右手に持つは、いつの間に作ったのやら、葛城茜１／５フィギュアである。
「あーたんは、我々アイドル研究会と共に、トップアイドルを目指すのでござるよ」
「キモっ！」
そうこうとしている内に……見る見るその手は増え続け、幾十本にも達したそれらはグニグニと地獄へ誘うように茜に突きだされていった。
茜は叫ぶ。まるで、一か月放置したラーメンのスープに溜まったウジ虫を見るかの如く、辛辣に叫ぶ。
「キモぉ――――――っ！」
腸から猛烈な痒みを感じた。込み上げる嗚咽に口を手を抑えると、本能的に冷や汗を掻きながら席を立ち上がった。
「紗江！　いくわよ」
部活が何か、株が何か……そんな事より、茜は女性としての危機を感じたのだ。

「茜さん！」
「茜ちゃん！」
「あーたン！」

「キモぉ――――――――――――――――――――っ！！！」
紗江の手を引き、教室をダッシュで逃げ出した。

少女に群がる銀蠅共は、逃げる少女の後を猛列に追う。性欲とういう三大欲求に駆られた男達。彼らの熱い吐息は、蒸し暑い９月だというのに窓ガラスをどんどん曇らせていく。
「なんなのよ、あいつらぁ！」
紗江の手をグイグイ引きながら校内中を駆け回る。
振り返れば、性欲に憑かれた悪鬼の群。
「気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪いぃいいいいいいいいいい！　なんでこんな変態の巣窟で暮らせるのよ、紗江！」
「え……」
――それは……私は男子に相手にされた事がないから……。違う！
紗江は首をぶんぶん振り回した。
初対面の人間に「私、美男子限定同性愛主義だからさ、男子にキモイとか言われてるの！」と胸を張って言えるほど、彼女はまだ修羅ではない。だが、「私ブスだから、男子に相手にされなくて」とも言いたくはない。
紗江にはまだ、同性にも良く見られたい思春期心が残っていたのだ。
――今、乙女倶楽部に連れて行けば、絶対入部してくれるじゃん！――
なんて打算を考えもせず、男共に追われる茜に対し、どことなく女として茜に負けた気がして一緒に逃げ回る。次第に、本当に自分が大勢の男子に追われている気分になり、ある種のランナーズハイ状態になりつつ、校内を逃げ回った。
逃げること校内四周。時間にして小一時間。
男子勢はいつの間にか連携プレーで校内封鎖を開始し始めていた。
男Ａが無線機を取りだした。
「こちら水泳部。視聴覚室、ターゲット見当たりません、どうぞ」
男Ｂが回線に乱入。
「メーデー、メーデー、こちら風紀委員会、正面側・校門ゲートを

封鎖完了」
男Cが妙な四角い機器を取りだした。
「トントン・ツー・トン・ツーツー・トンツー」
男Dがこれを解析。
「トラ・トラ・トラ」
この様に一致団結した彼らの執念は、ついに茜達は逃げ場を失わせていた。
長屋のように横に並んだコンクリート造りの部室棟。灯台もと暗しとはこの事だろうか、生徒達が茜を追うため部室から出払ったことで、ここが唯一残った逃げ場所となっていた。
「もう……こんな時になんであいつら居ないのよ！　役に立たないわね」
それは、黒スーツのボディガードのことを指す。居ない理由は分かっている。校内を逃げる回る際、「ちょっと、黒服借りるわぁ」と、姉からメールが入っていたからだ。分かっていても、茜は苛立たずにはいられない。コンクリートに張り付き息を顰めるも、残暑のグラウンドからは、湯気のように沸き立つ熱風が体を覆ってくる。
溢れる汗に、ブラウスからは下着が薄く見えていた。
———あぁ……汗ばんだブラウス……これが、亮君だったら。
「……でへっ」
こんな状況でも、紗江は腐っていた。むしろ、
———なんで、ブラなんかつけてるのよ。貧乳なんだから、ブラが無ければ男っぽくも見えるでしょうが！
と、ブラック紗江になりつつもあった。

第一章　（十二）

ブラック紗江。
それは紗江の疲労が沸点に達する瞬間でもある。日頃パソコンの前だけを活動の場とする紗江にとって、1時間以上続く猛暑の中での鬼ごっこは極度の疲労状態に陥らせる。体力的に弱った彼女は、普段蓄積したフラストレーションが放出されそうになっているのだ。
今すぐにでもブラック紗枝が発動しかねない。目眩さえも感じてきた。
ふっと視界が白く染まった時、疲労は限界を超えてしまった。
「紗江？」
茜は、分厚い眼鏡を覗き込んだ。その白い肌が、一層に青白くなっているのを感じたのだ。
次第に、紗江の体はブルブルと震え始めた。
猛暑の中での、体の震え。確実にまずい状態だという事は、一目瞭然だった。
「どうしたの？　紗江！　紗江！？」
茜は、形相を変えて紗江の肩に優しく触れた。

柔らかく触れてくる、女子の小さな手。
———なに、この手……。
白く染まりつつ視界の中で、紗江はその手を見つめた。
———女の手……女子の手……。
猛列なフラストレーションが、紗江の頭に沸き上がってきた。
———女！　女！　女の手！
無意識の内に鬱憤を蓄積させ、混乱に陥った。
———女！　女！　女の手！　女の手が！　私に触れている！
でも……でも、もしこれが……美男子の手だったら！！

発動！　ブラック紗江！
赤黒いオーラを全身に纏うと、鬼神の形相へと変貌し、茜の胸倉を鷲掴みにした。
「なんで、おっぱいついてんのよ！　今すぐ脂肪吸引してきなさいよ！」
――――美男子の手、だったら……よかったのに。
その余りに不明な言動に、茜は驚愕した。
「は……はぁ――――？　なっ……何いってんの？　大丈夫なの、紗江？」
紗江は何も答えない。答えないどころか、すっと手から力が抜け、茜に凭れかかったのだ。
「さ、紗江！」
紗江は疲労の限界点を超えてしまった。茜はすぐに紗江の顔に手をあてる。
表面だけが異常に熱を持っている。呼吸も荒い、目蓋を強制的にあけても眼球に反応がない。
茜は即座に、熱射病だと判断した。
「どうしよう……どこかで休ませないと」
その時だった。
茜のすぐ先の部室から、ガラガラっと引き戸が空いた。
「う～ん。みんな遅いなぁ」
背伸びをしながら出てきたのは、猫のように大きな目をした可憐な女子生徒だった。
茜は紗江を抱え、女生徒へと走り寄る。
「よかった、女の子！　ちょっと、部室借りるわよ！」
何事か？と、女生徒は茜に抱えられた紗江を見た。
「紗江さん！？　どうしたの？」
「知り合いなの？　紗江がマズイの、とにかく横にさせたいのよ！」
可憐な女生徒も大慌てで頷くと、扇風機の回る部室内へ手引した。

麻雀卓がどでかくスペースを取る部室。その脇にあったボロボロのソファに紗江を運び、彼女が口を小さく動かしている事を察知すると、隅に置かれた冷蔵庫からお茶を取りだし飲ませてやる。それが終わると、酸素吸入を促進させるため、ビニール袋を紗江の口にあてがった。

二人の女生徒は、今できるだけの処置をして紗江を見守った。

それから１０分程。

茜の熱心な処置もあり、紗江はうっすら目を開けた。

「よかった……」

茜はほっと肩の力を抜き、隣で優しく微笑む女生徒と共に安堵した。

しかしこれは、あくまで紗江の危機が去っただけに過ぎなかった。

部室の外から、今度は茜の危機が迫ってきたのだ。

低い男の声とやや甲高い男の声。それらは、間違いなくこの部室の前で話しをしている。

依然、彼女を追い回していると思わしき男達の声だった。

茜はわなわなと焦り始め、まだ力の入らない紗江を握った。

「……もう、無理だよ」

彼女は、もう精神的にも追い詰められていた。この学校で初めてできた友人を、こんな姿で困憊させるほど連れ回してしまった罪悪感。

逃げる場所も気力もなく、絶望感だけを顕わにした。

そんな茜へ、可憐な女生徒が心配そうに訪ねた。

「どうしたの？　何かあったの？」

心配そうな女生徒の瞳。

茜はハッと気がついた。この状況を打開する策が、閃いてしまったのだ。

「あなた、あなたの部活は！」

意図がまるで分からない女生徒は戸惑った。

「ぼ、僕？　えっと、サバイバル、ゲーム部。だけど」

「ありがとう！」
茜はポケットにくしゃくしゃに入れていた入部用紙を取りだした。
そして書き込む。
『葛城茜』　は
『サバイバルゲーム部』　に。入部申請します。
マジックペンで書き殴り、部室の戸口へ走っていく。
そしてドアを思い切り明け放つと、用紙を高々と翳すのだ。
「私は、サバイバルゲーム部よ！」
目の前に居た男は、こう言った。
「あぁ？　なんだぁ、糞ガキ」
明るい日差しにキラキラ光る、銀色のメッシュが視界に映る。
「えっ……」
呆然と、茜は絶句した。
「どけよ、チビ」
水無月冬治が、茜へを睨み、そこに居たのだ。
灰の如く固まる茜の脇を冬治が通り過ぎ、部室内へ叫んだ。
「おい、司ぁ！　なんか変な奴が沸いてんぞ！」
スカート姿の生徒は戸口へやってきた。
「うん、なんかうちに入るみたいだよ。理由は今から聞こうかと……」
そうして出てきた司に、陽気な声が襲いかかった。
「うぉあい！　司ぁあああ――――――愛してるぞぉ！」
亮介が猛烈ハグを司にかました。
そんな亮の首根っこに、細く大きな手がぬっと登場。
「司は、俺の物だ」

大五郎がはしゃぐ亮介を摘み上げる。
「離せ！　大五郎ぉ！　金曜だけは俺の物なんだよ！」
「違うよ！　僕は物なんかじゃないんだから！」
大五郎に首根っこを掴まれバタバタと動く亮介が、ようやく茜に気がついた。
「あっ、あれ？　茜ちゃんだ。何してんの、うちの部室で？」
うちの部室、という言葉に、茜はサラサラの灰になった。
「……ん、なにその紙？　えっと……」
亮介は、砂糖の様に白い砂山になった茜の持つ紙を読み上げた。
「えっと、葛城茜は、サバイバルゲーム部に……うぇあぁ！　うちの部に入ってくれんの？」
砂を通り越しベトベトの白い水となった茜へ、部室内から棘のびっしりついた声が飛んできた。
「ぁんだと！　うちにガキはお断りだ！」
茜は一瞬だけ人間へ戻り、亮介へわなわなと質問した。
「ね、ねぇ。あんた達……何部？」
亮介はスカート姿の司へ飛びついて、とびきりの笑顔で茜へ告げた。
「俺達４人。サバゲー部だよ！　ようこそ、茜ちゃん！」

茜は、白い気体となって蒸発した。

それから数分後。
「えぇ――――――なんでよ！」
茜は校長室の机の前で、理事代理の姉に向かって奮起していた。
「だから、うちのシステムに退部って二文字はねぇんだよ！　ちゃんと規定に書いてあるだろうが」
確かに、生徒手帳には部活に関する規定がびっしりと書かれてい

た。だが、あの状況でそれを読んでいる暇などは無かったのだ。そう、菫に弁解していた。
「そんな状況になるまでに、規定を読まなかった茜が悪い。全部お前の自己責任だ」
「嫌だ！　絶対に嫌だ！」
「だったら転部しろ！　もしくは兼部だ。部株でもいじってどうにかしろ」
「それも嫌ぁ！　あんなストーキング変態どもの部活なんて嫌に決まってるでしょ！」
「じゃぁ知らん！　とにかく、妹であれルール無用は許さんからな。以上だ！」
菫がバン！　と机を叩くと、駄々をこねる茜を黒スーツマッチョ達が強引に退出させた。
「お姉ちゃんのバカぁ！　アホ！　人でなし！」
木製扉をがんがん蹴り飛ばす茜に、ずっと部屋の外で待っていた紗江が頭を下げた。
「ごめんね、茜ちゃん」
茜は脳天から怒りを抜き出すように息を吐くと、気を取り直し紗江の肩を叩いた。
「いいよ……あの時は、これしか方法がなかったんだから。それよりもう大丈夫？　紗江」
優しく微笑まれると、紗江はどうしようもない猛省に駆られてしまう。
部活規定について教えなかった事。自分が気絶し、そのせいで彼女は多大な迷惑を被った事。
何より、紗江がサバゲー部へ兼部している事実を、伝えなかった事。
彼女がサバゲー部へ兼部していると茜が知ったのなら、偶然ではなく、必然的にサバゲー部へ入部するという事態も、流れの可能性としては在り得るだろう。

それを紗江は自然と危惧して、それを拒んだ。
亮介が茜を「女子」として見ている以上、彼女の嫉視はそれを許せなかった。
そんな自分が疎ましく思えて、更に顔を俯けた。
「いいよ。もう気にしないでよ。そんなに気にされると私まで気になっちゃうし」
「でも……」
「それより、紗江もあの部活なんでしょ？」
ドキっと、紗江の心臓が痛みを帯びた。
「……うん」
「だったら、初めに教えてくれれば良かったのに」
更に心に、痛みが走る。――――謝ろう――――。全てを話して、醜い自分は叱られるべきだ。
そうして、涙ぐみながらも顔を振り上げた。
「茜ちゃん！　私ね……」
言葉は、喉のすぐ近くで止まってしまった。曇り切った彼女の前に、小さな小指が差し出されていたのだ。
健気で、純真で、曇りの無い奇麗な瞳で、茜は紗江に指を出していた。
「今度は紗江が、バカ共から私を守ってね。約束っ！」
可愛らしく微笑む茜に、紗江はＢＬとは別の感動を感じていた。
「うん」
小指に小指を重ねると、二人は友達となっていた。
――――あぁ、私……女の子でもいけるかも……。
若き修羅は、また新たな門を潜りそうになっていたという。

そんな青春のひと時を、廊下の影で見詰める者がいた。
「あれです、例の転入生」
「ほう、ほう……ほうほうほう！　上玉じゃねぇか。あぁあ？」
「へい、親分！　親分好みの、ロリータですぜぇ」
「ぐふっ……」

茜獲得戦争は、巻末まで終わらない……。

第二章　（一）

蒸し暑さの残るその部室では、爽快な雀牌の音が響いていた。
「はいはい！　その３萬、チー！」
「てめぇ、また泣き麻雀かよ！　今回は喰いタン無しだっつてんだろ」
「ふっ……喰いタンだけが鳴き麻雀のすべてだと思うなよ……おらきたツモ！」
「え、本当に？　まだ五順目だよ」
「見よ！　１筒ツモってからのぉ～～～～～三色同順、のみ！」
「安手でだろうがボケ！　純チャンくらいに手ぇ伸ばせるだろうがよ！」
「亮介、そのツモハイ……ロンだ」
「は？」
「ロン。国士無双」
「いやいやいや、全然意味ねぇから！　これ俺のツモ牌だっつーの！」
「だぁあああはははっはは。亮介、やられたらな！　３２０００点だ」
「なんでだよ！　トーシロは黙ってチートイしてろっつうんだよ！」
「ち、違うよ、冗談だよ亮介。ダイは、テンパイしてたよって自慢したかっただけで」
「自慢もへったくれもねぇ！　６００点オールだ！」
「うぜぇえええ！　お前とやってると腹が立って仕方がねぇ！」
楽しそうに騒ぐ麻雀卓。
その横に置かれたソファの上には、一人の少女がだらしなく仰向けに寝転んでいた。顔には濡れたハンカチを置き、暑さを凌ぐために扇風機を三つ用意した。一つは頭部へ、一つは腹部へ、一つは足元へ。首振りいらずの完全扇風機態勢でべっとり寝転んでいる。
そんな彼女はスカートの裾をヒラヒラと回せながら、ボソっと呟

いた。
「うぜぇのは、全員一緒だ……」
冬治は地獄耳を反応させるも、今は麻雀中である。次局はすでに始まっており、配牌が気になるのか麻雀卓から目を離さなかった。
「だったら帰れよ。うちのスタイルに文句つけるな」
言い合う声にも張りが無い。そんなことより、今は麻雀！　という雰囲気だ。
「だから……私だって帰りたいわよ。それができないから、こんなむさい場所で暇を潰してやってるんじゃない」
「はぁ？　知るかよそんなもん。ガキは夕方五時には帰宅する。それが世間様の基本だろ」
「あぁ？　おい、糞メッシュ。今なんて言った？」
茜は怒りキーワードに柳眉を逆立てると、バサっと体を起こし眼を飛ばしてきた。
だが、今は麻雀中！　冬治は目を閉じながら、指に持った牌を真剣にすりすりしていた。
それでも一応、茜の相手もした。
「だから、ガキは五時に返ってアニメの再放送でも見てやがれ……んん、この牌は……」
「てめぇ……」
二度目の怒りキーワードに触れられ、茜は寄り目になるほど眼を飛ばす。
が、今は麻雀中！　と、盲牌に専念する冬治に無視されると、その怒りは簡単に「ブチ切れ」へと到達してしまった。
少女はわなわなと立ち上がると、スカートのポケットから何か黒光りする箱を取りだした。
危ない匂いがするその箱に、いち早く気がついたのは亮介だった。
「ちょっと、茜ちゃん！　それは西暦５億３０７万２０１０年だからってヤバイって！」
盲牌中の冬治の後を颯爽と駆け抜け、茜へと飛びついた。彼女の

手には、強力電化のスタンガンがバチバチと電荷を発していた。
「うっさいわね！　そんな事言いながら、私に触りたいだけでしょうが、エロガキが！」
その言葉は、真摯に彼女を止めようとしていた亮介の魔人を呼び起こした。
亮介が掴む、白い細腕……白いYシャツ……。それは、暑さゆえ第二ボタンまで外されて、見える胸元は微かに汗ばみ、そして、そこには……白色のブラジャーのレースが……。
「ごるばぁちょふぁ――――――――」
亮介は鼻血を噴射した。
「あああああ――――、もう！。こっちに飛ばさないでよ！」
崩れ落ちる亮介は、薄れてゆく意識の中で呟いた。
「着……エロ」
「着ているが、エロイ」の略である。
「うるせぇえええ――――――」
果てしない不快感を抱いた茜は、地面に落ちようとした亮介の顔を容赦なくノートラップで蹴り上げ、跳ね上がってきた頭に肘鉄を食らわせ地面へ再度叩きつけた。
室内なのにどこからか砂塵が舞い上がり、それらが消えた頃、茜はきめ顔で呟いた。
「葛城圓明流（かつらぎえんめいりゅう）、龍谷落とし」
渓谷を登る龍を叩き落とす、という意味らしい。ちなみに葛城圓明流（かつらぎえんめいりゅう）とは、茜が脳内妄想の末に編み出した武術であり、実践で使うのはこれが始めてだった。
「また、つまらぬ者を……殺ってしまったわね」
初めて殺ったくせにとても満悦そうな不適笑みを作り、スタンガンの電荷を大きくした。
「次はお前よ。糞メッシュ」

しかし、糞メッシュは気づかずに盲牌中。誰かが茜を止めなければない。
と、今日は男子学生服の司が、電荷の量に畏怖を感じ椅子から立ち上がった。
――こ、こんな電荷の量。まともな人間が受けたら……アフロになっちゃう！
冬治が何よりも愛する銀メッシュ。それを守ろうと、司は茜を宥めにかかった。
「茜さん、落ち着いてください！」
まだまだ盲牌中の冬治の後を、司が駆け抜ける。
「一応ここは学校なんで、そんな物騒な物は……」
「何が物騒な物よ！　あんたのスカート姿の方がよっぽど物騒よ、このカマ野郎！」
衝撃の言葉に、司はへなへなとお嬢様座りでへたり込んだ。
「カ……カマ、野郎……」
精神を穿たれた司を見て、茜はふっと微笑し、きめ顔を作った。

「葛城圓明流、課長殺し」

ＯＬの陰口の如く、人の精神構造を破壊する技……要は悪口である。
正直、今適当に作った技だが、それでも茜は満悦そうに不適顔を作り、スタンガンの威力を更に強めた。
そこに、ガタっと椅子を引いて立ち上がる者がいた。
大五郎は眼鏡をすっと上げ、盲牌中の冬治の後へ歩む。
「葛城」
大五郎の冷徹な視線に、茜はややたじろいぐも、ファイティングポーズをとって大五郎を迎え撃とうとした。スタンガンは、あくまで冬治に使うために取っておくつもりだ。
「な……なによ！　やるっていうの！」

シュッ、シュッ、とあまり速くないシャドーボクシングで威嚇をすると、大五郎は嘆息して首を横に振る。
「何よ！　女だからって馬鹿にするなよ！　葛城圓明流の歴史に『敗北』は無いんだから！」
今始まったのだから当然無敗だ。こんな茜へ、大五郎はまたも嘆息。ぬうぅっと茜へ近づくと冷静な面持ちのまま、茜の顔のほんの数センチ前にまで顔を近づけてきた。
大五郎の急接近に、茜は赤面。ビクっ！　と背筋を伸ばしてしまった。その一瞬に、茜はなんだか亮介並の色々な妄想をしてしまったが、冷徹な男の低い声は意外な言葉を耳元で囁いた。
「司を……もっと、イジメてくれ」
「……は？」
意味が理解できずいぶかしむと、大五郎は足元で座り込む司の前へと膝をついた。そして、司の頭を優しく撫でると、大らかに抱き寄せる。
「ダイ……ぼ、僕……カマ野郎、じゃ……」
「あぁ、そうだな」
大五郎の胸の中で、ヒクヒクと泣く司。こんな司を抱えたまま、大五郎は茜へと顔を上げ、この世の者とは思えないほどの不敵な微笑を浮かべてみせる。そして、バッチグーと言わんばかりに親指を立てて見せた。
「こっ……こいつ……」
色々な意味で不気味さを感じつつも、茜は気を取り直し、遮る者がいなくなった冬治の背中を睨みつけた。メッシュは、依然盲牌中だ。
いよいよ少女も不敵にほほ笑むと、バチバチと電荷をうねらせるスタンガンを振り上げた。
その時だ！
鼻血に朦朧中の亮介が、フラフラと腕を振り上げ寝返りを打ったのだ。

「紗江〜。秋葉、行くなら俺もぉ……」
寝ぼけつつも横転すると、上がった腕が扇風機へとバタンと倒れた。
そのヘロヘロとした手は、扇風機の後のポッチをポチっと押して首振りを発動させ、そのまま下へ落ちると「強」のボタンを強打した。
扇風機は、ぶるがぁごほうぁ――――――！と羽を回して強烈の旋風を周囲に撒いた。
それは当然！
茜のスカートを捉えた！
スカートがぶわぁっと舞い上がる。
「え？」
完全に舞いあがったスカートの狭間からは、モロにアレが見えてしまった。
茜は動けず、止まってしまった。
そんな茜の前で、ようやく冬治が盲牌を終えたのだった。
「白……だな」
冬治の握った牌、それは「白」だった。
そして、茜のアレも……。
「お……おっ、お前えぇぇえええ――――――――」
「ぁあ？」
何も知らない冬治が振り向くと、そこには鶴のように舞った茜の姿が映りこむ。
不意に打ち下ろされたスタンガン。それは冬治の脳天へ見事に突き刺さり、最大電量を持って骨が透けて見える感じにした。
盲牌をしていただけの冬治は崩れ落ち、その場にはなぜか砂埃が舞い、生きる武神だけが残された。

「葛城圓明流奥義……雷光伝馬」

雷の光が伝馬の如く体中を駆け抜ける、という奥義である。

茜はスタンガンにふっと息を吹きかけ、満悦そうにポケットへ収めた。

「強く……成りすぎてしまったようね……」

そのきめ顔が、とても楽しそうだった。

第二章　（二）

「すいません。遅くなりましたぁ」
そそくさと引き戸を開けて入室してきた紗江は、その光景を見るや否や、反射的にタッパーを取りだしていた。
「りょ、亮君！」
タッパーの蓋をあけながら、急いで鼻血状態の亮介へ駆け寄ると、その口へと生レバーを投入した。
「あ、あぁ、紗江」
ゆっくり目を開ける亮介を確認しほっと胸をなでおろすと、亮介の横に倒れる男に気がついた。
「冬治……君？」
体系的にはたぶん冬治だとは思う、だが、俯けに倒れた男はこんもりとしたアフロ髪。現状が理解できず周囲を見渡すも、司はなぜか泣きべそを掻き大五郎の腕の中。司を抱く大五郎は、やや前傾姿勢に顔を前に出し、司のうなじに熱い鼻息をかけて興奮している。
「な、何があったの？」
唯一まともそうな茜に紗江は尋ねた。茜はソファにふてぶてしく寝転がり、二台の扇風機を自身に向けている。ちなみに彼女の怒りを買ったあの扇風機はボコボコに破壊され、部室の脇に廃棄物として置かれていた。
茜は濡れハンカチを顔に置いたまま、ツンと答える。
「別に。バカ共をまとめて処分しただけよ」
「は、はぁ……」
そんな端的に言われても全く理解できないのだが、茜の不機嫌さは見てとれる。おまけに、ハンカチの下の白肌が、やや赤くなっている。
――何、これ……全然現状が掴めない。
紗江はそれ以上を聞くことはやめた。

「てゆぅか、遅いのよ紗江。何やってたのよ」
茜はハンカチで顔を隠しつつ、ぶっきら棒に質問した。
「あ、うん……ごめんね……その、私は兼部だから。もう一つの部活の方に……」
言わずもがな、彼女は「葛城乙女倶楽部」の一員である。これは、この学校におき数少ない女性達が所属する部活であり、「腐女子の腐女子による腐女子のための同人サークル」、を没倒に掲げる根暗メガネっ子専用の部活である。
「ねぇ、私ね、ここの部株ランキングの低さのせいで五時半まで帰れないのよ。でも、こんな所で時間を潰すのは嫌なわけ」
「うん」
「そっちの部活って全員女なんでしょ？　しかもかなり上位ランカーなんでしょ？　だからさ、私もそっちに兼部ってできない？」
「んん……実は、その事を今日話し合ってたんだ、向こうで」
紗江は、部活株について、一章よりも詳しく説明を始めた。

『部株』
全生徒半強制参加型の部活には、それぞれ「部株」が存在する。部員数一人当たりに学校側から配布される株（個人株）の合計したものが部株である。またその株の値により、学校側から時には有用な権利を得られ、時には有害な義務を課せられる。
茜の場合、「部室にて五時半まで過ごさなければなら義務」を課せられている。授業終了と同時に帰宅できる部活は、葛城一部上場部活、即ち上位８位までの部活である。それ以下は、ランクにより帰宅時間が決定されるのだ。現在３９部活中１８位であるこのサバイバルゲーム部はＣランク下位であり、その居残り解除が五時半なのだ。
「ついでだから、兼部について説明するね」

『部株交換』

兼部の主な手法は二通りある。一つは部株交換による権利義務上の兼部。

部活株の権利・義務には、学校規定に無い権利・義務とて、ルールに則れば権利として使用もできる。例えば、「A部に対し昼飯を買いに行かせる権利」をA部の部株に付与し、それと同等の権利義務を持つ部株と交換が可能なのだ。これを部株交換という。（全く同じ事を「個人株」でもできるが、これは「個人株交換」と呼ばれる）

紗江の場合、次のような部株交換が葛城乙女倶楽部とサバゲー部間でなされている。

・葛城乙女倶楽部の部株に付与される権利義務。

「毎月第四土曜に、雅司と西ノ宮大五郎は上半身裸体姿で、乙女会員達の要求するポージングをして、デッサンの被写体になる義務。

又、上記のようにさせる権利」

・サバイバルゲーム部の部株に付与される権利義務

「上杉亮介の鼻血処理を常に山吹紗江が行う義務。又、上記のようにさせる権利」

「乙女倶楽部会員は、はぁはぁ言いながら無言でサバゲー部員に近づかない義務」

このような権利義務が株に付与され交換されており、権利義務上、紗江は亮介の元を離れられない＝実質の兼部状態、となっている。ただし、これは下法と呼ばれる方法である。

「ちょっと、『個人株と所有権』についても説明してもいい？」
「えぇ～面倒臭い」
「ここで説明は終わりだから、斜め読みでもいいの」
「仕方ないわね」

『個人株と所有権』

個人株には所有権が存在する。例えば、Ａ部活ｘ君の個人株を％で表示するとしよう。

Ａ部がｘ君個人株を１００％所持している場合、ｘ君の所有権はＡ部にある。だが、部株交換によりｘ君の個人株をＢ部に５１％譲渡したとする。つまり、個人株の過半数以上の譲渡である。この場合、ｘ君の所有権はＢ部に移り、権利義務等もＢ部のものが適用される。

これが正式な「転部」状態である。

では、乙女倶楽部とサバゲー部の個人株比率を見てみよう。

『交換個人株』

「乙女倶楽部」紗江株９９％をサバゲー部へ譲渡。
「サバゲー部」司株５０％、大五郎株４９％を乙女倶楽部へ譲渡。
つまり、紗江株はサバゲー部に９９％譲渡されており、所有権もサバゲー部にあるのだ。

このように、紗江は正確な意味での「転部」と下法である「兼部」、そのどちらでもサバゲー部と関わりを持っている。元は乙女倶楽部の紗江だが、株交換によって実質はサバゲー部といえるだろう。

こんな彼女等とサバゲー部との取引。一見、乙女倶楽部には不利な交換にも見られる。

だが、そもそも「はぁはぁ」言いながら近づくと冬治がキレる。所有権や義務がなくとも、どうせ亮介の処理は紗江が行う。その二点を考えれば、乙女倶楽部に課せられた義務は無きに等しい。

それどころか、司と大五郎を月に一度占有でき彼等の個人株も半数近く所持している。さらに、紗江の所有権をサバゲー部へ預けることで、イケメン集団のサバゲー部と蜜月な関係も築けるのだ。
このような有益な株交換をすると、運営事務局より株の価値を高く見積もられる。
女性だけであり、部員数もさほど多くない葛城乙女倶楽部を部活ランク7位という一部上場部活に位置させる一因は、まさにこの部株交換にあるといえる。
たいていの部活が「数」だけで圧倒するのに対し、乙女倶楽部は「価値」で勝負をしているのだ。例えば、部株すべてを分化し、彼女達に有用な部活と有益な株交換を行っている事もそうである。
あらゆる部活の馬鹿共を翻弄し、有益な交換を行わせることで、それらの部活と同盟関係を結んでいる。サバゲー部とて、その同盟の一つにすぎないのだ。
こうして葛城乙女倶楽部は、その腐った知恵で、葛城高校を裏から支配しているともいえる。

「いいじゃない！　それ凄くいい！　私もそうやって馬鹿な男を翻弄したいのよ。やっぱり、そっちに兼部させてよ！」
「ぅ……うん……それがね、駄目なんだ……」

今の彼女達の問題点。それは部員の全員株をきっちりと分化し、適材適所に権利取引を行っていた事だ。余すことなく部株を交換してしまっている今、、茜に費やすための持ち株が無いのである。
もし、茜が乙女倶楽部へ入部していたのなら、その分の個人株が学校側から寄与されるのだが、彼女は不運にもサバゲー部へと入部してしまった。
すでに、上玉の女子高生、と校内で噂される茜である。彼女の持つ個人株には、それだけでいくつかの権利に対価する。

例えば茜の株１に対し「葛城茜と一日デート権」を付与。交換対象は誰かの個人株１０と「コミケ開催日三日間のお手伝い義務」を強要する。そんな不利な交換であっても、名乗り出る部活は数多に上るはずだ。

乙女倶楽部としては、是が非にでも所有しておきたい株。それが、茜株だったのだ。

と、まぁ、最後の「茜株」の説明は隠しつつ、紗江は部株について説明した。

第二章　（三）

「めんどくさっ！　つまり、そのなんたら倶楽部の余った株が無いから、私を兼部させられないってわけね」
「うん。ごめんね。色々方法は考えているんだけど……いい方法が見つけられなくて」
「そう。まぁ、何か方法はあるかもしれないから、私の方でも考えてみるわ……」
　茜はグルっと部室を見渡した。
「それにしても！　暇ね、暇すぎるわ！　こいつらも麻雀しかやらないし。そもそもサバゲー部のくせにガス銃どころかエアガンの一つも無いってどういう事よ！」
　紗江の膝で放心していた亮介が、のそっと起き上った。
「んん……てゆーか、うちの学校の部活なんて、名前が違うだけで中身はみんな麻雀部なんだけどねぇ～」
　亮介にしては珍しくまともな事を言った。こんな誰にでも予想できそうなこの答えに、茜は視線を逸らし口を窄めた。
「そ、そう……じゃあ、サバゲーは、やらないんだ」
　とても寂しげな口調に、司も大五郎も茜を見つめた。特に司は心配げに茜へ声をかける。
「茜さん、サバゲーやりたいの？」
　ストレートな質問に、茜は戸惑った。
「い、いや……そんなことは無いわよ！　そもそも、こんな蒸し暑い時期にギリースーツやアサルトベストなんか着てたら、わ、私はともかく紗江はまた倒れちゃうわよ」
　なぜか、茜は頬を赤らめている。これに、大五郎がメガネをきらりと光らせた。
「詳しい……実に詳しい」
　じっとりと低い声。これに亮介も「うんうん」と頷いた。

「そ、そう？　家柄の関係じゃない？　ほら、うちは関東随一の組長宅だから、うちの半径数百メートル以内は監視カメラづくしなのよ！　そんな所で暮らしていれば、アサルトの一丁や二丁くらいは……ねぇ～」

司が猫の様な大きな瞳を丸め、首をかしげた。

「アサルトって、何？」

「へ？　あぁ、それはあれよ……日本という地理的にロシアと仲が良い組が多いでしょ。だから、良く目にしたのはＡＫ－４７ね。ま、まぁ、サバゲー部の貴方達にしたらベタだな～とか思うかもしれないわね！　７４じゃなくて４７？　それって古くない？　とか思うかもしれないけど……で、でも、実際はそんなものよ！　４７の方が数が出回ってるんだから、そうなるのよ！」

司は全く求めていない答えを返された。彼は「アサルト」という語意を聞いたのだ。

「ん、んんとぉ……ＡＫ……Ｂ４７？」

成り立たない会話の中、長身メガネが再び口をはさむ。

「ＡＫ－４７。ソ連軍が正式採用しアメリカ軍のＭ１６シリーズと肩を並べる代表的なアサルトライフルだ。そして、アサルトライフルとは、銃身の長い突撃銃を指している」

「へぇ～。それを聞いても全然分からないや」

理解力の無い自分を隠すように、司は照れ笑いをした。

「ねぇねぇ、茜ちゃん。日本の住宅地でさぁ、突撃銃って必要なの？　拳銃じゃダメなの？」

再び亮介のまともな質問だった。彼はＨシーンが多いＶシネが大好きである。そしてそんなＶシネはヤクザ物も多く、そのどれもがハンドガンを使用している。

「えぇっと……た、確かに必要はないわよ！　でもほら、備えあれば憂いは無いでしょよ！」

怪訝顔の亮介の横で、紗江は何かを思い出していた。

――――こんな会話のスレ、昔誰かが立ててたな……えっと、その

人の属性って……。
紗江はポツリと呟いた。
「茜ちゃん……ミリオタ？」
正式名称ミリタリーオタク。主に軍事関連におき異常な興味を持つオタクである。細かく分ければ装備収集系、軍船・戦闘機撮影系、史実資料系など多岐に分かれるが、そのどれとも思える発言だった。
サバゲー部員達は、じぃ――――――――――っと、茜を見つめた。
「ち、違うわよ！　そんなオタッキーな趣味、私は持ってないわよ！」
そう否定されると、紗江はなんだかやりきれない。ＢＬに比べればミリオタの方がまだ世間的には歩があるはずだから。
しょんぼりとする紗江を、茜は一向に見ようとはしない。それどころか、その瞳が輝いていくばかりである。
「た、確かに銃は好きよ。でも、ミリオタなんかじゃない。銃……銃じゃないのよ！　銃というのは戦術を決める時の重要なファクターになるけど、実際には銃の性能で戦いの決定的な優劣は決まらないのよ！　的確に敵の急所を穿ち、自軍の弱点をカバーする作戦、そう、つまり作戦なのよ。私が好きなのは作戦！　だからね……！」
茜はキラキラした目で、四人へ顔を向けた。
そんな四人は、思わず声を合わせるのだ。
『ミリオタなんだ』
「ち、違うの！　私はあくまで大規模戦のみが好きであって、近接といってもＣＱＢまでなの。ＣＱＣほどのリアルな制圧感を得たいわけじゃないし、銃やコンバットスキルに特別な愛着もないのよ！
ただね、小隊には塹壕に回す雑務兵を抜いて、歩兵１０人、スナイパーに２人、工作兵に３人ほどエキスパートがいれば、どんな戦場でも制圧できそうかなって思うくらいで……！　あぁ！　もちろん、空撃があれば尚良いし、補給線の確保は基本事項だからまた別の話よ！」

もう完全に趣味の世界に入っていった茜を前に、紗江は男子三人へ顔を向けた。
――――ミリオタだね、茜ちゃん。
――――あぁ。
――――うん。
――――無問題。
そして四人は、茜をじぃ――――――――――っと見つめた。
「だから、違うんだって！　私は……」
その時、興奮しきった茜の顔を冷やすように、黒い影が彼女を覆った。
「おい、ガキ……何が違うんだ？」
少女に聳えるその影は、意識を戻した冬治だった。
「あぁ、もう。こんな時にぃ！　鬱陶しいのよメッ……アフロ」
その男、アフロにつき。冬治自慢の銀メッシュは見事なアフロになっていた。
「はぁ？　何言ってんだテメェ？」
鏡など見ていない冬治は、自身のアフロに気がついていなかった。
そんなアフロに、亮介は軽々しく口を出す。
「ぉあ！　いいじゃん冬治！　ナウいナウい！」
司は思わずクスっと笑い、どうしたものかと紗江は慌てる。
冷徹なる馬鹿メガネは、眉尾一つ動かすことなく冬治の肩をポンと叩き、無表情で呟いた。
「……ベタやなぁ～」
関西ツッコミ。
「……って、何がだよ！　なんでいきなり関西弁なんだよ！」
「まぁまぁ、落ち着けよ冬治。今は茜ちゃんの趣味を聞いてるとこだからさ」
亮介は冬治を宥めると、その場に座らせようと肩へ両手を置いた。
「はぁ？　趣味？　どうせリカちゃん人形の蘊蓄だろ！　俺はそん

なもんに興味は……」
と、言いつつも、冬治は素直にその場に座った。
茜を見つめる、五人のサバゲー部員達。
「……って、なんでよ！　なんで聞く気満々なわけ？　いつもみたいに抵抗しなさいよ糞メッシュ！」
「ぁあ？　いいから早く話せよ」
「……」
どうにかこうにか話を終わらせたい茜は、何か別の話題の種はないものかと辺りを見回した。
「あっ！」
アフロ頭にピン！　と五感が冴えた。
彼女はしっとり正座をしている紗江に顔を向けた。
「い、イメチェンしてみない？　紗江！」
「へ？」
当然の方向転換に、紗江は戸惑った。しかし、茜はグイグイと紗江の前に乗り出すと、強制的に立ち上がらせ、品定めのように紗江の全身を嘗める様に見つめた。
こんな茜に、男子勢が口をはさむ。
「イメチェンって言ってもさぁ～紗江は中坊の頃からそのスタイルだよ、茜ちゃん」
「何がしてぇんだよ、このチビ助は」
何がしたいか、と問われれば、話を逸らしたいだけ。しかも、言い出してしまった以上は引っ込みもつかないのだ。
「い、いいよぉ私はこれで……」
突然イメチェンと言われても、紗江はそう反応するしかない。
茜はチラっと亮介へ視線を送りながら、
「実はね、昨日から紗江はイメチェンするべきだと思っていたのよ」
半ばやけくそで紗江の耳にボソっと呟いた。
「もう少し大胆な格好の方が、彼の好みじゃない？」
「へ？」

ポカーンと口を開けて見つめている亮介。茜の言う彼とは、亮介の事だろう。
紗江の顔は急速に真っ赤に染まっていった。
「な、なんで知ってる……じゃなくて、えっと、そのぉ」
焦りを隠せない紗江の胸に、茜はポンと拳を添えてウィンクした。
「誰だって分かるわよ。進展したいなら、一歩目は紗江が踏み出さないとね」
「え、でも……私」
もじもじと悩む彼女を見つめ、まんざらでも無いはずだと茜は確信する。
「はい決定！　今から紗江のビューティチェンジを始めるわよ！」
急展開とはいえ盛り上がる女性陣二人に対し、男性陣はとてもクールだった。イメチェンと言われても、今ここで何ができるというのか。そんな面持ちだった。
それを察した茜は、鼻を高々に手をパンパンと鳴らした。
「いらっしゃい、黒姫・千代影！」
声高な掛け声と共に、天上のタイルが一つ開いた。風切り音を纏いながら、黒い影が茜の背後に二つ降り立った。
『はい、茜お嬢様』
茜の背後に、突如として二人のメイドが登場したのだ。
「なっ……なんだそいつら……」
冬治は片眉を吊り上げつつも、唖然と言った。
「見ての通り、私の専属メイドよ」
亮介も疑問を口にした。
「んん……あの黒いマッチョさんじゃないんだね」
「あれは本来お姉ちゃんのＳＰなの。私のＳＰ権メイドはこっち。黒姫と千代影よ」
茜の背後に立つ二人の女性。メイド服に黒サングラスという不気味な様相の二人は、スカートを軽く持ち上げ、亮介達に深々とおじぎをした。

何だコイツら……的な表情で呆然とするサバゲー部員を前に、茜は自慢げに指示をする。
「聞いてたわね、二人とも」
『はい』
「じゃ、さっそく準備してくれる？」
『了解です』
まったく同じ様相であるメイドの二人は、どちらが黒姫で千代影なのか分かりはしない。そのどちらかが口に指をあて、犬笛の如くピーと音を鳴らした。すると、部室の引き戸が唐突に開かれ、黒マッチョたちが長方形の巨大な箱を持って入室してきた。試着室のような、あの箱である。
部室の隅へそれが置かれると、メイドはふんわりとした自身のスカートに手を入れた。スカートの中をごそごそと弄ると、そこから黒い箱を取り出し、バカっとそれを開けると、中には豪華なメイキングセットに理髪セットが入っていた。
メイドは茜に視線を送ると、それを準備完了の合図とし、茜が頷く。
二人のメイドが呆然と座った紗江へと、奇麗な手を差し伸べた。
「では、参りましょう。山吹紗江様」
「は、え、あ……」
どことない不安に駆られた紗江は、ついつい亮介へと顔を向けてしまった。
亮介は、二コリと頬笑み紗江に頷いた。
亮介の笑顔は、紗江を落ち着かせる。彼女は熱い息をゆっくり吐き出し呼吸を整えた。
「は、はい。お願い……します」
メイドの手に自分の手をそっと添えた。
二人のメイドに、連れて行かれる山吹紗江。こんな状況を、茜はとにかく楽しんでいた。
「さぁさぁ、やるわよ～。エロガキ好みの絶品を作り出してあげる

わよ」

本当に、楽しそうだった。

第二章　（四）

真っ暗な視聴覚室に響くキーボードのタイプ音。青白いディスプレイの光に映し出される、分厚い眼鏡。

葛城高校第二教室棟・視聴覚室。そこは代々より続く、葛城乙女倶楽部の根城であった。

暗闇で綴るＢＬ小説。鋭利なる集中力を宿す彼女たちに、光などは必要なかったのだ。

そんな部屋へと、一人の女性が入室した。

「お姉様」

分厚い眼鏡におさげ髪の女性は、同じく分厚い眼鏡におさげ髪の女性へ呼びかけた。

「何かしら」

お姉様と呼ばれた女性は、タイピングを止めることなく、静かに答えた。

「例の提携部活より、葛城茜の奪取方法について妙案はないか、と」

下級乙女会員による報告だった。それに対し、上級乙女は溜息をついた。

「ふぅ……無い、という分けでは無い。ですが、それをあの部活に教えることは危険なことでもあります」

下級乙女は頷いた。

「力を持つ部活に、知恵を与える必要は無い、という事ですね」

「そうよ。むやみに知恵を得た獣は、必ずそれを暴利に使い始めるのです。今は、妙案など無い。そう伝えておきなさい」

「了解しました、お姉様。それでは、私はこれで……葛城乙女倶楽部、万歳」

下級乙女は深々と頭を下げて退室した。

静かに光の抜けていくドア。上級乙女はそれをじっと見つめていた。

「……了解……か。本当に、了解しているのかしらね……佳澄？」

上級乙女は、含み笑いをした。
そんな上級乙女の推察通り、視聴覚室の外では、報告を終えた佳澄が立ち尽くしていた。
「大丈夫かな……紗江」
彼女は、不安げに両手を胸に当てていた。

一方その頃、サバゲー部質は盛り上がりを見せていた。
「はいはい、その８索ロン！」
「またかよテメぇ！　クズ手ばっかで上がってんじゃ……」
「ふふっ……それは、これを見てから言うんだな！」
亮介の手牌。
２萬３萬子４萬子　４筒４筒　６筒７筒８筒　４索５索６索子８索８索。
上がり牌　８索。
役　タンヤオ　ドラ１
「って、クズ手だろうが！　リーチぐらいかけろよ！」
「何言ってんだよ！　２翻なんか滅多にねぇぞ！」
「メンタンピンで作れば満貫だろうがぁ！　バカかじゃねぇのか！」
「はいはい、どうでもいいけど早く払えよ、２６００点！」
「うぜぇえ――――――」
そんな事で、男子勢は麻雀で大盛り上がりであった。
「……ってぇ！　なんでよ！　少しは期待に胸を躍らせなさいよ、あんた達」
麻雀卓に、茜がドスンと手をついた。
え？　突然なんですか？　的な表情で亮介が答えた。
「……やっぱり、リーチかけた方がいいってこと？　裏ドラも期待できるし」
「そっちの期待じゃないのよ！　あんたの彼女をイメチェンしてんでしょうが！」

茜の言葉は、四人の呆然を加速させる。
「んん？　彼女じゃないよ、幼馴染だよ、紗江は」
「ぁあ？　亮介、いつの間に男になりやがった」
「いや、だから知らねぇっつーの」
「亮介……やっと紗江さんに本当の気持ちを……」
「いや、だから知らねぇっつーの」
「そうか、亮介。ならば、俺もそろそろ司と」
「いや、それは俺が譲らねえっ」
呑気な四人は淡々と会話を繰り返す。こんな光景に苛立つ茜は、ついに亮介の耳を摘み上げた。
「もういいから来なさいよ！　何のために紗江が頑張ってるか分からないじゃない！」
「ちょちょちょ、痛いって、分かったから、痛いって！」
亮介は紗江がビューティーチェンジ中の衣装棚の前へと強制的に座らされた。
「ほら、あんた達も来なさい！」
「あぁ～鬱陶しいな、このチビは」
本当に面倒そうに、三人も衣装棚の前へ鎮座した。
「茜ちゃんさぁ、俺達五人は同じ中学なんだよね。そんでさ、みんな紗江のスッピンくらい一回は見たことあるんだよぉ」
故に、四人は期待しない。ド普通であったあの頃から、劇的な変化があるとは思えないのだ。仮にそれが美の巨人を携えようとも、残飯をあさるカラスと弁当にたかる鳩ほどの変化でしかないだろう、と。
こんな四人に、茜は誇らしく胸を張った。
「ふふっ……あんた達、女の子を見くびりすぎよ。世の中に、『高校デビュー』という言葉があるのを御存じないかしら？」
――――こ、高校デビュー……！

それは、中学まであんなに普通で目立たなかった子が、なんの超弦理論なのやら、高校入学と同時に　華々しくモテ始める事である。
亮介は武者震いをした。
「ま……まさか……それが、それが紗江だと言うのですか！　茜先生！」
「ふっ、そうよ。隠された豊満な胸、白い肌、丸い輪郭。どれを見ても、これは磨けば光る原石だと示唆しているわ」
「はっ。しょせん子供の見立てだろうが。バービー人形と人間の区別がついてんのか？」
耳をぽりぽり穿る冬治に、茜は掴みかかった。
「うっさいわね！　人が必死で盛り上げてる時に、水を差すような事言ってんじゃないわよ。だからお前はバカな糞メッシュなのよ！」
「ぁんだと、クソジャリ！　Ａランクの貧乳が女語ってんじゃねぇぞ！」
「うっさいわね！　パット入れればＢでもＣでも好きなように変えられるわよ」
「んなの、あったり前だろうが！　そのコマンドを許すなら、司はてめぇの遥か上を行くぞ」
「……（司）」
「あんなカマ野郎と一緒にするな！　チン〇の在る無しくらい、見極めないさいよ！」
「チン〇、とか言ってんじゃねぇよ、糞ガキチビが！」
以後、卑猥な用語が次々と飛び出していった。
そんな会話を聞きながら、衣装室の紗江はドギマギしていた。
――――え、何？　。下ネタで盛り上げないといけない程、私の期待値って低いの？　出るの、止めようかな……
もじもじしたが、カーテン外の卑猥な罵り合いが更にエスカレートしていくので、
――――駄目、私が今いかないと……有害図書になっちゃう！
決意を固めて、恐る恐るカーテンの向こうへ囁いた。

「あ、あのぉ～できましたぁ……」
喧騒冷めあらぬ空間に、衣装棚から声が届いた。
「もういいわ、糞メッシュ。お前は女を知らなさすぎる！　この紗江を見て、女とカマ野郎の差をきっちり認識しなさい！」
茜が粗末な胸を張ると、衣装棚から二人のメイドだけが外へ出てきた。
「よし、開くわよぉ。目ぇかっぽじって凝視しなさい！」
何気に、亮介は心音を高ぶらせていた。彼の強く握った拳には、彼女に関する思い出が蘇っていたのだ。
普通と呼ばれ続けた山吹紗江。影の薄さは天下一品。いつしか彼女は存在を忘れら去られ、熱で休んだ臨海学校に、なぜか出席に〇をされていた。卒業写真はど真ん中。なのに、日光が顔に当たり顔が映らなかった。普通そんな写真は使われないのに、ボヤけていた事にすら気づかれなかった、あの紗江が……、今、まさかの……高校デビュー。
ついに、あの紗江に、顔にではなく、存在に光が当たる時がきたのかもしれない。
そう兄弟目線でドキドキしていた。
「それじゃ、行くわよ！　カーテンオープン！」
二人のメイドが、カーテンに手をかけ、一気にそれを左右に開けた。
呑みこむ唾が、何かを叫ぶ。
高校デビューと、囃し立てる。
カーテンの先は、山吹色だった。

第二章　（五）

茜のメイドは、ビフォー紗江を紹介した。
「まず匠は、分厚い眼鏡の撤去を開始。最新式のデザインコンタクトに着け変えます。すると……？　なんということでしょう、それほど大きくない黒目もこんなに大きく見えるのです。更に、はっきりしない目立ちは、アイシャドーにより若干大きく変貌を遂げるのです。
　長く手入れのされなかったおさげ髪は、大胆にもばっさりカット。黒過ぎた髪は茶髪に染色、波打つパーマをあしらう事で、ちょっとした遊び心を演出します。これにより匠は、丸過ぎた輪郭にも立体感を創造してしまうのです。
　規定通りのスカート丈は、膝上にまで大幅ＵＰ。くびれのなかった腰回りには、カーディガンを巻きつけ若者風に……これで１６歳の乙女心はガードされることでしょう。
　そして、豊満な胸はいっそうアピール。ブラウスのボタンを第三ボタンまで開けみれば、そこはもう、誰もが羨むエデンの園。
　見事匠は、今回の難題をクリアしてみせたのです」
　たっぷりと抑揚をつけたメイド（千代影）のナレーションは、隈なく匠（黒姫）が施した紗江の変貌を伝えていた。

　が！　しかし！

「普通だ」
「普通」
「普通だね」
「偏差値、４５」

化粧映えのしないその彼女は、普通だった。普通どころか、あぁ頑張ってモテたいんだなぁ、という感が否めなかった。
とても気が抜けた男性陣の表情に、紗江は情けなくなり尻を窄めた。
「えっと……あの……私、やっぱりいいです！　無理ですこんなの」
さすがの茜も焦ってしまった。
「な、なんでよ！　すっごく可愛いよ！　その方が断然いいよ！　そうでしょ、亮介」
「え？　あぁ……」
亮介はじっと、紗江を見つめた。
あのカーテンの中で、紗江は延々と考えていた。
亮介に、何を言われるのだろうか。
それだけだった。それしか考えられなかった。
もし、これで関係が崩れるくらいなら、いっそ今のままで良かったのだ。
――――何か言われたら、すぐに元に戻してもらおう。
彼女は怯えながらも、彼の言葉を待った。
亮介はポリポリと頬を掻くと、クスっと微笑み紗江に言った。
「小さい頃はこんな感じだったし、それでいいんじゃない？　紗江は紗江だよ」
一片の揺るぎないその瞳は、穏やかな風を紗江に送り込んだ。
――――こんな、亮君だから……。
もう死んでいしまいたいくらいの歓喜に包まれた。
亮介は特別な事を言った感じもなく、麻雀卓へ戻っていく。
その亮介の後を、冬治もアフロ頭を掻きながら追っていく。
「まっ、あのボサボサ頭で居られるよりは……マシだな」
司も立ち上がり、紗江へ微笑んだ。
「紗江さんは、何でも似合うよ。心に一本線が通っている人は……見た目が変わっても、綺麗なままだよ」
最後に大五郎も立ち上がり、彼だけは怖い面持ちで紗江の方へと

歩み寄って来た。と、思いきや、紗江の前で方向転換し、横にいるメイドへと何やら耳打ちをした。
――――？
大五郎はメイドへ不敵な笑みで耳打ちした後、「あぁ、忘れてた」といった感じで紗江に言った。
「小さい頃はこんな感じだったし、それでいいんじゃない？　紗江は紗江だよ」
亮介が麻雀卓から振り返った。
「それ、俺の台詞だろ！　バカ眼鏡！」
突っ込みを聞きつつも「ふっ……」と、澄ましたニヒル顔で大五郎は麻雀卓へ戻っていく。
「おいメガネ！　空気読めよ！　なんか良い事言うタイミングだろうが！」
亮介の催促に、大五郎は紗江へ言った。
「亮介は満足しているぞ。雀牌を持つ手が震えている」
「おぉい！　それ全然良い事じゃねぇだろ！　ふざけんなよ、メガネ！」
ざわざわと騒ぎながらも、四人は麻雀を再開していった。
こんな四人を見る紗江に、茜は肩を落としてやってきた。四人と出会って二日目の彼女には分からなかったのだ。亮介が言った「良い事」という意味が。傍から見ればぶっきら棒な態度である四人を見て、イメチェンを提案をた責任を感じてしまっていた。
「あ、あの……ごめんね」
「え？」
「その……イメチェン……嫌、だったかな」
しょんぼりと意気消沈する茜へ、紗江は笑顔で返答した。
「ありがとう、茜ちゃん」
「え？」
――――この気持ちはまだ、茜ちゃんには分からない。
それが、とても恍惚に思えた。

第二章　（六）

夕日が落ちる下足場で、黒いおさげ髪が揺れていた。分厚い眼鏡の見つめる先は、茶色く錆ついた下足箱。「山吹紗江」と書かれたプレートの前で、長江佳澄は立ち止まっていた。

「はぁ……」

憂鬱な溜息を、静かにその場へ落していく。

「紗江……」

懊悩とする溜息が、何度もその場へ落ちて行く。

「紗江……今、どうしてるかな……」

グラウンドからは、遅生まれの蝉の鳴き声が聞こえてくる。それがとても悲哀に感じて、耳を閉じたくいと思ってしまった。

佳澄は紗江のプレートから視線を落とすと、ここでこうしている自分が、蝉などよりも悲哀な存在だと気付いてしまった。

自身の下駄箱へ向かおうと、紗江の三つ横へと移動する。

紗江の隣は亮介の下駄箱。その横は空白の下駄箱。その横が、佳澄の下駄箱だった。

昨日までは、確かにそうであった。

しかし、佳澄の隣には新たなプレートが掛っている。

「葛城……茜」

紗江、亮介、『茜』、佳澄。

「あの……転校生」

佳澄はぐっと奥歯を噛みしめた。口の中が鉄分の塩っ辛さに埋め尽くされようとも、ずっとその場で『茜』を睨みつけた。

そうして数分が経過する頃、精悍な下足場に嗄れたダミ声が響いてきた。

「おう、おうおうおうおう！　いるではないかぁ、カスミよぉ！」

ぎっりしと筋肉が詰った巨躯な男が、佳澄へとガニ股歩きで寄っ

てくる。脇には釣り目の子分を従え、振り向きもしない佳澄の背後へと仁王立ちした。
彼に顔すら向けない佳澄の横へ、釣り目の子分がニタニタと嫌らしい犬歯を光らせた。
「それで？　陽子さんは何と言ってたでゲスか」
丁重な口調であったが、その吊り上げた口元からは下劣さがにじみ出ている。
佳澄は無表情に戸口へ歩いた。
「陽子『様』とお呼びなさい。今は、お姉様でも案が無い。そう、おしゃられました」
「……本当でゲスかね？」
釣り目の男は、佳澄の先を遮るように前方へと進み出た。
「ええ。嘘だと言いたいのなら、自分達で生徒手帳を読破し、粗末な知恵を振り絞ってでも株操作を行えば良いではないですか」
ピクリとも表情を動かさない佳澄に、背後から分厚い腕が巻きついてきた。ゴツゴツしい腕は佳澄の首をぐっと締め付け、華奢な足を止めさせる。そのままギリギリと腕は締まっていくも、それでも佳澄は顔色一つ変えないでいた。
「のう、佳澄よ」
低いねっとりとした声が、佳澄の耳の裏から囁かれた。
「あぁ～んな小難しい文章が、わし等に読めると思っておるのか？　知恵を振り絞らせるため、お前の所有権をうちが買った事。まさか失念してはおらぬだろうなぁ……？　それ以外に、お前の役目があるというのか？　のぅ、佳澄よぉ」
肉の隆起する分厚い拳が、すっと佳澄の胸部へと侵入した。
ここで初めて、佳澄は感情を顕わに激昂した。
「触るな！」
分厚い腕の肘関節に手を添えると、グッと力を込めて握りつぶす。反射を促された腕はほんの一瞬、力が抜けた。その隙を見事に見計らい、佳澄は巨躯な男から脱出する。そのまま数歩前へと駆けると、

禍々しく顔を歪ませ殺気立った。
男二人はヘラヘラと笑っていた。
「はははははっ。おうおう！　モテない女は敏感なものだの！」
「いえいえ、違いますよ武田さん。こいつは、『男』に、触られるのが嫌なんでゲスよ」
「おっ、おっとぉそうだった。これはうっかりしおったわ。わしは、『男』だったのぉ」
棘のある笑声に、佳澄は更に殺気を高め睨みつける。
「怖い目をしておるのぉ。その目は、わしらに向けるべきものではなかろうに」
釣り目の男はニタリと蛙のように微笑を見せると、廊下から見えるグランドを指差した。
「そうでゲス、佳澄さん。あなたの『彼女』は、元よりあのバカの物でしょう？」
男の指の先から、いくつもの談笑が聞こえてきた。思わず佳澄が振り返ると、そこに見えたのは、あの部活である。
五時半を回った暁のグラウンド。そこを横切る、賑やかな四人の美男子達。
乙女倶楽部の腐女子にとって、恰好のシャッターチャンス。もしくは濡れ場。
しかし、佳澄の尋常ならざる殺意を持った瞳は、別の何かも捉えていた。
「おっ……おおっ……お、お、おうおう！　見ろや勘助」
背後の武田が、ごつい指を差した。
四人の男の背後数メートルには、二人の女生徒が歩いていた。
「た……武田さん……一人は、噂の転入生でやす。……ですが、もう一人は……」
不思議に思っても仕方がない。ほんの数十分までは、佳澄と全く同じ風貌だった生徒である。
佳澄は分厚いレンズの脇から指を入れ、目を何度となく擦ってみた。

痛いほどに擦った挙句、確信し……唖然とした。
「……紗江」
勘助は蛙の様な笑みを崩さず、ねとりと訊ね返す。
「紗江？　それは……貴女の『彼女』ゲスか？」
佳澄とて分かっていた。これは、勘助による嫌がらせにすぎないと。ここで躍起に紗江へと駆けよれば、彼等は馬鹿にして笑うだろう。
分かっていた。分かっていたが、走り出した。
走らずには居られなかった。変わり果てた様相の、その彼女へと。
佳澄は声を振り絞る。
「紗江！」
冷静に、顔色は普段のままに、波打つ動悸に倒れそうな程の目眩を感じながら。
「あっ、佳澄」
二人の距離がそこまでに迫った時、佳澄は思わず足を止めた。
紗江の隣を歩くその少女が、佳澄へ顔を向けたからだ。
まるで、子供のようだった。ヤンキー風に髪を金髪に染めるも、吊り上がった目立ちと丸い輪郭は、女児のように彼女を演出する。
その上、佳澄よりも輪をかけて小さな背丈では、本当に子供と勘違いしても不思議ではない。
そんな小さな少女の視線に、圧倒された。目を閉じてしまいたくなるほど真っすぐな瞳に、佳澄はたじろいだ。
「佳澄、彼女が茜ちゃんよ」
紗江が笑顔で少女に手を掲げた。謎の美少女転入生がサバゲー部へ入部したという知らせは、数時間前の乙女倶楽部会議にて知っていた。その少女が、この少女だと紗江は言うのだ。
———美少女……？　どこが？　子供じゃない。
彼女の動悸は、嫉妬という油を注がれ燃え上がりそうになっていた。
「へぇ、これが……なんたら倶楽部の紗江の友達？　聞いてた通り、

みんな同じ格好してるのね」
「う、うん……別に、指定があるわけじゃないんだけど……自動的に」
紡がれていく会話は、不愉快意外の何物でもなかった。
「あっ、てゆーかさ、その恰好でなんたら倶楽部に行くとマズイんじゃない？」
「えっ？　別に恰好に規制があるわけじゃないし……これでもいいと思うけど」

――――何……言ってるの、紗江？

「ふ～ん。じゃぁ、そのままでいなよ。そっちの方が可愛いし！」
「えっ……えっとぉ……そう、なのかな？」
紗江はチラっと、先を歩く亮介を見た。
「うっ……うん。そう、しようかな……」
「そうだって！　そっちの方が絶対可愛いよ！　あの馬鹿だってイチコロよ！」
耐えられない会話。耐えられない事実。耐えられない疎外感が、佳澄を襲った。
彼女の声は、とても霞んでいた。
「何……その格好」
「え？」
力の入らない声に青ざめた顔も援護して、ひどく冷徹に聞こえた。
「えっと……あの、これは……茜ちゃんが……」
短くなったスカートの裾を気にするように、紗江は恥ずかしそうに腰を窄める。
「私達、流行に流されずこの恰好でいようねって言ったの……紗江だよね？」
その記憶は紗江にもあり、戸惑いに視線を逸らせた。
「えっ、あっ……でも、それ中学の頃の話……」

話しを聞かず、遮断する。
「私、ずっと紗江を見てきたよ。ずっと紗江の傍で尽くしてきたよ。ずっと紗江を想ってきたよ。紗江の事を想ってない日なんて一日もないよ？　なのに……なぜ？　なぜ一言でも私に言ってくれないの？　なぜ勝手にそんな事をするの？　ねぇ……紗江……」
分厚い眼鏡から、一縷の涙がこぼれた。

「ずっと一緒にいようって、紗江が言ったのに」

突如、佳澄の分厚いレンズから、大量の涙が溢れてきた。
茜にとって、まるで予期しないもの。何の事情があるのかも分からない。二人がどんな関係かも分からない。故に茜は、取り繕うことしかできなかった。
「あっ……あなたも、イメチェンしたいの！？　そ、それらなら、いつでも言ってくくれたらいいわ！　そう！　紗江の友達は私の友達だから！　だから……！」
若干の脂汗を掻きながらも、笑顔と共に片手を差し出した。
佳澄は即座に、茜の差し出した手を叩き落した。一瞬の涙は既に止まり、今はもう無表情な佳澄に戻ってる。故に感じる、怒気が溢れていた。
「名前と、部活を教えて」
調査済みの茜の情報を、佳澄あえて訊いた。
「えっ……えっと。葛城、茜。サバイバルゲーム部……だけど」
佳澄は、目の端に見えていた亮介が、こちらを振り返った事に気が付いていた。
「おぉーい！　紗江ぇ。早くしねぇとバスいっちまうぞぉ！」
そう亮介に急かされれば、紗江は急ぐしかない。どんな状況であれ、紗江は亮介を優先する。「ちょ、ちょっと待って！」と慌てふためき、亮介へ走っていく。

だからこそ、このタイミングで佳澄は呟く。
茜にだけ聞こえるように、このタイミングを見計らって……。
「紗江は、誰にも渡さない」
嵐の前触れだけを、茜に与えた。

第二章　（七）

葛城高校の裏手には、そこそこ立派な山が聳えている。その名を葛城山という。名が示す通り葛城家代々からの所有地である。そこには歴代の長、また殉職した組員達の墓標が立てられ、この地を見下ろしている。

山の前には葛城高校の校舎が４つ並んでいる。旧校舎３つに現在の新校舎１つ。旧校舎は、今は部室として使われており、葛城一部上場のうち、トップ３の部活に与えられる特別な部室でもある。

その第一旧校舎は、酷くぼろい。創立時の校舎とあってか、木造造りの校舎には到るところに穴があき、滅茶苦茶に破壊されたガラスは修復もされず、無駄に涼しい風が舞い込んでくるという有様である。

そんな廃校感漂う第一旧校舎ではあるが、校舎一つを丸ごと部室とするのは気分が良いものだ。

この気分の良さを味わえるのは部株ランキングＮＯ３の部活。

即ち、待機部である。

授業後に即帰宅の許されるベスト３の部活にも関わらず、彼等はいつまでもここで屯をしている。特　別な事など何も行わなず、無意味に待機をしている者たち。それが、待機部なのである。

全部員数は１００名近くにも上るとされ、部活ランキング２位の帰宅部と並び、二大派閥と称されている部活である。

だが、そんな大きな組織である待機部でさえ、女性不足は深刻な問題であった。いや、大きさ故に深刻な問題だったともいえる。

唯一の女性部員は、乙女倶楽部からの兼部である長江佳澄。しかし、そんな唯一の女生部員は、女性にしか興味を示さないという変色家。「もう、ＸＸ染色体なら誰でもいい！」と発情する野獣めいた男達の猛列アピールを次々と蹴散らし、無視し続け、最終的には

皆が彼女をあきらめ「待機部に、女生徒はいない」と公言するまでに至っているほど、彼女は一辺倒の変色家だった。
佳澄からすれば、所有権上、待機部に在籍しているだけなのでこれは好都合である。だが、男子生徒はそうもいかない。確かに存在する女性を無視する事は、青春期の男にとっても苦しいのだ。そのストレスは待機部全体に充満し、爆発寸前にまで性欲が溜め込まれていた。

と、武田はこんな説明を、多数の部員の前で懐古的に語っていた。
大広間に集まった部員達は床に膝まづき、椅子に座る武田を崇めるが如く囲んでいた。
「な……泣くではない、お前達よ。これまでの苦悩は、すべてあの葛城茜を我が部へ迎えるための試練であったのだ。美味い酒に酔いしれるには、それだけの汗を流さねばならぬのだ」
平伏す部員達の最前列に座った勘助。彼もまた、他部員と同じく涙を流していた。
「へ、へい。武田さん。つまりこの涙は、我々の苦労の汗の結晶。それを流すには時期が尚早すぎる……そう言われているのでゲスね」
武田は、腕を組み目を閉じながらも、勘助の言葉にグスっと鼻をすすった。
「す、すまぬ、勘助。わしぁ、言葉足らずだ。いつも主に言葉を借りねばならぬ」
「そのような御言葉……私めには勿体のうございやす。その御心こそが、有難き至福でござぁいやす」
勘助の言葉は、待機部部員達の言葉であり心でもあった。薄暗い大広間で、ただただ、鼻水をすする音が溢れ返っていた。
そんな感動的（？）な大広間へ、戸口からの夕日が差し込んだ。
廊下の外からすっと姿を現した佳澄は、淡々と部員達へ言葉をかける。
「サバゲー部員。すべてが部室に揃ったようです」

武田は、待っていたとばかりにギロリと目蓋をかっぴらく。
「各人、面を上げい！　出陣の時じゃぁ！」
号令が部員に響き渡ると、広間に伏した部員達は猛々しく立ち上がった。
その身に止めどなく溢れる性欲を溜め込んだの猛者達は、この時を待ちに待ち望んでいた。
勘助は部員達から一歩前に出ると、武田将軍の前で怒号を上げる。
「いざ拳を握れ！　敵は、サバゲー部にあり！」
武田がすっと立ち上がると、部員達は拳を肩元にぐっと構える。
「あの馬鹿共から、葛城茜を奪取せしめん！　敵は、サバゲー部にあり！」
ホラ貝の音が高らかに鳴り、武田が鬨の声を上げていく。
「曳曳応――――」
部員達はその拳を、ボロボロの天井へ突きだした。
『曳曳応――――』
『曳曳応――――』
鬼々に満ちた数多の足音は、古い第一旧校舎を存分に揺らしていた。

裏山から性欲にまみれた殺気が立ち上る頃、そんな事は見ず知らずの。昨日通りのサバゲー部部室である。
「ねぇ、メッシュ。ちょっと、あんたの株カード見せないさいよ」
「あぁ？」
ボロボロのソファの隅に座った茜は、膝にノートパソコンを置いて学内サイトを開いていた。学生専用のこのサイトでは、主に部活、個人株のデータ観覧が可能である。部株についての基本ルール、現状の部株数値や個人株価格もナスダック電光掲示板並のリアルタイム速報で更新されており、それを茜は確認していた。
同じソファに寝そべりながら、茜に足を向けていた冬治は返答した。

「面倒くせぇ……つーか、そんなくだらねぇ事、向こうでしろよ。場所とって仕方ねぇだろガキチビ」
暑さに覇気がでない冬治が憎まれ口をたたくと、同じく暑さに覇気が出ない茜は面倒そうに言い返した。
「いいから黙ってカード出しなさい。後、ガキって言うな。次に言ったらその不細工なメッシュを水玉模様に染色するから。ついでに言うけど、ここは私の場所であり、お前の場所じゃない。更に言ってやるけど、メッシュが全然似合ってないのよ、アフロの方がよっぽどマシよ。最後に一つ言ってやるわよ。靴を脱いで寝そべっているのは良しとしてやるわ。でもね、靴下が左右で柄が違うってのが無茶苦茶目ざわり。あっ、そうそう、誰に向かって足向けてんのよ。五寸釘で打ち抜くわよ、腐れメッシュ」
淡々とした口調で長々とした罵倒した。ソファの淵から頭を落としながら天井を眺めている冬治は、　言葉を反芻するように沈黙した。
長い、長い、そこそこ長い沈黙だった。
「……水玉、が、なんだって？」
「もっと色々言ったわよ」
またも反芻するように、冬治は沈黙。
そして、何かに気が付きおもむろに立ち上がった。
「おい、クソじゃり！　誰のメッシュが不細工だ！　ぁあ！」
「だから、他にも色々言ったでしょ！」
茜も元気になてきた。
「アフロのどこがマシなんだよ！　メッシュがあってのイケメンだろうがよ！」
「自分でイケメンとか言ってんじゃなわよ！　だいたい、メッシュ意外にも色々言ってるでしょうが！　糞メッシュ！！」
ガルルルぅ、グルルルぅ、と睨み合う二人だが、本日は誰も止めやしない。龍と虎の喧噪する背後では、ファッションショーが繰り広げられていたのだ。

例の試着室ボックスは依然として部室に置かれ、その前には病院の患者服を着た亮介と、白衣姿でエリート医師のような佇まいの大五郎がいた。なぜか亮介は車椅子に座り、大五郎医師はその車椅子のハンドルを握っている。

眼鏡をきらりと光らせた大五郎は、ボックス前に律儀に立つメイドへ呟く。

「黒姫君。次の検体、いってみよう」

茜のメイド黒姫は、メイド服ではなく何故かナース服姿でノートを手に持っていた。しかしサングラスだけはきっちり着用しており、そのサングラスの淵から鋭い目を覗かせて頷いた。

「では、参ります」

いつになく真剣な面持ちの亮介は、この合図に対し重々しく首を縦にふった。

「あぁ……やってください」

黒姫は、ちょっとだけむっちりした二の腕を揺らし、衣装ケースのカーテンを引いた。

その中にはなんと、レースクーン！　の格好をした紗江が居た。

その横からナース服とサングラスを着た千代影が、ナレーション口調で説明した。

「この衣装は、２００９年釘宮サーキット８時間耐久レース、略して、釘宮８耐におき実際に使用されたセパレートタイプのコスチュームでございます。大胆に開いた胸元は大きなバストを一層に強調し、またミニサイズの上着を羽織ることで余ったウエストをサポート可能。まさにコスプレに適した優良コスチュームとなっております」

その大胆に開いた胸元を恥ずかしそうに隠そうとする紗江は、とてもエロティックで眉唾物である。まさに、「コスプレ３割増し効果」を遺憾なく発揮する紗江である。

が、二人のナースメイドと大五郎医師は、そんな紗江とは別の方へと顔を向けている。

エロ患者、亮介だった。
亮介はじっと黙りこみ、エロティック紗江を凝視しながら腕を組んでいた。
「どうだ、亮介」
大五郎医師に訊ねられ、エロ患者は更に更に紗江を凝視する。
だが、彼は哀しげに首を振った。
「……はぁ……ダメだ……出ない」
それは、昨日の帰り道の事らしい。ミニスカになった紗江はミニになった事を忘れ、無防備に歩道橋の階段を上がっていった。その時、エッチな風が吹き、紗江のアレが見えたというのだ。しかし、亮介は鼻血が出なかったという。妄想すらも無かったという。
それは変だ！　という事で、今こうして亮介鼻血実験をしているのだ。とはいえ、ノリノリなのは大五郎と亮介と、なぜか二人のメイドだけであり、たいして興味もない冬治と茜は後方で喧嘩をしているというわけだ。
エロ患者は紗江を凝視しつつも、眉を寄せて強張った。
「……なぜ……なぜだ！　眼鏡時代より確実に進歩したこの個体が、何故、僕に流血の息吹を感じさせない！　あぁ……あぁぁ！　嗚呼アアあああ！」
エロ患者は取り乱した。サラサラの髪の毛がボサボサになるほど掻き毟り、発狂を終えたと思った途端、絶望の様で俯いた。
「僕……死ぬのですか」
大五郎医師は苦い顔になりながらも、丸淵の気取ったメガネの位置を冷静に直した。
「だ、大丈夫だ、亮介君……。君はただ、見慣れ過ぎているだけだ、この個体を。もっと別の個体に目を向ければ、君の病は必ず治るはずだ！」
「でも……僕の横には、いつだってこの個体がいるじゃないですか……。こんなに傍にいる個体から目を反らして、態々遠くの個体を見つめろって……、先生は、そう言うんですか？　それで本当に、

僕はエロ魔人として生きられるのですか？　先生……」
　儚い亮介から、大五郎医師とナースメイドは目を逸らせた。その仕草に、エロ患者は発狂した。
「ははっ……ははっ！　あはははっははは！　やっぱりそうだ！　やっぱりそうなんだ！　僕は死ぬんですね！　エロ魔人としては、もう生きられないんでしょ！　分かってるんです……分かってるんですよ、そんなことは！」
　刹那！　大五郎医師が、エロ患者の頬を冷たくひっぱたいた。
　そして、冷徹な瞳でエロ患者を直視した。
「生きる事を諦めた人間に……治療の余地はない」
　亮介の目尻に……涙が溜まっていく。そんな亮介へ、大五郎医師の温かい言葉が降り注ぐ。
「だが……私は諦めない……。エロ魔人を生かすことを、私は決して諦めない！」
　ぶわぁっと、亮介の頬を涙が流れ落ちた。
「せ……先生」
　この時、ナースメイド黒姫は、看護助手としての勘を最高潮に高ぶらせた。
「千代影、今よ！　出しなさい！　次の検体を！」
　ナースメイド千代影は、その意図を瞬時に悟りさっと衣装ケースのカーテンを閉じた。そしてすぐさま、閉じたカーテンの向こうからナレーションを開始した。
「本日の特選素材。萌えコスプレブームに終止符を！　をテーマに、コスプレの本来あるべき姿を徹底追及。コスチュームとは何なのか？　特異な衣装に身を包むことなのか？　否、断じて否である。コスチュームとは忘れ去られた遺物への懐古なのだから」
　力強い千代影のナレーションが終わると、黒姫はさっとカーテンを横へ開いた。
　瞬間、一同すべてが息を呑んだ。

純白の肌襦袢だけを纏った司が、か弱い女の子座りで吐息を乱していた。肌襦袢は大きく乱れ、着崩れする胸元を切なそうに片手で押さえる。しなやかな茶色い髪も凄絶に乱れ、髪の毛が数本、口の脇に入っていた。

さらに千代影が追い打ちをかける。霧吹きを取り出し、司に噴射していくのだ。

「い……いや。やめて」

吐息と共に濡れゆく襦袢。

エロ魔人の妄想力は復活した。

めくるめく「良いではないか～ごっこ」を、確かにそこに感じたのだ。

「えがてぇりぃぃばぁ――――――――」

花火大会を彩る最後の大玉。それが、この日サバゲー部部室にて見られる事となった。

「亮君！」

紗江はあらかじめ用意していた生レバーを持ち、ぶっ倒れたエロ患者の頭を膝に乗せる。レバーを口へと運ぶにあたり、レースクイーンの胸が幾度も亮介の顔面を掠めていく。

しかし、そんな事をまるで気に掛けず、亮介はただただ爆発的なエロ妄想に目を回していた。

――――そんなに、司君の方が可愛いのかな……。

と、紗江も司を見た。

だがそこには、よからぬ風景が広がっていた。

息も絶え絶えに、水も滴る良い美少年になった司へと、一つの手が差しだされたのだ。

「大丈夫か……司」

大五郎医師が司の頬に手を添え、濡れた横髪へと指を通した。そして、切なげに司を抱き上げる。

「もう……ここを抜けだそう。君をこれ以上……こんな実験に巻き

込みたくはない」
見つめ合う、美少年と美青年。
「ぐらふぅ――――――――――――――」
花火大会のアンコールにて、もう一発鮮血が打ち上げられた。
鮮血のバカップルは、この日も健在であった。

数分後。
「だからぁ！　なんで僕を女装キャラにしたてようとするの！　中学まではショタキャラって言ってたじゃん、みんなぁ！」
司が珍しく声を張るも、これは「流行」という非常にデリケートな問題のため、中学からの友人共はみんな揃って無視していた。そんな孤独感に、司がいっそう不服を叫ぶと、茜が憤懣した。
「もう、煩い！　何れショタキャラにしてやるから、今は黙ってなさい！」
先の馬鹿げたお医者さんごっこに苛立っていた茜は、その八つ当たりとばかりにガシガシと司を蹴り飛ばした。
「や、やめてよ！　蹴らないでよ！」
「うっせー。あんたがそんな恰好してるせいで、私は今こんな場所で暇を潰してやってるんじゃないの！　てゆーか！　あんたがいつか美味しいところ持って行きそうで腹が立つのよ！　落ちは全部私に回しなさい！」
建前のついでに本音を言って暴力に打って出るという、正にそっち系の道の人のやり方で、茜はバシバシと司を蹴り飛ばした。
「やめてよぉ！　美味しいところなんか、全部上げるから！」と司は悶えたが、そういう事は体に覚えさせるのが一番だ、と思っている茜は、そのまま司を蹴り続けたという。

こうして、平穏にドタバタとするサバゲー部員。
彼等は、その迫りくる存在に、まるで気付いていなかった。

第二章　（八）（前書き）

このあたりからやっと中盤。とりあえず、長い。要点絞れよと言いたくなる

第二章　（八）

部室から聞こえる茜の甲高い罵声。確かに聞こえたレースクーンという言葉。

そのどれもが、待機部員達が長い年月羨望し、切望した台詞。

先頭に陣取った武田は、所望する未来への意気込みと、多大な嫉妬を込めて引き戸へと手をかけた。

「行くぞ、皆の衆」

部員一同、嫉妬と緊迫に息を呑む。

武田は、ガラガラドッシャ～ン！　と引き戸を開けた。そのまま一歩目を踏み出すと、威厳をこめて胸を張り、学生服の懐から一枚の紙切れを室内へ掲げた。

「我ら待機部、馬鹿共の手から女生徒二人を確保すべく、ここに参上した！」

部室はしんと静まり返った。

押し寄せて武田の周囲を囲む待機部員は、その光景に思わず膠着した。

部室には、医者と患者とナースとレースクイーンと肌襦袢女と金髪ロリ少女、おまけにメッシュという、とってもとっても楽しそうな雰囲気が溢れていたからだ。

あまりの空気感の違いに、勘助がすかさずサポートした。

「つ、つまり！　葛城茜と山吹紗江の株を交換しろと言う事でゲス！」

半ばマウントポジションで司に殴りかかっていた茜は、

「はぁ？」

怪訝に答えた。淡々とした様子で司を離してやると、武田の掲げた一枚の用紙へと歩み出た。

「個人株交換申請書……かぁ。何、これ？」

女性に近寄られガチガチに膠着した武田の横から、勘助が答えた。

「こ、これに交換する株数と権利を書けば、株を交換できるでゲス！」
「へぇ～。これで交換を申請するのね。聞き逃したけど、貴方達何部なの？」
親族・佳澄以外では久しく女に接していない武田は氷漬けになっていたので、その氷を勘助がお湯を持ってきて解凍すると、武田は漸く口を開いた。
「お、お……おう。たい、き部だ」
「待機部？　変な名前。とういうか、待機ってもうサークルですら無いわね」
彼を覗き込む大きな瞳。ブラウスの隙間から見える小さな膨らみ。彼の生活のどこを探したとしても　存在しない光景に、壊れたロボットのようにブシューっと煙を吐いてしまった。
こんな武田に茜はプイっと背を向けると、ソファにどっしり腰を据えて足を組む。置いてあったノートパソコンを起動させて、学内サイトを観覧し始めた。
この際、何度か足を組みかえるが、その都度、待機部員が生唾を飲み込む音が部屋中を飛び交った。
「へぇ、部活ランキングは3位か。でも部株の価値はそんなに……あぁ、部員数が多いのね。あまった　個人株も大量に所有しているし……。その上での3位ってことなら」
もう茜のスカートの狭間にしか目が行かない待機部へ、悠々と告げた。
「ま、初交渉としては申し分ない相手ね。いいわよ、交換してあげる」
出会ってから僅かに三日の関係だが、冬治は茜が何かに興味を示していると察した。
「おい、てめぇ何考えてやがる」
「何って？　せっかく面白そうなゲームがあるんだから、トップ目指してみたいでしょ。あんた達としても、こんな部室より旧校舎を

乗っ取りたいでしょ？」
「まぁ、そりゃぁデカいに越したことはないけどよ……」
「じゃ、決まりね。で、待機部の方々？　要求する権利義務と交換比率は？」
簡単な語句でも偏差値１８という葛城校では難語である。誰一人として権利義務も交換比率の意味も分かってはいなかい。しかも今は、茜のスカートに夢中になり過ぎていたため、よく話を聞いていない状況だった。
突入して一分と経たずに、待機部員達は冷や汗を掻き始めたのだ。
「ねぇ、だから、要求する権利義務と交換比率を言ってくれないと取引にならないいでしょ」
茜が呆れたように髪を靡かせると、チラっとうなじが見え、もっとそれどころではなくなった。
待機部は、性欲という檻に囚われてしまったのだ。
だが、こうなる事を予想していた発起人が、待機部員達の中から歩み出てきた。
黒いおさげ髪、分厚い眼鏡。
「権利義務の要求は一切無し。そちら側からいくらでも義務を要求していただいて結構です」
この人物が出てくる事を、茜は薄々気付いていた。学内サイトには、誰がどの状態で何部に所属しているのかという情報が、細かく書き記されていたからだ。
待機部の情報の中には、昨日出会ったあの人物の名前も記されていた。

長江佳澄。

茜は、自分を敵視する視線に慣れていた。家系の関係上、この葛城市に住む以上、彼女はその視線を浴びずには暮せなかった。人一倍に、敵視される事には敏感だった。

だからこそ、佳澄の自分に対する第一印象にも気付いていた。気付いた上で、彼女は一つの方法でしか、佳澄の相手ができなかった。
「ふ～ん。で？　それで終わりじゃないでしょ。そんな甘い話……取引って言わないのよ」
依然感じる佳澄の敵視に、茜は突っ張った。敵とみなされる以上、敵として接するしか方法が見あたらなかったのだ。
佳澄は不敵な笑みを浮かべて、続きを伝えた。
「ただし」
佳澄のメガネがギラっと光る。その奥の瞳では、卑猥な衣装で倒れる紗江の姿を捉えながら。
「そちら側の交換株を、葛城茜の個人株５１％、山吹紗江の５１％と指定させていただきます」
佳澄の言葉の意味は、部株規定など何もしらない待機部員、及びサバゲー部員には理解できない。唯一理解していたのは転校三日目である、茜だけだった。
その茜は、厳しく眉根を寄せ上げ威嚇する。
「はぁ？　ふざけてんの？　あんた」
「別に。こちらの個人株は有り余っていますので。それを利用し新たな所有権を得たいと思うことは、とても現実的な話だと思いますが。あなたの脳では理解はできませんか？」
冷静な口調ながら、その中には真っ向からの敵意が溢れ出す。それを、すべて受け取る茜もまた、敵意をむき出しに睨みつける。
「大企業による弱小会社の買収。残念だけど、私は新聞記者じゃないのよね。そんなものに何の好感も持てないのよ」
理解のできない会話ほど虫唾が走るものはない。冬治は、二人だけでやり合う女性陣に切ってはいる。
「おい、茜！」
「なによ！　いきなり名前で呼ばないでよ！」
「うるせぇ！　そんな事よりちゃんと説明しろ！」
茜はバン！　とパソコンを閉じると、佳澄に指を差した。

「あたしと紗江を引き渡せ、そうすれば好きな権利を与えてやる！
そう言ってんのよ、この女は！」
簡潔明瞭な説明で、サバゲー部、待機部共に事態を悟り得た。
「そ、そうなのか？　佳澄よ」
実のところ武田は、どう茜を奪うのか、という算段をまるで知らなかった。佳澄が「奪える」と言ったからこそ、奪えるつもりになっていただけなのだ。
「あの子を奪う。そう意気込んでいたのは貴方達でしょ？　今更怖気づいたのかしら」
「ま、まさかの……。い、今更、怖気づくなぞ」
どう見ても怖気づく武田の横から、勘助がニヤニヤと笑いながら語り始めた。
「なるほど……確かにうちの部株には余裕があるでゲス。それはもう……こんな『弱小』とでは比べ物にならないほどの、余裕があるでゲスなぁ」
佳澄の策略を読んだ勘助は、もっとも挑発に乗りそうな男へ向け、下品な笑いを浮かべた。
「あなた達ごときの部活と、うちが取引してやるんでゲス。これであなた達『馬鹿』の株も少しは上がるでゲスよ？　女、二人を売れば……の話でゲスが」
ねっとりと絡みつく勘助の声は、簡単に男の逆鱗に触れた。

「黙れ……糞ガエル」

小さく呟き、拳を握る冬治。その横に居た茜の顔も、不快に極まっていく。
それを佳澄は見逃さない。さらなる揺さぶりを、二人に仕掛けた。
「あら、やけに覇気が無いのね、噂の『バカ』は」
冬治の拳がピクっと動く。
「それと、これはゲームではない。一方的な蹂躙よ。それが理解で

きないのかしらね……そこの『ガキ』は」
　茜の眉がつり上がる。
　二人は同時に憤慨した。
『ふざけんじゃねぇ！』

「てめえ等全員おもてに出やがれ！」
「おい、そこのクソアマ！　ちょっと面かせやぁ！」
　髪を逆立てる二人は、今にも殴り合いを始めんとばかりに噴気していた。
「待って冬治！」
　冬治の前へ司が走りこんだ。
「ぁんだよ司ぁ！　これだけコケにされておいて、黙ってろって言うのかよ！」
「違う！　こんなの只の……」
　宥めようとした司を、茜が蹴り飛ばした。
「あんたみたいなカマ野郎はすこんでなさい！」
　そうして蹴りを下した足を、大きな手ががっしり抑え込む。
「葛城。お前もだ」
　大五郎が、茜を止めた。
「なによ、男色趣味に触られる筋合いは無いのよ！」
「拒否すれば、事は終わる。それに、正式な部株交換中にルール無用の喧嘩はご法度だ」
　大五郎は、切れ長の目で部室の脇を見た。その視線の先には先程までじゃれ合って遊んでいた黒姫と千代影が、カイザーナックルをはめて茜を睨んでいた。
「な……何よあんた達！　貴方達は私のメイドでしょ！」
　黒姫と千代影は同時に言った。
『校内ルールは絶対順守。そう、旦那様より言いつけられております』

メイドに同調し、司も冬治を睨みつける。
「冬治も。ここで拳を振るうのなら、それは僕が許さない」
司の大きな瞳は、すべてを吸い込むように圧力を増していく。子供のようだったその顔を変貌させ、その眼力と風貌に異様な程に禍々しいオーラを纏い、冬治を睨めしていた。
「っち……」
舌打ちだけをその場に残し、冬治は意外にもあっさり拳を抑えた。
こうして治まりつつあった喧噪に、佳澄も舌打ちを隠せない。
部株交換中の暴力沙汰。それは部株規則に反しており、それを理由に責任追及、あわよくば無償のうちに個人株を奪ってしまいたい。そんな思惑があったのだ。
これでは大五郎の言う通り、交換を拒否されて終わってしまうのだ。
佳澄は、策を練り直そうと顔を俯けた。その時、彼女の耳にある女性の声が届いた。
「なにしてるの？　佳澄」
貧血から、ようやく紗江が目覚めた。その横で亮介もフラフラと起き上がる。
「んん……あ、れ？　なにぃ、この団体さん」
亮介の鼻血の意味。それは佳澄も知っている。そしてそれが、紗江の破廉恥なる衣装から来ていると推測するのは、仕方がないことだった。
佳澄は唇を噛みしめた。
「紗江……もう、そんな格好……しなくていいから」
部室隅に置かれていた紗江のブレザーを手に持つと、紗江への肩に優しくかけた。
「私が……助けてあげるから」
事態の掴めない紗江と亮介。二人は佳澄の言動に、同じ危惧を抱いていた。
———勘違いしている。

紗江がその危惧をアイコンタクトで亮介へと送ると、彼も頷き釈明へと佳澄へ声をかけた。
「あ、あのさ、佳澄ちゃん。なんというか、これには色々と経緯が……」
だが。
亮介の、頬が弾けた。

第二章　（九）

最低の愚劣行為と罵らんばかりに、佳澄は亮介に手を上げていたのだ。
小さな部室に、軽くも鋭い一閃の響き。
その冷たすぎる彼女の気配は、一瞬にしてすべての生徒を硬直させた。
交渉中の暴力行為。それに、二人のメイドが反応する。機敏に佳澄へと一歩を踏み出そうと試みた。だが、佳澄はメイドに手を翳した。
「交渉は決裂。それでけっこうです」
交渉で無いとすれば、これは単なる喧嘩にすぎない。メイド二人は静止した。しかし、それに納得しない者も当然この場には存在する。
勘助は佳澄に呑まれる事無く、彼女へ近づく。
「それは困りまりやすねぇ、佳澄さん。貴方の勝手な言動で、我が待機部の悲願を亡き者にするなどとは……甚だ行き過ぎているでゲスよ？」
ニヤついた釣り目の中に、禍々しい怒りがこもっていた。
「分かっています……そんな事くらい」
佳澄は亮介を散々に見下げると、彼に背を向けメイド二人へ質問する。
「貴方方も、運営管理員の権利をお持ちでしょうか」
運営管理員。それは、理事または理事代理である葛城董から派遣される事務員である。管理員は株制度における実質的な運営委員であり、交換等の株移動等はすべて管理員を通して行われる。
『はい。我々は理事である葛城修三様より、直接管理員の権限を頂いております』
「そう」

佳澄は、分厚いメガネのフレームを持ち上げると、冷静に武田へと体を向けた。
「待機部は、葛城茜だけを奪取する。紗江は個人株を奪取した後、乙女倶楽部へ譲渡する。そう、制約して頂けるのならば、知恵をお貸ししましょう」
武田は腕を組み、考えた。紗江といえどもメガネとおさげ髪を捨てた以上、貴重な女生徒である。ましてや部員数の多い待機部にとって、一人の女生徒よりも二人の女生徒を切望するの。しかし、佳澄の要求を拒み、二人どころか一人も奪取できない事態を考えれば、茜だけでも手中に収めたい。
武田は部員達を見回した。皆が小さく頷いていた。
「よかろう。佳澄の、要求通りにしてやろう」
これに佳澄は軽く頭を下げると、二人のメイドへとこう告げた。
「待機部は、サバイバルゲーム部に対し、ＴＯＢ公開買付を行います」
誰もが聞きなれない言葉に佇む中で、紗江だけは声を震わせた。
「……佳澄」

第三章　（一）（前書き）

まだ3分の1。

第三章　（一）

そこは暗い闇の視聴覚室。平時は静かなその場所も、この日だけは違っていた。

「お姉様ですか。佳澄に、嗾けたのは」

佳澄は、陽子へ問いかけた。微かに震える声には、怒りのほども混じって聞こえる。

陽子はパソコンに目を向けたまま、そんな紗江へと返答した。

「しばらく見ないうちに随分とあか抜けたのね、紗江」

「……今は、そんな事はどうでもいいです。話を、逸らさないでください」

「そうかしら？　貴方の変貌した姿が、この件に何の関係も無いと言い切れるのかしら？」

「……それは」

言葉を濁らせた。佳澄の自身への心情を、気づいていない分けではなかった。

だが、それとこれとを混同させたくはない。

「ですが、ＴＯＢの情報については他部へ流出させない。そう決められたのはお姉様です。あの子が、自身の感情だけでそれを破るとは思えません」

「なぜ？」

「なぜって……佳澄は！　佳澄は誰よりも乙女倶楽部を愛し、また貢献してきました。自ら率先して待機部への交換にも個人株を差し出しました。そんなあの子が……」

陽子はキーボードを打つ手を止めた。

「すべて、貴女のためでしょ？　待機部なんて場所へ貴女を行かせないために、自分を犠牲にしたのでしょ？　あの子にとって、乙女倶楽部より何よりも、あなたが大切だったのでしょ？」

「ですから！」

紗江は涙声で声を張った。
「お姉様は、あの子の気持ちを一片たりとも利用していない、そう言い切れるのですか！　私の亮君への気持ちを知った上で、あの子に何かを嗾けたりはしていないのですか！　そう私は聞いているのです」
怒涛に詰め寄る紗江の勢いに、陽子は顔を逸らせた。
「さぁ、どうかしら」
「どういう意味ですか！」
紗江はパソコンデスクに両手を激しく叩きつけた。動揺し、取り乱す紗江とは対照的に、陽子は顔を背けつつも涼しげな様子である。
「どういう意味なのか、それはあなたが考えなさい。私が佳澄に嗾けたとして、そこに何の意味があるのか、なんの意図があるのか。ましてや、ＴＯＢという情報の流出を禁止したのは私です。それを無理に解除させる事に、なんの意味があるのか」
陽子のするどい指摘に、紗江は沈黙する。言われた通り、ＴＯＢが学内にの部活に知れ渡る事は、部株の情報を操作してきた乙女倶楽部にしてみれば害と成り得る。だが、数々の裏工作を行う乙女倶楽部だからこそ、その部長である陽子を真っ先に疑ってしまうのだ。しかしどれほど疑ったところで、その意図がまるで見えてこない。彼女の推測では、陽子の思惑が計れない事は承知している。故に、彼女はこうして直々に訊ねているのである。
その答えをあやふやに答えられたのならば、埒もあかなかった。
「最悪の場合、私は、私の権限を使用させて頂きます」
それだけを言い残し、紗江は視聴覚室を退出していった。
暫しの沈黙が訪れた後、
「ふぅ……」
と、肩の力を抜く陽子は、暗闇に向かって声をかけた。
「盗み聞きは感心しないわよ、優子」
暗闇の先に、一つのドア。そこから、分厚いメガネにおさげ髪の乙女が登場した。

「あれ、気づいてた？」
「当たり前でしょ。で、何か用かしら？」
「いやいや、なんか面白そうな事になってるからね」
「全く他人事ね、あなたは。同じ上級乙女として恥ずかしいわね」
優子は陽子の隣へと座ると、クッと含み笑いをした。
「で、なぁんであんな適当な事言ったんだよ、陽子」
「適当？」
「佳澄だよ。別に、嗾けたりなんかしてないんだろ。あれは、単なる佳澄の暴走だ」
「……。そういう所だけは鋭いのね、あなたは」
陽子は椅子から立ち上がると、窓際へと歩いていく。
「これでいいのよ。葛城は、安定しすぎたわ。停滞した時の中では、何も生まれない。何も生み出せない」
カーテンを微かに開くと、白い光が部屋に差しこむ。
「光の出現こそが、静止した時を動かせる」
「動いた先で、お前はどうするつもりだ？」
優子へ振り返り、彼女は健やかに微笑した。
「動乱の中にして、この世界を支配する」
大胆不敵なその言葉を、優子は嘲笑った。
「ははははは。とかいって、妹連中が可愛いだけだろ」
「……まっ、それもあるわね」
陽子はクスっとほほ笑んだ。
その言動が意味する事など、紗江も佳澄も、今は知りはしないのだった。

第三章　（二）（前書き）

亮介が好き

第三章　（二）

「いい事あんた達！　あの糞女（アマ）には絶対に負けないんだからね！　少しでも足を引っ張りやがったら往復ビンタ百万発食らわすわよ！　分かった！？」

男四人をソファに座らせ、茜はホワイトボードの前で叫んでいた。

「おい、茜。どうでもいいけど、説明くらいしろよ」

「だから、何馴れ馴れしく名前呼びしてんのよ！　いくらあんたが私を名前で呼ぼうとも、私は未来永劫永遠に糞メッシュと呼び続けるからね、糞メッシュ！」

「うるせぇな……そんな事どうでもいいっつってんだろうが」

「はぁ――――！？　どうでもいい？　どうでもいいって何よ！　女の子の呼び方を変える時は細心の注意を払いなさいって、小学校で習わなかったわけ？」

「習わねぇな。お前、どんな小学校行ってたんだよ」

「はぁ――――！？　お・ま・え？　今、お前って言ったわよねぇ！　あんた何様なのよ。私の彼氏気どりなわけ？　はぁ――――？　ちょっとツンとしてやったら、もう彼氏気取り？　所詮エロガキの連れはエロガキってわけね！　よぉーく分かったわ、エロメッシュ！」

「いや……別にそんな事は……。つーか、ＴＯＢとかいうやつの説明を……」

「もう意味分かんない！　ホント男って下劣で節操のない奴等ばっかりね！　そんな事だからあの糞女にいいようにあしらわれるのよ！　そもそも、ＴＯＢなんてシステムがあるならすぐに私に言いなさいよ！　麻雀なんかしてる行間を全部その説明に回しなさいよ！」

「いや……だから今、その説明を……」

「うるせぇ――――！　今、話しかけないで！」

昨日のあの件以来、茜はずっとこんな感じだった。罵詈と雑言を一人で二役こなしながら、最後はプイっと顔を背けてガシガシと髪を掻いていくのだ。

「このままだと茜ちゃん……育毛剤じゃ間に合わなくなるぞ」

亮介がツンツンと冬治に肘を当てると、「えっ、またかよ」と呟きながら冬治が再度質問する。

「お、おい。茜……」

茜はバサっと、髪の毛を数本床に撒きながら振り向いた。

「うるせぇ――――！　今までお前等がグダグダやってたせいで溜まった借金（ツケ）を、この私がどうケツをもってやろうか考えてやってるところなのよ！　無駄口叩く暇があったら、私の靴でも舐め回してピカピカに磨いてなさい！　この馬鹿共が！」

そうして、またも茜はプイっと顔を背けてガシガシと髪を掻き毟る。茜とて、ＴＯＢとやらの説明をしたくない分けではない。ホワイトボードの前で行ったり来たりしているのだから、説明したいのだろう。

だがそれ以上に、昨日の侮辱が腹立たしくて仕方がなかったのだ。

もう数十本は抜け落ちた金色の髪をぐりぐりと踏みつけるも、それでは憤懣を治められないようで、拳を握ってはホワイトボードを殴りつけたりもした。

男子勢がいくら宥めようと試みても、大火に水鉄砲で消火にあたるようなものであり、逆に火の粉を浴びせられてしまう。今はじっと、彼らよりは聡明な紗江を待つしかなかった。

待つこと数分。ホワイトボードがベコベコに凹んでしまった頃、待望の声が入室してきた。

「遅れ、ました」

亮末は、漸くと言った様子で立ち上がった。

「遅いんだよぉ！　こんな時に何やってた……んだよ……紗江？」

紗江に振り返るやいなや、亮介は声を窄めた。次第に顔は怪訝色に染まっていき、小首を傾げると呆然としてしまった。

紗江が曇っていた。パーマが掛った黒髪は、小刻みに不穏な波を打つ。やり場の無いその瞳は、自分のつま先だけを見つめている。定位置よりもやや上がったその肩は、よからぬ力が入りすぎている証拠であった。

亮介でなくとも分かるほど、出会って四日目の茜でも分かるほど、紗江は異質な雰囲気を纏っていた。

「紗江？」

茜が不安げに呼んでみるも、紗江は入口に立ったまま動かない。紗江が動かないからこそ、サバゲー部員達も凍りついてしまう。今動けるとすれば亮介だけのだが、そんな亮介がじっと紗江を見つめたまま動かないものだから、やはり誰も動けなかった。

誰にでも分かる怪しい気配に、時は膠着した。

重々しい空気が幾度か部室を往復したころ、紗江は無言のままで歩きはじめた。一歩、二歩、三歩……十歩目で立ち止まる。それは、亮介のすぐ前だった。

彼女はおもむろに、ごそごそと学生鞄に漁り始める。

「どうしたの……紗江」

囁く茜の声。それに彼女は反応しない。鞄の中に手を入れては、ゆっくりと時間をかけて何かを探している。それほど膨らみもない鞄である。探し物はすぐに見つかったであろう。だが、それを取りだす事を躊躇うように、紗江はじっと鞄に手を入れたままだった。

呆然と紗江を眺めるサバゲー部員達。ようやく紗江が手にしたそれに、訝しさは一気に膨れ上がった。

生レバー入りのタッパーが握られていた。そしてそれは、亮介へと差し出された。

「これ、今日の分だから。明日からの分は、茜ちゃんか司君に渡しておくから」

「は？」

亮介は眉間に皺を寄せた。紗江に対し、誰よりも鈍感であり誰よりも敏感な幼馴染故、このタッパーを受け取りはしなかった。

じっと、紗江の瞳を見つめていた。
交錯しない二人の視線。紗江は耐え切れずにタッパーを亮介の足元へ置くと、そのまま無言で背中をむけて戸口へ走った。
「ちょっと、紗江！　どういう事よ」
茜は走り、紗江の腕を掴んで止めた。腕を掴んだその手には、紗江の震えが悲しいほどに伝播してくる。
直感にして、茜は悟ってしまった。
「紗江、まさか……」
紗江は、頷いた。
「うん……私、待機部に行くから」
「なんでよ！　まだＴＯＢで完全に買付けられた分けじゃないでしょ」
そんな事は、部株操作に長けた乙女倶楽部会員である紗江は重々に承知している。
だが、
「そういう、問題じゃないの」
「じゃあ、どういう問題よ。はっきり言わないと誰も納得できないわよ！」
詰め寄る茜だけが、知らない事実がそこにはある。
「佳澄が……佳澄が欲しいのは、私だけなの。私を、ここに居させたくなかったから……だから……こうなったのも、全部私の責任なの」
「あいつらは私も狙ってるじゃない！　紗江だけが責任感じる必要なんか……」
「違うの！　佳澄の事……みんな知ってるの。みんな……知ってるから」
顔を振り向かせずに紗江は答える。
見えない表情からは、何も見えない。茜はソファへ振り返えり、男子勢の表情を窺った。誰もが、視線をどこへ飛ばしていた。
「な……何よ！　どういう事か説明しないさいよ、あんた達」

怒鳴りながらの催促も、男達は反応しないでいた。

葛城高校におき、長江佳澄の名は有名であった。数々の名門高校からの推薦話を蹴り、全国模試1位という頭脳を引っ提げ、全国最下位と言ってもいいこの葛城高校へと入学してきた。入学試験は全教科満点。これまでの学内テストもすべて満点。半ば職務放棄をしていた大半の教師達が、彼女だけは「優秀な生徒」として扱った。

学力などに何の興味も無い生徒達ではるが、彼女が何故この高校へ来たのかという疑問には興味があった。

それはほどなく知れ渡る。

彼女は、いつも紗江を見つめていた。校門が開くと同時に彼女は登校。下足場の隅で石造のように直立すると、紗江が来るまでずっとそこで待機してた。紗江が上履きを履き、廊下を進み、階段を上がり、教室に入り、亮介の口へ生レバーを運ぶ姿を、きっちり5メートルの後から見つめていた。チャイムが鳴ると、渋々自分の教室へ戻っていくが、授業が終わるとすぐに紗江の教室の前へ行き、また見つめていた。

「あっ、佳澄。おはよう」

そう紗江が声をかけるまで、ずっとそうして見つめている。声をかけられたら、かけられたで、全力で安堵して肩の力を抜き、顔を綻びる。佳澄の笑みは、紗江にだけしか向けられないものだった。

こうして誰の目からでも、佳澄がこの高校を選んだ理由は見てとれた。ましてや紗江を取り巻くサバゲー部員の目には明白であり、常時佳澄よりも近い場所にいる亮介が、気づかぬはずもなかったのだ。

それだけに紗江の感じる責任を、男子部員は払拭する手立てを見つけられなかった。

「あんた達まで黙ってどうすんのよ！　全然意味が分からないって

言ってるでしょ！」
「茜ちゃん」
実質、部外者である茜に紗江が振り返った。痙攣する口元を無理に抑えつけながらも、彼女は笑って見せた。
「大丈夫、だよ。茜ちゃんの事は、私が……、私が……どうにか……する、から」
表情とはまるで裏腹に、その声は萎れてゆく。喉を通過しない空気に、音の振動が乗って行かない。声は途切れて、言葉も綴れない。
自分を止めて欲しかった。
それは昨日今日に出会った茜ではなく、もっと別の誰かに。
――――……亮君。

「もういいから」
彼女の声は、しっかりと届いていた。
「もう、そういうのいいから」
はっきりとした大きな眼を厳しく染め、緩慢にこちらへやってきた。怒気とも鬱憤ともとれない表情。冷たいのか、温かいのかも分からぬ表情だった。
茜は紗江を掴んだ手を離すと、こちらへやってくる亮介に自然と道をあけた。陽気な姿の亮介しか知らない茜は、つい唾を飲み込んだ。俯く紗江は、一歩も動かずに亮介を待ち、亮介もまた焦りを微塵も見せづに近づいて来る。
そうして、手を伸ばせば容易く抱きしめられる程、二人は接近した。
「もういいって、嘘つくなよ紗江」
紗江の俯く頭へと囁いた。だが、彼女はただ、彼の胸の前で口を塞いで堪えているばかり。
「ほら、すぐ黙る。嫌な事があったらすぐ黙る。それ、紗江の癖じゃん」
生後三十分、出生児室にならんだ二つのベッド。
嫌な事など数えきれない程に通過してきた。

いつでも、二人で。
「紗江が行っても何も変わらねえよ。むしろ悪くなるだけ」
声色も変えず、感情も出さず、その瞬間が亮介の本気だと、紗江は知っている。
本気の亮介を前にした時、自分が従う事しかできない事も、紗江は知っている。
だからじっと、彼の前で待ったのだ。

紗江の頭を、優しく胸に引き寄せた。
「だって、紗江は俺のだし……誰にもやらないから」
声は立てず、誰にも顔を見られないように、紗江は亮介の胸の中で泣いた。

第三章　（三）（前書き）

茜も好き

第三章　（三）

さて、その数分後である。
亮介は羞恥プレイに見舞われた。
「はははははは！　思わず、背景にシャボン玉が見えちまったぜ亮介！」
メッシュはウルフカットを揺らしながら膝を叩いて爆笑していた。その横には真っ赤な顔で縮こまる亮介を座らせ、キャバ嬢の如く肩を組んで弄んでいた。
「おい、聞いたか司ぁ！　紗江は、俺のもんだし……だってよぉ！」
「そういう風に茶化すのはやめなよ、冬治」
「何言ってんだ！　散々幼馴染とか言っておいてよ、とんだ亭主関白じゃねぇかよ」
「……」
あくまで無言の内にこの場をやり過ごそうと縮こまる亮介へ、大五郎が膝を折り曲げ顔を覗き込んだ。
「……なんだよ、うぜえって……まじで」
顔を背ける亮介の肩を、メガネは無表情のままでポンと叩くと、一枚の薄い袋を優しく手渡した。
「やるよ……お前に」
それは、薄さ０・０２ミリを誇る天然ゴムで製造された物を内蔵した袋であった。
「なっ……ななな……なんでこんなもん持ってんだよ！」
「サイフに入れておくと、金が溜まる」
「古いんだよ！　９０年代初頭の中坊みたいな事やってんじゃねぇよ！」
「中に水を入れる事で、緊急用の水爆弾にもなる」
「だからなんだよ！　そんな事臨海学校の時に中坊がハメはずしてやる事だろうが！」

「心配するな。これは、天然ゴムの本場、インドネシアからの直輸入物だ」
「余計嫌だよ、なんか嫌だよ！　せめて日本加工してくれよ！」
じたばたと抵抗するも、メガネの視点は一向にぶれなかった。
――――このまま抵抗したとして、おそらく馬鹿メガネは引きやしない。
そう察知すると、亮介は薄さ０・０２ミリを誇るそれを受け取り、隣の美しい生徒の手を握った。
「仕方ない……行くぞ、司」
「え？」
司の手を取り立ち上がると、その華奢な体をグイグイと戸口へと引いて行った。
これに、大五郎はその切れ長の目を大きく見開いた。
「亮介、どこいくがぁ！　誰を連れていきゅぅが！」
途方もない罵声に亮介は司の手を離すと、敵意むき出しに拳をポキポキ鳴らし始めた。
「今のは土佐弁だな？　ＮＨＫ見てなかったら危うく分からなかった所だぜ、馬鹿メガネ」
口元を歪めながら前へ出る亮介に、馬鹿メガネもメガネを片手でかけ直すと、冷徹かつ不敵にあの台詞をリピートした。
「だって。司は俺のだし……誰にもやらねえから」
ビキっ！　と、亮介のコメカミに血管が浮き出る。
「おらぁ――――！　この糞メガネ！　やるならやってやんぞ！　さっさとコンタクトに着け変えやがれやぁ！」
羞恥プレイに慣れない亮介は、もう耳から足の裏まで真っ赤になって憤慨した。
だが、それ以上に憤慨している少女がここには居た。
「うっせぇんだよ――――――――――――――――――――――――――――――――！」
茜がきれた。

その小柄な少女は全身に怒りを迸らせ、亮介の耳と、なぜか司の耳を摘みソファへ引っ張った。
「お、おい！　葛城！」
大五郎が心配そうに司を見つめる中、茜はありったけのガンをメガネに飛ばした。
「うっせぇ！　無駄に背が高けぇから耳に手が届かなねぇんだよ！　さっさと座らないと三脚持ってきてきてでも耳引きちぎるぞ！　ぁあ！」
本場の凄みでメガネを睨みつけると、メガネは仕方なくソファへ戻った。
とばっちりを食らった司までもが猛省させられるほど、茜はお怒りだった。三人を座らせると、次に部屋の片隅へと茜は駆けた。
「紗江もこっちにきなさい！」
紗江は全力で顔の筋肉を弛緩させ、今の感激なる心境をコミュニティサイトの掲示板へと切に書き込んでいる最中であった。
「あっ、せめてそのレスだけでも……」
「そんなの後でもできるでしょ！」
リアルタイムチャットこそがコミュニティサイトの醍醐味だという事を知らない茜は、些細に抵抗する紗江をホワイトボードの前へと引きずっていってしまった。微かに涙ぐむ紗江を横に置き、ようやくといった様子で茜は腰に手をあてた。
「ふぅ……ほんと、なんでこの説明に入るまでに見開き６ページも使うのよ……。今から全部まとめて説明するけど、全部あんた達のせいなんだからね！」
つまり、今から怒涛の説明台詞に突入するため、脳梁を全開にして理解しろ、ということらしい。
「じゃあ、まず現状を説明するから。紗江、お願いするわ」
「あっ、はい。まず、ＴＯＢつまり公開買付についてですが、これは簡単に説明すると、強制的な部株交換システムです。個人株の総所有率が６１％～８１％間の部活にのみ与えられる権限でして、こ

の公開買付を宣言された部活は、相手側の総合した個人株の３０％までを強制的に交換をできます」
「そう。それで、今回の待機部は私の株９９％と紗江株５１％を要求しているわけ。これを拒否するには総個人株率が４０％以下である必要があるわけだけど……あんた達が交換を全くやっていなかったせいで拒否権が無いのよ」
　サバゲー部の個人株交換は司の５０％大五郎の４９％のみであり、総合計した個人株率は茜株を含め７９％の保有率である。ちなみに、紗江の個人株は元々乙女倶楽部の所有物であり、これに換算されない。元来の部活に帰属する個人株、通称「自家株」のみがその対象である。
「は、はい。更に、この買い付け期間内は部株交換が禁止となり、故意に自家株率を上げる事も下げる事もできません。ですから、現状このＴＯＢを退ける方法は一つだけです」
「そう、それが即ち、部活対抗戦！　要は、退けたければ力ずくって事ね。ちなみに、対抗戦の種目は買付けられた側が決定できるわ。無論！　私達はサバゲー部！　種目もサバイバルゲームで行う。はい、とりあえずここまで！　分からなかった人は挙手！」
　四人全員が手を上げた。
「はいはい、予想通りよ。それじゃ、メッシュから順に質問をしてきなさい」
　分からないところが分からない状態の四人だが、一つだけ気になる事があったのだ。
「あぁ～、つまり、あれだろ、その対抗戦の事だが」
「そうそう、なんでサバゲーなのかなぁ～って」
「たぶん、僕が思うには……」
「葛城が、やりたいだけだ」
　四人はスバリ茜の心中を見抜いていた。
「ち、違うわよ！　私としてはなんでも構わないわよ。で、でもね、一応私達はサバゲー部なんだし、規定にも対抗戦の選択種目は、そ

の部活に見合ったものって決まっているし、だから……その、あの……本来の私は、サバゲーなんかやらないんだからね！」
茜は真っ赤な顔で熱弁するも、彼女を見つめる八つの瞳は、
――――そう、そんなにやりたいんだ。
と、告げていた。どうにか振り払おうと、茜は話を転換した。
「と、とりあえず！　もう種目は管理員に通達しちゃったんだから変更不可。今日のところは武器を調達にいくんだから、さっさと準備しなさいよね！　早く行かないと店が閉まっちゃうでしょ！」
ここでサバゲー部員達は、当たらずも遠からずな推測をする。

――――だから、あんなに苛立ってたのか？

心の声を聞いていた茜は、更に否定した。
「ち、違うわよ！　私はあの糞女をぎゃふんと言わせたいだけで、べ、別によく行くモデルガンショップの閉店が7時だから、とか、そんな……、そんな事で苛立ってたんじゃないんだからね！」
ツンを全開にさせて否定する。その様子がなんともコメディチックであり、漸くコメディ的な雰囲気に戻って来た。
が、そんな茜の甲高い声に水を差すように、亮介の腕時計が電信音を鳴らした。
「あっ、五時半だ。ごめん、俺先に帰るわ」
「はぁっ！？　今からこう、盛り上がっていくとこじゃないの？」
茜の言い分も理解できるだけに亮介は一寸悩むも、
「う～ん、でも、今日は俺が飯番なんだよね……下手に姉貴を怒らせると明日以降に差し支えるって事になりかねないからなぁ……うん。ごめん、やっぱ今日は帰るわ」
本当に気まずそうに頭を下げた。そして、紗江に視線を送ると彼女もまた鞄を持ち、頭を下げた。
「ごめんね、茜ちゃん。明日から、私もちゃんと頑張るから。今日は……」

「え、紗江もなの？」
亮介が偉そうに補足する。
「あったり前じゃん。俺じゃ飯作れねぇもん。俺は買い出し、作るのは紗江の仕事だし」
すでに亭主関白が板についている亮介は戸口へ走り、紗江へ手招きした。
「早くしねえとタイムセールス始まっちまうぞ」
「あ、うん。それじゃ、ごめんね。本当に、本当に明日からは頑張るから！」
紗江だけが何度も茜に頭を下げつつ、二人は部室を去ってしまった。
「……まぁ、仕方ないわね。実質、明日以降の訓練の方が大切なわけで……」
本心を言えば今すぐ特訓を開始したいのだが、しかたなく二人を見送った。
だが、そんな茜にばつが悪そうに手をあげる少年がいた。
「あ、あのぉ……茜さん」
司は視線を反らせつつ、ソファを立とうとしていた。
「なに？」
茜は司の挙動の意味をなんとなく悟り、それを拒否するように目を座らせた。
「ご、ごめん……僕も、今日は」
「何言ってんのよ！　五時半だからって何の理由もなしに帰れる状況じゃないわよ」
「理由は、その……門生さん達の出稽古に同伴しないといけなくて……」
「門生？」
疑問符を浮かべる茜へ、大五郎が補足する。
「司は、雅流実践合気道の次期当主であり、現師範代だ」
雅流実践合気道、という名に、茜は鼻であしらった。

「はぁ？　雅流って……あの雅流？　嘘でしょ、こんな女男みたいなやつが」
雅流は、この地域ならずも日本中にその名を轟かせる武道において有名な大家である。葛城家のグループ下にも多くの門下生がいるとされ、茜も一度ならず何度も耳にした事がある名前だった。
「そして俺は、雅流の剣術流派にあたる二ノ宮流剣術の師範代でもある。俺も今日は、司に同伴するよう当主（おやじ）より言いつけられている」
メガネの言う事では、それが本当なのか冗談なのか察しがつかない。冬治に目をやると、彼は二人の話が当然かの如く欠伸をしている。
「……えっ、本当なの？」
大五郎は冷静に頷き、司は頭を下げ、二人は帰宅の用意を始めていく。茜とすれば何が何でも引きとめてはおきたいものの、
――――えっ……こいつら、マジで雅流と二ノ宮流の次期当主なの？
認識の大幅な誤差修正を迫られ、唖然と眺めることしかできなかった。
「それじゃ、お先に失礼するね。明日からは僕等も頑張るから」
如才なく紗江と同じ台詞をリピートすると、司は大五郎を引き連れ部室を去った。
ようやく認識の誤差修正を終え我に返った茜は、すぐに新たな問題へ気付いてしまう。
現状の空虚さだった。
「……あれ？　なんか、おかしくない？　この状況」
紗江の身代わり騒動、関白宣言、ＴＯＢの説明。それらを経由したあげく、なぜこれほどにガラリとした部室になっているのか？
茜の想定では、打倒待機部を誓い合い、一同揃って拳を掲げていたはずだ。そして今頃、サバゲーとは何なのか？という定義から、戦術を可及的速やかに実行するためのノウハウをこのホワイトボードにみっちり書き込んでいたはずなのだ。そのための、ホワイトボードだったのだ。

だが、見よ。文字通りのホワイトなボードを。何より、唖然とした彼女の表情を。
「……で、私はどうすれば？」
胸の奥がとても冷たく感じた。
自分の存在価値が、とても小さな物だと気付いてしまった。
そんな少女に、冬治は足を組んだまま溜息をついた。
「はぁ……お前、統率力ねぇな」
言い返そうにも、この状況ではそれができなかった。転入早々、統率力も何もあったものじゃない。そう反論してみたところで空虚さに変わりは無いだろう。
茜は、視線を床へと落とした。
冬治は一つ嘆息をして立ち上がる。彼もまた、鞄を持って戸口へ向かっていくようだ。
――まぁ……帰るよね、普通。
彼女の中で、空虚感が悔しさに変わろうとしていた。胸から溢れる振動が、その小さな手へと伝達しようと小さく震える、その時だった。
「おい、行かねぇのかよ」
「か……帰るわよ、すぐ。鍵も閉めておくから……あんた一人で先に」
「はぁ？　武器の調達、行くんだろ」
この言葉に、思わず顔を上げた。銀メッシュを暁色に変色させた男は、欠伸をしながら戸口の前で待っていたのだ。
「え？　行くの？　あんた」
「ぁあ？　一人で行きたいのかよ。だったら俺は帰るぞ」
ふっと、茜の肩から力が抜けていた。
「い、行くわよ！　ぶ、武器の選択からすでに戦いは始まっているのよ！」
鞄を手にとり、茜は走った。
綻ぶ顔を隠すように、わざと大きなアクションで戸口へ駆けた。

「銃なんて撃てればなんでもいいだろ」
「はぁ――――――――？　全然良くないわよ！　同じ拳銃でもベレッタとデザートイーグルじゃ機能性が変わってくるじゃない！　そんな事も分からないわけ！？」
「知るかっ！」
「知ってなさいよ！　あんたサバゲー部でしょ！」
部室に鍵をかけた。
「良くしてもらったＯＢから看板譲ってもらっただけなんだよ。この部活は」
「だったら尚更サバゲーを勉強しなさいよ！　杯を交わした人間の義理に背くと、後でどんな抱腹があるか分からないわよ！」
「そっちの世界と一緒にすんじゃねぇよ！」
「義理は金で換算しなさい！　できればドルで」
「知るかっ！」

グランドを行く少女の影は、ほんの少し軽い足取りだった。

第三章　（四）（前書き）

司以外は全員好き

第三章　（四）

葛城高校第一旧校舎、同大広間。午後の授業が始まる頃、優等生の佳澄は珍しくそこに居た。数多の部員を前に、彼女は数枚の用紙を抱えていくつかの決定事項を伝えていた。

「部活対抗戦は来週の月曜と通達がきました。よって、部活規定により、今日より待機部と対抗戦準備期間として、授業への欠席が許可されます」

一枚、紙をめくる。

「試合会場は葛城家所有の東葛城山。ゲームの規則（レギュレーション）を説明します。人数は6人制、ポインター傾斜配点式の殲滅戦です。ポインター、即ち大将を一人決め、その者を打ちとれば3点の加点。その他の者を打ちとれば1点の加点とし、その合計点により勝敗を決します。また、今回は時間制限内のゾンビアタックが……」

淡々と説明される摩訶不思議な言葉の羅列。小難しい説明に痺れを切らし、武田は腕を組み目を閉じたままに佳澄を遮断した。

「もうよい！　銃で撃ち合い勝つ。そういうとこであろうが」

「……ええ。そうよ」

「わしらが聞きたい事はそんな説明ではない。エアガンなど触れた事もないわしらが、どのように勝つか！　それを訊いておるのだ」

苛立ちも見える圧力がかった言葉に、佳澄はなにも動じず眼鏡を冷静にかけ直す。

「戦力として、あちらには雅流と二ノ宮流の次期当主を保有しています。白兵戦における作戦を練るのであれば、彼らに対抗する術は皆無かと」

それは予想の範疇と言った様子で、武田は唸りと溜息を上げた。

「……分かっておる。それでも、勝てる見込みがあっての対抗戦、そうだな佳澄」

「はい、すでに手は打ってあります。今後の対抗戦においける全権を私に委ねていただければ、勝利をお約束できるでしょう」
一片も崩さぬ表情からは、虚勢ではなく確かな自身が窺えた。
「よかろう。すべての策を、主に一任しよう」
「はい。あの男と女もろもとも、サバゲー部を殲滅して見せましょう」
佳澄は、堂々不敵に頭を下げた。

葛城高校部室棟、同サバゲー部部室。迷彩柄の軍服を着せられた男子四人は、横一列に並ばされていた。同じく軍服を着た茜は、意気揚々と手を後組し、四人の前を左往右往と歩きながら罵声を飛ばしていた。
「いいこと、あんた達！　今からあんた達の名前は、戸籍からも記憶からも消え去った裏社会の汚物だと思いなさい！　両親から与えられたご立派な名前なんて、エロビデオのタイトルと同等よ！　卑猥で汚らわしい名前はここには必要ない。あるのは一つ『糞野郎共』という集合名詞だけよ！　分かった！？」
『……』
唖然とする男子勢に、茜は怒鳴りつける。
「返事は！」
『サァー……イェッサー……』
「声が小さい！　まさか糞野郎共、名前が名残惜しいなんて下らないアメリカンジョークを、その薄汚い心に抱いてるんじゃないでしょうね？」
茜は亮介の前で立ち止まると、ふいに恐ろしいほどの満面の笑みを作った。
「おい、そこの糞野郎。名前はなんだ」
「え……上杉亮介で……」
呆然と答える亮介に、茜は強烈な平手打ちをかました。
「はぁあ？　上杉？　なにそれ？　それはどっかの高校球児の名前

でしょ！　あんたにそんな青春染みた名前はついてないのよ！　今のお前はミジンコにもおとる地球最下位の下等生物なのよ！　……仕方ない、名無しのお前に私がとびっきりの名前をつけてやろう」
「……あの」
「エロ助……助べえ……鼻血……赤血球……それよ！　ヘモグロビン！　今からお前の名前はヘモグロビン！　分かったわね！」
「えっ、あの……それは」
「返事は――――――！」
「……サァー、イェッサー……」
「声が小さい！　ヘモグロビン！」
亮介の人体急所・水月へと茜の拳がめり込んだ。
「ほら、どうしたの！　返事は！」
「ぐっ……さ、サァー、イェッサァー」
「はぁ――――！？　聞こえないわよ！　あんた股間についてるそれは、キン〇〇じゃなくてミルクキャンディーなわけ！？　あぁ――――！？」
「サ、サ――――！　イェッサァ――――――　！！」
漸く茜は水月へめり込んだ拳を抜いた。そしてまたも右往左往に歩いていく。
「いい？　軍にとって個人の意思なんて物は、金曜終電間際の駅前に吐かれた嘔吐物以下の価値しかないのよ！　お前達には浮浪者ほどの人権もない、豚に与えられるモロコシほどの価値もない！　ゴミ箱に捨てられた消しゴムのカスなのよ！　だけど、安心しなさい！　そんな消しカスも、この私が拾い上げて一人前のねり消しに育ててやるわ。私に拾われた事を感謝し、私の物となりなさい！　分かった！」
『……』
「返事は！」
『サァー……イェッサー』
茜はプイっと顔を背けた。

「ふん！　締まらない奴等だが、まぁ今日のところは時間がない。とりあえずグランドに銃を持って集合しなさい！　返事は！」
『サァー……イェッサー』
やりたい事はまだまだたくさんある。と、言わんばかりに、うきうきな足取りで茜は部室の外へと行ってしまった。鳩尾へのダメージが残る亮介は、茜が居なくなった事を確認すると緩慢に座りこんだ。
「な、なんだよあれ。何がしたいんだよ……」
亮介の傍らで、司が苦笑いを浮かべて呟いた。
「米軍の海兵隊ごっこ、だと思うけど……映画とかでよくみる入隊シーンでしょ、これ」
「まじかよぉ、そこから始めんのかよ……ミリオタにもほどがあるってさ」
――――確かに……――――と、頷く一同に、冬治はあきれたように呟いた。
「仕方ねぇだろ。今日からやるっつったのはお前等だろうが。お前等で責任とれよ」
三人の男子と共に罵声を浴びていたはずの冬治は、なぜか他人面で説教をした。
無論、その異質さに亮介等は気づいていた。
亮介はじぃーっと冬治を見つめ、ボソっと呟いた。
「……冬治。茜ちゃんに、惚れちゃった？」
「はぁ！　な、なんでだよ！　なんの根拠も無しに適当な事言ってんじゃねぇよ！」
顔を背ける冬治はどうも恥じらっている様子。亮介はぬるっとイタチのように背後へ回った。
「根拠ぉ～。いつもの冬治君ならさぁ、とっくにブチ切れてる所だよねぇ～。昨日、あの後、何かあったんじゃないにょ～」
亮介の勘はズバリ鋭かった。冬治の脳裏に、昨日のあれからがフラッシュバッグされた。

それは、モデルガンショップ。地域最大のショップへ入店するや否や、茜は目を輝かせながらモデルガンに飛びついて行った。
「う、うわ！　ここ凄い品揃えじゃない！　よく知ってたわね、こんなとこ」
「あぁ。俺んちがすぐそこ……」
指を差すも、茜は無視して拳銃プラモに飛びついた。
「あぁ！　ちょっと見なさいよ！　Ｓ＆Ｗ　Ｍ４０シグマよ！　なんでこんなパクリ拳銃が店頭に並んでるわけ！？　こんな物を店頭に置くなんて尋常じゃないわよ。普通店頭ってグロックとかベレッタとか、Ｓ＆Ｗだとしてもガバメントとか……あぁっ！　見なさいよ！　Ｍ９タイプのシグマまであるし！　こんなトイガン売ってるなんて知らなかったわ。保存用、観賞用、実戦用、改造用で４つ買わなきゃ……」
もう露骨に趣味の世界に入ってく茜を前に、冬治は自宅を差した無様な指を降ろした。
「あっ、今なんか言ってたわよね？　聞いてなかったわ！　何？」
「あぁ……あぁ、いや……なんでもない」
「あっそう！　じゃあ、あんたは取り合えずバイオ弾でも探してきなさい！」
バイオ弾という語意すらも分からないのだが、無様な人差し指をポケットへ隠すと探しに行った。
店員にバイオ弾について訊くと、それが地球に優しいＢＢ弾だと知り、その在り処まで一瞬で辿り着く。一弾あたり０・６円ほどで「うわっ、けっこう高けぇな」と洩らしてみるが、背後でガラガラとショッピングカーを引くサラリーマンらしきスーツ姿の者達、特に茜のカーには既に十丁以上もの銃と、なんだかよくわからない改造用の部品らしき物も大量に入っている。趣味に対する金銭感覚の違いを思い知らされ、冬治は疎外感を感じた。ＢＢ弾の棚の横には、運良く待機用のソファがあり自販機まで設置されていたので、コー

ヒーを買ってソファに座る。――――あぁ、たぶん、俺みたいな境遇の奴等がここでこうして待つんだろうな――――と思いつつ、暇を潰す手段もなかったので、楽しそうにカーをガラガラと引く茜を見ていた。

ぶつぶつと独り言を呟き銃を眺めていく茜の姿は、初めこそ「オタクのそれ」と決めつけ何も気にはならなかった。だが、入念に銃を取っては厳格に眉を寄せる茜の表情に、その他のサラリーマン等とは違う何かを感じ始める。

試しに、冬治は耳を澄ませてみた。

「やっぱり、カマ野郎とメガネはハンドガンを持たせて、ある程度動きに自由を与えた上で前衛に出すべきかしら。本当にあいつらが雅流の次期当主なら白兵戦が絶対に有効よ。でもそうなると、守りがエロとメッシュ……か……いや、ダメね。紗江がいるんだから、エロガキは紗江の守りに回るはずね。それだと私の守りはメッシュだけ。ポインター制じゃそれは危険か……。だとすると、メガネ辺りにM－60を持たせて突撃させるとか。あいつ、あれでいてけっこう力がありそうだもんね。それで司を守備にまわらせ……」

部員一人一人の個性を思い描きながら、茜は丁寧に装備を選んでいた。

こんな姿を見せられては、「漢」冬治は、茜に従ってやるしかなかった。

「う……うるせぇ、黙れ……」

全く覇気の無い冬治の声に、亮介はにまりと微笑み嫌らしく頬づりした。

「へぇ～冬治って、実はドMちゃんだったのねぇ。あ～んな言われ方にドキドキしちゃってたりしてぇ～」

昨日の仕返しとばかりに茶化した様子で挑発する亮介に、堪忍袋が小銭入れレベルの冬治は憤慨を始めた。

「んな分けないだろうがぁ！　なんで、俺があんなガキンチョに心ときめかせんだよ！」
「ほらほら、冬治きゅんはぁ、ロリポップとかぁ、子犬さんとかぁ、可愛い物が好きな人じゅあん。ん？　あれあれ、自分では気づいていないのかなぁ～。実は……ロリコンだって」
ブチっ！
「言わせておけば……このエロガッパがぁ！」
そんなこんなと激しく掴み合う二人の背後で、フラストレーション全開の足音が響いてきた。
猛ダッシュで、茜が戻ってきたのだ。
「お前ら、どこのお嬢様だ！　集合すんのにどれだけ待たせれば気が済むんだよ！」
茜は絡み合う男二人の間へ突入すると、各男の五臓六腑をめがけて拳をめり込ませた。
「もう今日は訓練止め！　糞野郎共に自由の権利など無いという事をみっちり教え込んでやるわ！　そこに並びなさい」
再び男子一同は横に並ばされ、その日は終始、下劣な言葉で罵倒され続けたという。
――あんたこそ、どこのお嬢様だよ……。
とは、誰も口にできるはずもなく。
翌日。
金曜という事もあり、司はブレザーにスカートである。が、しかし、そんな事はお構いなしに、三人の男＋女装一人は両手に突撃銃を持たされ、延々とトラックをランニングさせられていた。
集団の先頭では、電動自転車に乗った茜が音程に乗せて『Ｍｉｌｉｔａｒｙ　Ｃａｄｅｎｃｅ　茜Ｖｒ．』を歌っていた。（米軍の訓練中によく歌われているあの曲である。）
「かつらぎあかねを知ってるか～い♪」
陽気な歌に、男子勢は嫌々ながらに反復する。
『……かつらぎ、あかねを知ってるかい……』

「頭が良くてぇ～お金もちぃ」
『……頭が良くて、お金持ち……』
「美貌と、背丈は関係なぁ～い♪」
『……美貌と、背丈は関係なぁい……』
「我らが、葛城海兵隊♪」
『我が……葛城海兵隊』
――――だから、海兵隊じゃねぇっての！
とは誰も言えず、残暑に日照る昼間のグランドをひたすら周回した。

更に翌日。
「今日は、公園に行くわよ！」
サバゲー部員は公園へと連れてこられた。公園は公園でも、そこは美しい山に清い湖、地域屈指のフィールドアスレチック公園だった。
「あ、あの……教官」
「なに？　ヘモグロビン」
「ちょっと、恥ずかしいであります」
その日は土曜日。アスレチック公園は、微笑ましい親子達で溢れかえっていた。当然、軍服姿で顔には黒いペイントを施した彼らは浮きに浮きまくり、
「ママぁ～、なんかやってるよぉ」
「見ちゃダメ！」
子供達には後ろ指を、親達からは危ない視線を突き付けられていた。さすがの四人もこれは精神的にこたえていた。
だが、
「恥ずかしい？　はぁ――――？　あんた達には、赤潮で溢れかえるプランクトンほどの主張権も無いのよ！　思い過ごしも甚だしいわ！」
饒舌に男子勢の意見を却下するその声が、更に彼等を辱めた。

――――いえいえ、完全に見られていますって。大注目されてますって。

そう思ってはみても、茜の楽しげな姿に反抗する気を削がれる四人であった。

その日の訓練は、うんてい、綱渡り、水上ブランコなどのアスレチック遊具を、銃を抱えたままに、というのはさすがに無理なので、代りに2リットルペットボトルを抱え全力疾走でやりきる、という本　当に軍隊さながらの訓練だった。

勿論のこと、茜教官による「さっさと走れ、このうすノロ野郎！　こんなところでへこたれるくらいなら、ママの老いて萎れたおっぱいでも吸いに帰ることだな！」などという罵声付きであるために、手を抜くことなどは許されない。恥ずかしさと途方もない運動量に、すべてのアスレチックを制覇する頃には全員が肩で息をして座り込んでいた。

夕暮れに染まる公園で、茜は満足げにこう言った。

「よくやったわ。これで、あんた達も最低級の糞野郎を卒業できそうね。明日からは……」

その時、へろへろにへたり込んだ亮介が手を上げた。

「教官。あの、質問いいでしょうか」

「どうしたの、ヘモグロビン」

「我々、銃に関しては全くの素人なのですが……このままでよろしいのでしょうか」

「ふふっ……、いいこと？　銃は指先で引くものではないのよ。銃を向けるタイミング、位置取り、勘。それらはすべて基礎鍛錬から養われるものなのよ。だから、今は黙って……」

ここで、マネージャー的に補佐していた紗江が挙手をした。

「でも、茜ちゃん……対抗戦、明後日だよ？　もう明日しか……練習時間が」

カラスが一羽、カァと鳴いた。

「……マジ？」

第三章　（五）

この地域には街を守護するかのように、四つの山が聳えている。北に位置する葛城山。そこから時計回りに東葛城、南葛城、西葛城、と方角通りに山々が位置している。それぞれの山には特徴があり、北の葛城山には高校と墓地が、西の山では農場、牧場が、南の山にはアスレチック公園とゴルフ場。そして東の山は、自殺の名所である。とはいえ、そんな噂はこの東葛城山が地域最大の規模を誇り、樹海も深い事から作り出された都市伝説にすぎない。山を所有する葛城組がそう事にしているのだから、もう、そういう事にしなければならないのだ。

そんな地域最大の樹海におき、今日、部活対抗戦が行われる。晴れ渡る空、吹き抜ける解夏の風。

おでこが光り、おさげは揺れていた。

軍服姿の茜と同じく軍服姿の佳澄は、顔が触れるほどの至近距離で睨み合っていた。それはもう、鼻の先がつかえてしまいそうな程、至近距離で。

「只今より、公開買付における部活対抗戦を行います」

二人の前でメイド服姿の黒姫が告げた。今日の彼女はあくまで管理員。公平なジャッジメントとしてこの場を取り仕切る。もう一人のメイドである千代影が、レギュレーションを説明する。

「レギュレーションを確認します。制限時間は1時間、6人制ポインター形式の殲滅戦です。今回は加点制のため、ゾンビアタック、即ちヒット判定をされた選手も、10分のペナルティ時間を経過した後、再度競技可能となっております」

千代影の説明にも、二人の女性は睨み合ったまま。互いに小柄な背丈のため、子供同士の喧嘩のようで健気さが感じられる。だが、二人は16歳という年齢にしては十分過ぎるほど真剣に眼を飛ばし合ってもいた。

千代影の説明に、――――そんな事は承知している！　――――と言わんばかりに鼻息だけを荒げた。
「それでは、双方指定されたスタート位置へ。到着を確認次第、競技を開始します」
二人の後方で大人しくしていた各部員は、ぞろぞろと山中へと消えていく。紗江も緊張した面持ちで、茜へと寄って行った。
「茜ちゃん、いこう」
茜の手を引こうとする紗江へと、佳澄はチラっと視線を向けた。
その視線を見ない振りをしている紗江。彼女に聞こえないよう、佳澄は小さな声で、しかし渾身の目力を込めて茜に言った。
「私と紗江に、あなたは必要ない。あの馬鹿もろとも、消してあげる」
真正面から、茜も受けて立った。
「それはこっちの台詞ね。その分厚いメガネ、私直々に打ち抜いてやるわよ」
ふん！
二人は顔を背け、各自山中へと向かって行った。
その間、紗江は幾度か佳澄を振り返ったものの、佳澄側は一度たりとも振り向きはしなかった。待機部部員を連れ、山中へ消えていった。
高いく茂った林を抜けていくと、少しだけ開けた場所に出る。木々の間にはテントが張られており、その下には長机が一つと無線スピーカーが一つ、山の見取り図が一枚おいてあった。ここが、サバゲー部のスタート位置であり、どこかにある同じ位置のテントが待機部のスタート位置である。
サバゲー部がテントへ到着すると、無線スピーカーから黒姫の声が聞こえてきた。
「双方、スタート位置への集合を確認。１０分後の合図により競技開始とし、発砲を許可します。また、只今より１０分間は自由に移動を許可します。それではご健闘を」

ブツっと切れた無線の声を合図にして、茜はその瞳をギラリと光らせ地図を広げた。
スタート前に設けられた１０分間。つまり、この間に大方の布陣を完成させておく事こそが、先手を奪う鍵を握ってくるのだ。
地図は山全体の森林基本図。それを一目し、あらかじめ脳にインプットしてあった東葛城山の等高線と差異がないかを瞬時に確認。誤差が無いと確認すると、全体の鳥瞰図を脳裏に思い浮かべる。そして、地図に記されていた待機部のスタート位置を脳内に映し出しした。もっとも実利的な攻撃配置を探り、また逆に相手がどこから攻めてくるのかもシミュレート。最善の策を、ここで弾き出そうとしていた。
だが、予想だにしなかった不運が、茜の作戦シミュレートを阻害した。
「ねぇ、茜ちゃん。これの安全装置って、どこだっけ？」
「おい茜！　ゴーグルのゴムがきついぞ。どうやって調整すんだよ！」
「茜ちゃん。紗江さんはここに待機して置いた方がいいと思うよ。女の子なんだしさ」
「葛城、トイレの位置を確認したい」
四人の質問攻めが、茜の集中力を果てしなく削いでいた。結局、昨日一日ではすべてを教え込む事はできず、銃弾をそこそこ思い通りの場所に飛ばせるようになった、程度の訓練しかできなかったのだ。
故に、質問攻めもいた仕方ないのだが、茜の眉間には皺が寄るばかりであった。
「もう、うるさい！　基本的な事は紗江が分かっているから、紗江に聞きなさい！　それと、自分できる事ぐらいは自分でやりなさい！」
小学校の先生のように一蹴するも、こんな四人への焦りから、集中力はやはり削がれた。苛立ちながらも地図を睨みつける茜へ、司

がどこかを見つめながら質問した。
「茜さん、少しいいかな？」
「ちょっと黙って！　今は集中したいの」
ヘルメットの脇から指を入れ、茜はいらいらと頭を掻く。そんな茜には顔を向けず、司は遠い木々のやや上方、飛び立つ数匹の鳥を視界にとらえていた。
「まずは、場所、移した方がいいかもよ」
的確な助言かつ、焦りに焦っていた茜の盲点だった。茜は思わず地図から目を離し、司の見上げる先を追った。遥か先ではあるものの、不自然な木々の揺れが確認できる。
敵が、動かぬはずが無いのだ。地図に書かれたスタート地点こそ、最初にして最大の標的となる。それは、こちらもあちらも同じ事である。
顔を強張らせ、茜は小さな声で指示をした。
「みんな、声を出さないで。……出遅れたわ」

第三章　（六）

緊張感が辺りを支配した。茜は無言のままに武器を指示する。女性陣はハンドガン、冬治と亮介はアサルトライフル、司はハンドガンとナイフを一本、大五郎は狙撃銃とし、最後に自然に優しいバイオＢＢ弾が渡された。

茜は地図を広げ、数点の印を指差した。

「各自、地図は持っているわね。この印が、はぐれた場合の合流地点。そして今から、このポイントに向かい、相手の出方を窺うわ。いいわね」

相手がすでに動いているとするならば、後手に回って動きを窺う。そう茜は瞬時に作戦を転換したのだ。

五人が頷いた事を確認し、茜はまず司に先頭を歩ませた。

――――さっきの敵の察知といい、雅流の次期当主。ただ者じゃないわ。

司から数メートルをおいて、亮介と紗江を追尾させる。

――――ま、いざとなったら亮介がなんとかするでしょ。

次に数メートルをあけて冬治が行き、そのすぐ背後に茜自身がピッタリと追尾する。

――――今回は、私が大将。つまり3点加点のポインター。最悪、メッシュを盾にしよう。

最後に、大五郎である。昨晩、茜は二ノ宮流に稽古に行っているという葛城家の若頭に話を聞いた。彼によると、大五郎が次期師範というのは本当であり、また相当の実力者という事らしい。さらに、

――――司への忠誠ぶりからも、しんがりを務めるには適任ね。

そうして、サバゲー部の隊列を決定し、まずは安全と思わしき位置へと移動を開始した。練習通りに全員が中腰態勢。木々に、藪に、身を隠しつつゆっくりと隊を全身させていく。周囲の微かな変化も見逃さぬよう、その目を凝らす。

高まる緊迫感。茜は、スタートの合図を待ちながらも、なぜストップウォッチを使用してこの１０分を計らなかったのか、それを悔いたりもした。
体感時計では、もういつ試合が始まってもおかしくはない。茜は、ぐっと二丁のハンドガンを握りしめた。
その時だ。
研ぎ澄ましたサバゲー部員の耳に、ある声が聞こえてきた。
「も、もう……こんな場所で……誰かに見られちゃうよ」
「何言ってんだ。こんな場所、誰も来やしねぇよ。それに、これが刺激的なんだろ？」
なんとも甘ったるく、イヤラシイ声だった。
亮介の、足が止まった。
亮介の、耳が傾いた。
亮介の、唾が喉を通過した。
誰もが瞬時に危惧した予想を、エロ魔人は見事に貫いたのだ。中腰態勢のまま、一歩また一歩と隊列を歪めていく。
「紗江、そいつを止めて」
小さく声を出して指示をする。その声が届いているのか定かではないものの、紗江は亮介の腕を引き、静止しようと試み始めた。
――――よっかた、紗江がいて。
しかし、それは単なるぬか喜びだった。紗江は亮介を静止しようとしているものの、その掴む腕には全くと言っていいほど力が入っていなかったのだ。ぐんぐんと亮介に引きずられ、否、亮介を言い訳にして紗江もぐんぐんとエロ声に寄っていくではないか。必死に小さな身振りと声で静止を呼び掛けるも、鮮血のバカップルは隊列を外れていく。
すべては、茜の無知が招いた誤算だった。一つ、紗江のＢＬ好きを知らなかった事。一つ、ＢＬ本にはエロ要素も多々含まれる事。これを知っていれば、この事態は免れていたのかもしれない。
だが、それはもう事後の話であった。

ついに亮介・紗江ペアはエロ声の聞こえてくる藪へと顔を乗りだしてしまったのだ。

藪の先には、テープレコーダーが置かれていた。

そして、スタートの合図。晴天の空へと空砲が鳴らされたのだ。

瞬間、バカップルを目がけ多数のバイオ弾が撃ち込まれた。

「亮介！」

完全に謀られたタイミングの最中、唯一反応できたのは司と大五郎だった。司が亮介を、大五郎が紗江へと飛びつき、後方に退却させたのだ。

これを見て、茜は叫ぶ。

「亮介、紗江！　隠れなさい！」

弾はレコーダーの遥か先から連射され、それらは明白に亮介と紗江を狙っていた。

――なんて数のスナイパーなの。

６人制におき、どれだけのスナイパーを用意すればこれだけの射撃が可能になるのか。軽く計算しても、ざっと４～５人。佳澄を覗くすべてをスナイパーとして起用したという事だ。

この作戦に、茜は唖然と口を開けてしまった。

熟練者同士の殲滅戦ならば、この作戦は十分に在り得ただろう。身を隠しつつ射撃できるスナイパーはどんな戦場においても要といっても良い。ただ、長距離射撃には熟成された技術を要するのだ。素人を寄せ集めただけのサバゲー部では、絶対にできない作戦だった。

――でも、それはあっちも同じじゃないの……？

そう考えてみるも、飛んでくるＢＢ弾は実に正確だった。熟練者のそれには劣るものの、とても素人の射撃とは思えなかった。

――経験者を抱えていたのね。

そう考えれば、佳澄が堂々とＴＯＢを行い、サバゲーで挑んでき

た理由も見えてくる。この戦争は、戦略的優位を見越した上での宣戦布告だったという事になる。
　茜は、唇を噛みしめた。
　戦略的に相手方に歩があったという事には、自分が転校して一週間だという状況があるだけに目も瞑れれば、言い分けもできるだろう。だが、この戦術については、どうしても悔しさがにじみ出た。スナイパーをこれだけ攻めに回せば、守りに裂いた人手など皆無なのだから。
　大胆不敵に嘲笑する佳澄の顔が、見えてくるようだった。
　茜が作戦として最初に考えた事は「誰をどうして、自分を守らせるか」であった。戦略的に優位である佳澄が、戦術においても捨て身の策を講じてくる姿を見せられては、もうどうしようもない敗北感が込み上げて来てしまう。まだ、1ポイントも取られていないというのに、すでに敗者の波が膝元にまで押し寄せてきたようだった。
　呆然自失に棒立ちする茜。冬治は彼女の不穏を察知すると、その手を無理やり引き寄せた。自身の背後に茜を立たせ、飛んでくる弾から逃すように大きな木の内側へ押し込んだ。
　ここなら大丈夫とう場所へ茜を立たせると、冬治はポンと茜の額を小突いた。
「おい、指揮官が時化た面すんじゃねぇよ」
　冬治の言葉に後押しされて、乱撃の始まった戦場へ目をやった。確実に押されてはいるものの、司と大五郎の絶妙な位置取りのおかげで、なんとか凌げそうな気配も見えてくる。
「うん……分かってる」
　溜まるフラストレーションを胸の内に抑え込み、まずはこの場を凌ぎきる事に専念しようと、顔色を切り替えた。
　―――あちらが有効的に射撃を繰り返す中で、こちらは射撃可能な人材がメガネだけ。それも、一夜漬けの素人スナイパー。ここは、逃げの一手しかない。
　状況を立て直すために、速やかに逃げ出そうと決断した。

だが、その指示をスムーズに伝達できる猶予を、待機部は与えてはくれなかった。一言の声を張る隙を奪うように、待機部はスムーズに連携の取れた攻撃を行ってくる。当初こそ疎らに撃たれていたＢＢ弾も、次第に司と大五郎を無視し始め、亮介と紗江へと集中していく。ものの数分で、更に的を絞りあげ、紗江だけに集中砲火が浴びせられた。

「紗江ぇ、早くしろぉ！」

必死で転がる紗江に、逃げるなど余裕はない。亮介は銃弾の隙をつき、紗江の元へと走り寄ると、そのまま紗江を足から抱え上げ、深い藪へと飛び込んだ。

この瞬間、茜は瞳孔を大きく広げた。亮介が紗江に飛び込む刹那、銃弾の嵐が止んだ気がしたのだ。

――――ハメられた。

すかさず茜は叫んだ。

「全員退避！　各自分散し、ポイントＡに急行しなさい！」

声を上げるタイミングを、相手によって作られた。つまり、これは相手の思惑通りに事が運んでいるという証明。しかし、それに気付いたとしても、指示を出すしか方法がなかった。

亮介ペアが藪へと入り、前方の司ペア、後方の茜ペアと、完全に位置を分断されているのだ。これを無理に集結させてしまうと、訓練不足のサバゲー部では必ず隙が生まれてしまう。長距離射撃にとっての格好の餌食、「静止した標的」が生まれてしまう。

苦肉の決断だった。

第三章　（七）

茜は気付いていなかった。佳澄の思惑が、今、この瞬間にあった事を。

それに唯一気付いたのは、司だった。司は何かの危険を後方に察知し、前方から飛び交う銃弾へと背を向ける。そして、その危険に大きく目を開き、茜ペアへと急速に走ってきたのだ。

「なにしてるのよ！」

茜は身を乗りだし静止呼びかける。

その時、クスっと不気味な笑い声が聞こえた気がした。

瞬間、冬治が茜を無理やり押し倒した。

「バカやろう！」

天を仰ぐ茜の視界、そこに数発の弾が通過したのだ。

集中砲火とはまるで別方向。茜の真横、遥か彼方に、おさげの髪が凛と揺れていのだ。

――――あいつ！

佳澄の狙いは、すぐに読み取れた。開始直後の集中砲火は、囮でしかない。茜に悩ませ、苦肉の決断を迫らせ、指示をさせる。苦悩、慙愧、焦燥に駆られて「静止した標的」となる瞬間を、佳澄はじっと息を秘めて待っていたのだ。

地面に転がった茜へと、佳澄は顔色変えずに一瞥する。容赦の色合いを一片も見せる事無く、スナイパーライフルを構え2撃目の初動に入った。

――――まずい……。

絡まるように倒れた二人は、まさに的でしかなかった。

佳澄の引いたトリガーに、目を瞑ることもできずに青ざめた。

だがそこに、司が間に合った。弾道の経路へと体を入れると、眼球を激しく震わせＢＢ弾の軌道を捉える。そして、すっと縦に手をふると、無人の後方へと弾を流した。

ピィ――――――――。
高らかな笛の音と共に、藪から黒スーツの男が立ち上がった。管理員である。
「サバイバルゲーム部、2名ヒット！」
管理員は、司と大五郎へと指を差した。手刀で弾をはじいた司、後方で集中砲火を浴びていた大五郎に被弾判定がおりたのだ。だが、こんな管理員の声は試合の中断を意味しない。佳澄はまたも銃口を茜へ向けた。
マナー違反と分かりつつも、茜はゾンビとなった司を盾にして立ちあがった。
「いくわよ！」
体躯を縮め、冬治を誘い、木々の間をくぐり抜けていく。こんな逃げ方しかできなかった自分に激しい憎悪を感じながらも、今はただ、佳澄に背を向ける事しかできなかった。
遠ざかる茜を射撃スコープから覗きつつ、佳澄は八重歯を覗かせ、銃身をさげた。
「まだまだ……御愉しみはこれからよ……葛城茜さん」

第三章　（八）

開始早々の奇襲より二十分が経過していた。
出会い頭の結果は、明白なサバゲー部の大敗。隊は分断され、それらを守った司ペアは被弾した。彼らはペナルティとして１０分間のゲーム区域内からの退出が義務付けられる。サバゲー部にとって司ペアは唯一の矛であるがため、また分断された隊も集結できてはおらず、反撃などに打って出る術はない。兎にも角にも、失点を抑えるための逃亡を余儀なくされていた。
指揮官は猛省していた。林の影で肩を落とし、地図を睨みながらも、その目は酷く涙ぐんでいた。
「おい、そろそろ動かねえと、亮介達が合流地点に来るんじゃねぇか？」
「分かってるわよ、そんなこと！」
叫ぶように一蹴するも、声に張りは見られなかった。茜は膝をついたまま、地図だけを見つめ続けていた。
「とにかく……とにかく、１点だけでも、私が……」
「焦んなよ」
茜の前で周囲を警戒する冬治は、冷静にそう言った。しかし、冷静になればなるほど、大敗の責任が圧し掛かり、それは余計に焦燥を煽り立てるにすぎなかった。
「……あいつは、うちの行動パターンをすべて読み切った上で攻勢に出てきた。なのに、私は……あれほどスナイパーがいるなんて、想定すらもしていなかった。亮介や紗江の行動なんか、考えればすぐに分かる事なのに……それも気付けなかった。緊急の指示系統も考えてなかった。連携の確認も訓練もすべて怠った！　それなのに！　焦らずにいられる分けがないじゃない！」
潤む瞳で、冬治を睨みつけた。それが無意味な八つ当たりにすぎないと分かっていても、彼女はそうする他になかった。

「仕方ねぇだろ。お前、まだこっちきて1週間なんだから。それに比べ、佳澄はストーカーまがいに紗江を見てきたんだ。そのついでに、俺達の事もよく知ってやがる」
「だからって何よ！　だから諦めろって言うの？」
「だから」
冬治はしゃがみ込み、茜の頭にポンと手をあてた。
「だから、お前が焦んなよ」
防弾用ゴーグルに、茜の涙が溜まってゆく。
冬治は、ふっと顔を和らげる。そして、茜のゴーグルを優しく上げると、親指で涙を拭いた。
「女の涙はキツイんだよ」
「……うっ、さい」
鼻をすすり、必死で涙を堪えようにも、それは止められない。これに冬治は、クスっとほほ笑んだ。
「まっ、キツイ女は、嫌いじゃねぇけどな」
ポンポンと茜のヘルメットを軽くこずき、冬治は再び立ち上がる。
「そう心配するなよ。どうにかなるし、どうにかするよ」
男の瞳は、まっすぐに林に向けられていた。

第三章　（九）

その頃、山の麓のゲーム区域外では待機部達が歓喜をあげていた。区域外に設置された得点板の数値、なによりゲーム外へ退出させられた司と大五郎の姿は、ルールを知らぬ待機部員であっても優勢を確信できたためである。

さわがしい待機部の中には、その部長である武田の姿も見てとれた。

「おうおう、早くも先制しとるのぉ、うちの軍師は」

「はい、そのようでゲス。しかし、武田さんはよろしかったのでゲスか？」

勘助は首を傾けた。

「何がだ？」

「いえ、この対抗戦に御参戦されるものとばかり思っておりましたので」

武田は腕を組み、満悦げに頷いた。

「確かに、わしとてこの場にいるのは良い気がせん。だが、今対戦に関しては、あれに全権を任せておる。あやつがわしを必要とせんのは、わしが素人故。勝負に徹する奴の心意気を買うのもまた、わしの務めでもある」

「なるほど。そのような寛大なお考えとは……いやはや、出すぎた事を言いました。それにしても、我が待機部にサバゲーの玄人があれほど居りましたとは……」

勘助の言葉に、武田はニヤリと笑った。

「あれは、うちの部員ではない」

「……と、申されますと？」

「射撃部の連中を、株交換によって一時的に引き抜いたのじゃ」

これに勘助は顔色を染めた。

「そ、それは、重大な違反では？　買付中の交換は禁止されていた

はずで……」
「ふっ……勘助。戦とは、戦う前に、すでに勝敗を決しているものぞ」
「と、言われ……はぁ、なるほど……。サバゲー部へ嗾ける以前に、すでに引き抜いていたのでゲスな。……あっし等にはそんな素振りの一つも見せなかったというのに、あの女狐めが」
武田は頷くも、その表情に嫌悪感は見られない。
「それで良いのだ。敵を欺くには、まず味方から。それだけの狡猾さの元で、軍師とは成り立つもの」
「そして、その軍師を引き抜いた武田さんの勝利、というわけでゲスすね」
二人は顔を合わせると、不気味に黒く笑い合った。
こうして小躍りするようはしゃぎ立てる待機部の背に、司と大五郎は声を窄めていた。
「茜さん。怒ってるかな……」
「怒っているな。俺達に前衛としんがりを任せた以上、それ相応の期待はかけていたはずだ。それが、揃いも揃ってこのざまだ」
「……なに他人事みたいに言ってるの」
辛辣な面持ちに、司は空を見上げた。瞳に映る瞳孔が、微かに震えていた。それを大五郎は見逃さず、司の肩に手を置くと威圧感のある冷たい雰囲気を作り出した。
「司。これは、あくまで遊びだ。葛城の期待に、傾倒しすぎるな」
「……分かってるよ。素人相手に、本気は出せないよ。ただ……」
大五郎の片手を払いのけ、司は再スタート位置へと歩いていく。
「無力でいるのは、辛いんだよ」
拳が震えていた。

第三章　（十）

二人の再スタートまで数分を残す頃、とある二人は人生最大の試練に突入していた。

それは東葛城山中腹に位置する大きな洞窟。入り口よりほどなく進むと、ゴツゴツしい岩肌に日差しも遮られ、空間は薄暗くなっていく。やや傾斜のついたその入り口は、外側からでは目視で確認できない絶好の隠れ場であった。

ポツ、ポツ、っと水が滴るその場所で、二人は体を重ねていた。

「りょ……亮君……お、重たくない？」

「だ、大丈夫だけど……」

二人は覆いかぶさるように体を重ね合い、暗い洞窟で寝そべっていた。二人の脳裏には、先のテープレコーダーから聞こえた甘い声の余韻も残響し、気分は桃色へと変化していた。

「も、もう、大丈夫なんじゃ……ねぇのか」

わずかに熱くなった吐息が、紗江の耳を掠めてゆく。その度その度、紗江がビクっと体を震わせ、密着された大きな胸の柔らかな振動が亮介へと伝播していた。

「ま、まだ……ちょっと、痛む……から」

「あ、あぁ……じゃあ。もう少し、こうしてるか」

衣服を隔てて感じる動悸は、次第に同調を始めてゆく。互いの鼻先に位置する顔もまた、それにつられてミリ単位ずつ近づいていき、絡み合う足も深く綿密に交差していく。その肌は容赦なくこすれ合い、互いの唇までに数センチを残すばかりとなっていた。

なぜ、こんな状況になっているのだろう。二人は決壊寸前の精神を保つため、冷静に冷静に回顧した。

そう、あれは藪に逃げ込み、茜の声が聞こえた時だった。

「全員退避！　各自分散し、ポイントAに急行しなさい」

そう聞こえた直後、笛の値が高らかに鳴り響き、司と大五郎が撃

ち取られたと悟るに至った。
――ここに居てはいけない。
直感で二人は逃げだした。藪を突き進み、急勾配の坂道を駆け上がった。誰の気配も感じなくなった頃、紗江に異変が訪れる。
「ごめん……足が……」
逃げる道中に挫いたのか、もしくは逃亡前の一戦におきすでにそうであったのか、紗江の足首に紫色の斑点が膨れ上がっていた。
「なんだよこれ！　なんで言わねぇんだよ！」
「でも、捻ってないよ。打撲だと思うから……」
「そんなもん関係ねぇだろ！　すぐに言えよ」
紗江の肩を担ぎながら、亮介はどこか安全な場所へと紗江を退避させようと考えた。そこで目に映った場所が、この洞窟だったのだ。
――あそこなら、暫く休ませられる。
そうして、二人は洞窟へと足を踏み入れた。が、しかし、下り坂となり安定性の無い岩の床は、不運にも湿り気を帯び、紗江を抱えた亮介では足を踏ん張りきれなかった。
『うんぶぎゃあぁ――――』
なんとか自身が下敷きとなり紗江への衝撃を抑えたものの、二人は暗い洞窟に倒れこんでしまったのだ。紗江の足が痛む以上、無理には起き上がれない。
と、いうのが現状である。こんな不運を良い事に、友達以上恋人未満の二人は、そのカテゴリーを変えようとしているのだ。紗江に至っては、
――あわよくば……全部。
などと、健在なる青少女の精神に支配されつつもあったのだ。実はすでに、足の痛みは引いているというのに、それを亮介へ告げずにいた。
とはいえ、実際問題、紗江も亮介もそんな事はどうでもよい。問題は、足の痛みが引いた事や、ゲーム中である事を盾にしてこの状況を打破してしまうのか。もしくは、若気の到りと称して、流され

るままに欲望に塗れてしまうのか。この選択肢を目が回るほどに黙想しているのだ。
———ど、どうすんだよ……。
———えっと……どうするの？
———俺は……どっちでも。
———私も……どっちでも。
声を交わさずとも、二人は会話した。頬が触れ合い、足を絡ませる度、「やっぱりやめよう」と、躊躇する。そんな躊躇を経由しても、体は自然に深く結び付く。
最早、唇の間はセンチの尺度では測れないほどに近づいていた。吐息は当たらない。二人は同時に息を止めている。幼馴染の連携プレーは、こんな場所にも顔を出す。顔を出すから、二人は逃れられないのだ。
———もう、いいや。
二人は同時に、決意の息を呑みこんだ。
刹那。
亮介の唇に、ポツっと水が落ちた。それは、数ミリ先の紗江の唇から流れ落ちてきた。
「……紗江？」
暗い洞窟で、亮介は大きく目蓋を開けた。
———まさか、涙？
ふいに思い浮かんだ紗江の涙に、亮介は動揺した。いくらなんでもやり過ぎたのか？　と、
闇に慣れた視界で紗江の顔を覗き込んだ。
しかし、
「え？」
紗江は、至っていつもの紗江だった。その距離はやたらと近く、それほど大きくない目も大きく見えてしまうのだが、それでも普段通りの、否、かなり嬉しそうな紗江である。
無論、涙などは一滴も……。

「……あっ」
亮介は、涙の分けを見つけてしまった。
その唖然たる表情に、紗江も怪訝に首をかしげて見る。
「どうしたの？」
「えっと……うんと……」
「？」
亮介は、そっと紗江の後方を指差した。
「まずい、かも」
「まさか……」
――――敵兵？
そう察した紗江は、緊張しつつもゆっくりと背後へ振り返った。
亮介の指の先。
光る金色の物体。
それが何かは、紗江にはハッキリと目視できない。だが再び一滴、ポツリと水が紗江の頬に落ちてきた。それを指で拭ってみると、なんだか粘り気を帯びている気がする。
「なに、これ……」
頬を拭きつつ、紗江は天井を見上げてみた。
暗い視野に、目が慣れてゆく。
よく見れば、そこにも金色の光が、ポツ、ポツ、ポツと……。

「……」

天井に、びっしりとコウモリが張り付いていた。

「嫌ぁあああああああああああああ――――――――――――――――」
乙女の発した高音質なこの悲鳴は、音波を扱うコウモリ達には迷惑極まりなかった。キーキーと声を出し、エコローション（反響定位）により危険物（紗江）を察知すると、一斉に翼を羽ばたかせた。
これに、紗江は思わず痛みのとっくに引いた足で立ち上がる。す

ると、滑りのある岩に靴の裏がヌチャっと音を鳴らす。
———まっ、まさか！
その「まさか」である。二人は大量の糞にまみれたベッドで絡み合っていたのだ。
「紗江、落ち着け！」
亮介が体を起こした。しかし、紗江は見た。亮介のさらさらショートヘアーから、ペタペタと水滴が落ちているのを。そう、それはすべて……。
「嫌ぁああ———————。そんなの亮君じゃないぃあああああああい！」
「おい、紗江！」
紗江は走った。処刑の身代わりとなった友のためでもなく、結婚を控えた妹のためでもなく、紗江は走った。その背後に亮介を引き連れ、大量のコウモリを引き連れ。紗江は走った。
二人を追い立てるように、コウモリ達は奇怪な声を発して群がってくる。コウモリ達の超音波はこう言っていただろう「誰の庭で、イチャイチャやらかしてくれとんねん！」と。
コウモリにまでエロバカップル認定を受けた二人は、ついに洞窟の入り口へたどり着く。そして外の光を見るや否や、ハリウッドスター並のダイブで洞窟を脱出したのだ。
二人が飛び出た洞窟から、大量のコウモリが噴出されていく。
「あ、危ぶねぇ……コウモリ、怖ぇっ……」
「……うん」
とはいえ、これで一難は去ったようだ。そう、察した二人はほっと溜息をついた。

ペチン。

安堵の瞬間、二人の額に何かが当たった。
———まさか……また糞が！

顔を上げてみると、そこには二人の軍服姿の見知らぬ男達。

「……あれ？」

ピィ――――――――――――。

笛の音と、藪から飛び出た管理員。

「サバイバルゲーム部。２名ヒット！」

――――……。

『えええええええええ――――――――――』

待機部の４ポイント目。

それは苦しくも、司と大五郎が再スタート切った直後であった。

第三章　（十二）

山中に設置されたスピーカーから黒姫のアナウンスが聞こえてくる。
「サバイバルゲーム部2名。ペナルティタイムの消化により、只今よりゲームに再度参戦を許可します」
アナウンスを耳に、茜は拳をぐっと握った。
「よし、まずはあいつらと合流して反撃に……」
そう言っている傍から、次なるアナウンスが聞こえてきた。
「サバイバルゲーム部、2名のヒットにより、待機部には2点の加点。尚、被弾者2名には10分間のペナルティが課されます」
「なんでよ！　なにやられてんのよ、あの二人は！」
八つ当たりにアナウンススピーカーへとキャンキャン騒ぐ茜に、冬治が冷静に指摘した。
「おい、そんなに声出してっと、見つかるぞ」
「分かってるわよ！」
一刻も早く反撃に出たい茜としては、フラストレーションが溜まるだけの展開であった。
時間は残り20分。点差は4点。広大なゲーム範囲を考えれば、ほぼ絶望的とも言える状況である。
考えれば、考えるだけ、希望的数値は下がっていくばかりであった。
「……どうせ、いやらしい事でもしてたのよ……あいつら」
バリバリと金髪を掻きむしりながら、茜は山を見下ろす崖に腰をおろした。カリカリと爪の先を噛みながらも、じっと広大な山を見つめながらも、口から出てくる言葉は愚痴ばかりとなっていた。
「おい、茜」
冬治の声にも、茜は顔を向けはしない。怒りと絶望に負けぬよう、自身の精神と戦っていた。

声をかけても動かぬ彼女へ、男は歩み、何かを差しだした。
それは、ピンクと白色模様に渦を巻くロリポップ。
「……何よ……馬鹿にしてんの？」
茜は冷徹に飴を睨みつけた。それを気にする様子もなく、冬治は茜の横へ腰をかけると、飴を差し出したままに呟いた。
「爪なんか噛むなら、こいつでも噛んでろよ」
「うるさいわね！　こんなものを噛んでたらガキ臭いじゃない！」
「爪を噛んでてもガキ臭ぇけどな」
「うるさい！」
茜はプイっと顔を背けると、もう冬治の方へは顔を向けなかった。
夏も終わりを告げる、冷たい秋風が茜の髪を揺らした。
冬治は嘆息し、広大な山を見ならが呟いた。
「お前、何にも分かってねぇな。この戦い」
ピクリとも動かない茜の背中へ、冬治は続ける。
「俺達な、顔が良いおかげで女に苦労はしてねぇんだよ。待機部の奴等が女を欲しがる理由なんか俺には分からねぇし、興味もない。入部数日の女生徒が俺達の前から居なくなったとしても、別にどうだっていい」
「……は？」
茜はゆっくりと振り返った。その顔には焦燥でも悲愴でも無い、困窮が浮き出ていた。
「意味……分かんないんだけど」
漸く顔を向けた茜を、今度は冬治が無視して話し出す。
「まぁ、紗江が取られると痛手だな。亮介は紗江の居る前でしか遊べねぇようなガキだからな。ただ……それだけだ。実質、それだけのために、俺達はここで戦ってる」
淡々と話す冬治の言葉は、茜の瞳孔を薄く縮める。冷たい動悸が、棘を刺す痛みを帯びる。
「何……それ」
呆然と佇む茜へ向けて、冬治の平然たる声が突き刺さる。

「お前のために、戦う義理はねぇんだよ」
気付かないように顔を背けた事実を、目の前に突きつけられてしまった。
彼が言う事は、正しかった。道徳という稚拙な概念の箍を外せば、茜は彼等にとって大した価値がない。損得勘定、例えば義理を金に換算した時、サバゲー部にとって義理のない茜など無価値でしかない。むしろ彼女は、売られて初めて価値がつくともいえる。
そんな事は承知していた。承知していたからこそ、役に立とうと躍起にもなり、虚勢を張って覆い隠したりもした。馬鹿なサバゲー部員に、見抜かれるはずもないと思っていた。
だが、冬治はそれを見透かしていたのだ。ただ同じ部活だという理由だけで守ってくれるほど、安易な高校生ではなかった。
茜は、地面を見つめた。
「あいつ等はお前の強引なペースにハマってたみたいだが、どうも俺はそういうペースが苦手でな、裏ばっかり見ちまう人間なんだよ」
落ちて行く小さな肩には、淡々と語る声が自分を下碑する罵声に聞こえた。
落胆する茜の様子に、冬治は目を細めて息を忍ぶ。
一つ涙が、その場に落ちた。
それを見計らったかのように、冬治は茜の眼前へロッリポップを差し出した。
「ほらよ」
「……なに……ば、馬鹿に……してんの」
鼻声で俯きながらも、飴から視線を逸らせる。
すると、頭の上からクスっと笑い声が聞こえた。
「鞭と飴は、一緒に出すから効果的なんだよ」
どこか楽しげな声に茜は顔を上げてみると、そこにはここへ来て初めて見る、冬治の微笑みがあった。

「えっ……。あっ」
それは、どう見ても茜を攻める視線ではない。緊迫と弛緩の狭間に立たされた茜は、何をどう声に出せばよいのか分からなかった。
冬治は嘲笑すると、ガバっと山の見取り図を広げ、俯瞰する山へ顔を向けた。
「お前、もっとストレートに生きる人間なんじゃね？」
「……は？」
冬治は地図と山に目を向けたまま、答える。
「銃を買いにいった時、教官ぶって訓練してる時。お前、いい女だったぞ」
「はっ……はぁ？　……はぁ！？」
闇に落ちていた赤い血液が、一気に茜の顔へと登ってきた。瞬く間に白い肌は真っ赤に染まり、視線も虚ろにあちこちへ飛んでしまう。
「でも、今は駄目だ。不細工なガキでしかねぇ」
飴と鞭、喜怒の切り返しの多さに茜は混乱してしまった。
「なっ！　ど、どっちよ！　あんたこそ普段と違うキャラで話しかけんじゃないわよ！　ほ、褒めるか貶すかどっちかにしなさいよ！」
カッカと怒る茜に、かっかと冬治は笑った。
「人にはな、いくつも仮面が必要な奴もいれば、素顔のままで生きていける奴もいるんだよ。勿論、お前は後者だがな」
「後者……って」
「好き様にやってみろよ。義理だのなんだのと悶々としてるお前には、なんの魅力も感じねぇんだよ。どうしてもやりたい事があるんだろ？　それ以外の事は、こっちに押しつけろ」
「で、でも……、でもあんた達だけじゃ何もできな……」
その時、茜は口を閉じた。
荒々しかった冬治の瞳が、寒気を帯びるほど落ち着いていた。山全体を鳥瞰する様に、とてつもない集中力が溢れだしていた。
不意に訪れた、冬治の新たな仮面。それを息を殺して呆然と見つめ

た。
崖の端に冬治は胡坐を組み上げると、眼下に広がる山中へとその目を凝らした。
そして、毅然と呟く。
「二人」
すぐさま冬治は、地図へとペンで×印を。
「一人」
またも地図へと×印を。
「二人……ん、あれは司達だな」
今度は地図に○印を。
――なに、してるの……。
「後二人は……あぁ、完全に逃げ切り態勢だな。あんな場所じゃ今から行っても間に合わねえな」
更に二つの×を地図の端に書き込み、ぐるっと山を見渡しながら頬を掻いた。
「んん……佳澄は……さすがに尻尾は掴ませてくれ……おっ、いたいた……」
最後に一つ、×を書き込んだ。
その間、僅かに２０秒。今はペナルティ中の亮介ペアを除き、参加者全員の所在を書き込んだ。
「なっ……何してるのよ」
解せない冬治の言動に、驚愕よりも先にはてなマークが点灯した。
「は？　分かんだろ。見える奴だけ印をつけたんだよ」
「見える奴だけ……って、あんた、ここから……見えるの？」
ロリポップを握りながも、茜も山中を鳥瞰してみた。しかし、そこには青々とした樹海が一面に広がるだけであり、見えるとしてもごつごつと禿げた岩肌だけである。
「う、嘘言ってんじゃないわよ！　こんな範囲、双眼鏡でもなければ見えるはずがないじゃない！」
ようやく驚き始めた茜を見てか、冬治は鼻でクスっと笑ってみせ

た。
「俺の視力、８・０だからよ」
「は、はちてんれい？」
これは単純計算で、８キロ先の物が認識できる視力である。当然、茜は驚いた。驚きと同時に、怒りも込み上げた。
「な、なんでそれを初めに言わないの！　知ってれば、いくらでも作戦は作れたでしょ！」
「訊かなかっただろ」
「訊くわけないじゃない！」
「ふーん。隠し味を持ってんのは、俺だけじゃないぜ？」
その言葉に、イラっと眉間に皺を寄せた。
「はぁ――――？　遅っ！　何でそんな事を今になっていうわけ？情報戦こそが近代戦争の根幹を締めてるくらい、あんたにも分かるでしょ！　今頃になって自慢げに暴露してんじゃないわよ！　だからあんたは糞メッシュなのよ！　糞メッシュ！」
叫び狂う茜へ、冬治は地図を差し出した。
「探らなかったお前が悪いな。まぁ、元気が出てきたみたいだから、ついでに確認しとけ」
「はぁ？　何をよ！　今更何を確認すんのよ！」
冬治は、地図の一点を指差した。
「決まってんだろ。佳澄が、今どこで何をしているのか……って事だ」
差された点は、東葛城山の西口ルート、その三合目あたりである。
「ここ……って」
西のルートは、正規の登山ルートではない。ある場所へ行くためだけに作られた、血塗られた山道。
一瞬にして、茜は佳澄の意向を読み取った。読み取ると同時に、こめかみへビギィ！っと血管が浮き出ていた。
「あの……糞女」
どうやら冬治も、その意味に気付いたようだ。

「今から、俺達が殺れる雑魚はせいぜい3人。相手の持ち点が4点となると、ポイントが足りねぇな……」
茜は呟いた。
「……分かってる」
ギラギラとした瞳を光らせて立ち上がった。二丁の拳銃に手をかけると、グリップをぐっと握りしめる。
そして、小さな背中を大きく震わせ、一歩二歩と山へと進んだ。
「雑魚は……任せたわよ」
「おい、行ってこい、クソチビ」
冬治は振り返らずに、片手をあげた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7527p/

葛城高校サバゲー部 〜サバゲーなんかやらないんだからね！〜

2011年8月1日03時35分発行